
魔法少女物騙り

仙國 恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女物騙り

【Nコード】

N8890X

【作者名】

仙國 恭介

【あらすじ】

魔法。それは「夢を叶えるためのもの」だった。“完璧の魔女”と称された少女珠飾ルリカは生徒会長として規格外の依頼を遂行していた。そんな折り、魔術師が現れる。そして、そこで一族を皆殺しにされた「復讐者」である貴之憶良に出会う。彼らは共に「異常」だった。それは双方とも知らない「異常」だった。その「異常」は行く先に全ての魔術、そして「魔法」を巻き込んでいく。彼らは魔法を行使し、自らの「願い」を叶えるために動いて行く。

魔法使い。

現在確認されている数、約八名。

極少数である。

魔法。

それは『夢を叶えるためのもの』。

根本的な原点はそこにある。

漫画やアニメでは攻撃魔法や防御魔法、補助魔法など多くの種類がある。この世界でも等しく同じで、攻撃魔法、防御魔法、中には結界術、回復術など様々な種類がある。

これらが、魔法の原点『夢を叶えるためのもの』から派生したものだとする、と、“争いに勝ちたい”といった『夢』が叶ったことになる。

争いを望んだが故に出来てしまった攻撃・防御魔法。

だが、“魔法”とは異なっている。

敵を討つために創られた、“魔術”である。

“魔法”はあくまで夢を叶えるためのものでしかない。攻撃や防御の類の術は存在しない。

“魔術”は術を唱えなければ発動することすら出来ない術式型の産物。

“魔法”は制限やルールが無く、発動できる夢からの産物。

これは決定的な違いであり、この世界に関わる者にとっては重大

な事項である。

“魔法使い”は約八名と言ったが、“魔術師”になると大きく変わる。

約百万人。

なぜこれだけの“魔術師”がいるのかというと、シスターなどの信仰者を含めるからである。

意図したもので無くとも、お祈りすることが術式を発動させるためのものであったり、聖歌を歌うことが術を唱えていたりするからである。

実際、自分のものとして魔術を使える魔術師は過半数を切る。

多くの人間が知らぬところで何かの力となる術を詠唱しているのだ。

彼らは何も知らずに。

現在八名中五名の魔法使いはどこにいるのかが把握されていない。のち、三名は把握されており名は、

『英国武士、ルール＝ウィザウト』

『雷雲不運、綾城彩乃』

『神々の失敗、綾城椎奈』

以上、彼ら三名が確認されている魔法使いである。

ウィザウトについては英国の方で公務に就いている。ウィザウトはその魔力と才能、そして人格の良さで皇室に迎え入れられ、ボディガードのような存在として働いている。

綾城彩乃・・・本名、妃彩乃^{きさい}。彼女は幼い頃両親を亡くし、孤児として生活していた。そこで現れたのが綾城家である。綾城家は早々に彩乃の魔法使いとしての才能を発見していた。それは、魔業界^{まぎようかい}での地位確立を狙ったことだと推測がつく。

魔業界についての詳細は六百三十ページを参照してほしい。

綾城椎奈、・・・『神々の失敗』

彼女は魔業界でも名を馳せている人物である。又、魔業界では別の異名を持つ。

『無敵』

無敵・・・彼女はそう称されている。名の通りの無敵であることからその名が付いた。

ここからは私の私論となるが無敵とはなんとも悲しいことだと思う。少年のあこがれと言つてもいい無敵と言つ名。だがこれは最強ではない。無敵・・・敵が無い。これは競争を生まず自信の成長も測定できないというなんとも味の無い人生になってしまふのではないだろうか。企業然り、競争無くしては品質のよい製品は生まれない。それと同じだ。

それを踏まえると人間として生まれ落ちたのは『神々の失敗』としか言いようが無い。なんとも皮肉な代名詞だが、的確に捉えたネーミングだと思う。

最後に魔法使いについて述べておくが、今現在、魔法使いは魔法を使えない。まあ元々ある特殊条件下でしか使えないが。理由は次期に分かると思う。この本がこの魔業界にて出版されるのは“表”時刻で九月の二十九日になっていると思う。その三、四週間後には“魔術師”のパーティが始まる。“魔法”を唱えるために“魔術師”が争う。この本を手にとって読んだ者が徳をするようにしておいた。買ってくれた御礼だと思ってくれ。私からのささやかなプレゼントと言ったところだ。

【黒書 P132】 P135 魔法使いについて Fr
om 鷹狩 たかがり 悠久 ゆうきゆう

「君の願いを叶えてあげよう。」

魔法は夢を“叶えるためだけのモノ”なのだから。

君の願いは私が叶えてみせよう。

魔法は夢を“叶えられない者が創ったもの”なのだから。

君の願いは僕によって叶う。

“魔法使い”としてね」

A 高校 放課後

2年4組、出席番号6番、大人しめ、性別男、17歳、貴之きのおくちの憶良は徐に話しを始めた。

「俺が出会ったのは昨日のことだ。授業サボタージュしていたらそいつがいた。」

そう。

『たまかさり 珠飾ルリカ』だ。

お前も知ってるだろ？ “完璧の魔女”のことを」

「知ってますよ。2年生にして生徒会長、2年4組、貴之先輩の隣の席、性別女、珠飾先輩ですよね」

そう答えたのは、1年1組、出席番号1番、性別女、(まだ)15歳、綾城彩乃だ。

彩乃は黒髪を肩まで伸ばしている。端正な顔立ちだがどこか幼さを残しており、人に寄れば童顔と捉えられても致し方ないだろう。胸ポケットにはヘアピンが二つ留められており、その横にはウサギのマスコットのなものが留められている。それらから女子高校生としての雰囲気的印象づけられる。

貴之と彩乃は机を挟んで向かい合って座っている。傍目から見ればカップルが話し合っているようにも見える。

「ああ、そうだ。あのやたらと仕事熱心で、俺等凡人にできないようなことを平気でやり遂げる化け物女だ。“完璧な魔女”と称されるのも頷けるぐらいにな。彼女にとって俺等がすげーって思っていることは、“たかが仕事”でしかないんだろう。・・・まったく、俺等普通生徒が可哀想に見えてくるな」

「同意見です。あの生徒会長って人はどこか人間としてぶっとんでもますよね。それを踏まえると先輩が言ったように“完璧の魔女”というネーミングは最適ですね。誰が考えたのですよ？ そのネーミングセンスには一目置くだけの価値がありますね。いやはや、中、高校生の発想力というものには驚かされるばかりです」

彩乃はうんうんと二回首を縦に振る。

貴之はそんな彩乃に、お前も高校生だろうが。と、注意すると腕を組み椅子の背もたれに寄りかかる。そして話しを再開した。

「とにかくにも俺はこの学校の屋上であの生徒会長と遭遇した訳だ。・・・ここからがあの生徒会長らしいのだが、俺は出会って早々に説教をされた。まったくいい迷惑だったよ」

「どんな？　どんな？」

彩乃は興味津々に貴之に訊ねる。

貴之は少しばかり嫌な顔をするとその時の説教について話しだす。

「こう言った。『貴之君！　授業を休まない！　高校生たる者きちん
と勉強しないと』だってさ。　でだ、俺はこの生徒会長も授業に
出ていないことに気づいてこう言い返したんだ。『お前も生徒会長
のくせに授業出てねーじゃねえか。人のこと言える立場かよ』って
さ。そしたら反論、・・・と言うか事実を述べられた。『そのこと
なら心配しなくていい。私は高校生が受けるだけのカリキュラムは
全て把握済みだし、単位取得も済んでいる。理事長からも“課外活
動の自由化”を認められている故、こうしてサボった生徒を矯正し
たり、依頼を遂行したりしているの』だとさ」

彩乃はくすくすと笑っている。この話しのどこに可笑しい要素が
あったのか分からないが、彩乃はくすくすと笑う。

それは貴之には理解できなかった。

彩乃は一頻り笑い終えると人差し指でこんこん、こんこんとリス
ミカルに机を叩きながら貴之に問いかける。

「貴之先輩さあ、そんな文武両道、才色兼備、天下無双の生徒会長
の依頼解決シーンって見たことある？」

「ああ、依頼な。あの生徒会長目安箱使って依頼の申し出を受けて
いるんだよな。その解決シーンか、・・・残念ながら見たこと無
いな。きつととんでもない荒技で片づけるんじゃないか？　そんな
感じがするよ」

「うん、だいたい当たってる。いじめられっ子的な子の依頼だった

んだけどさ、『不良グループを一網打尽にして欲しい』ってものだったの。で、解決シーンのところに移行すると、まあ凄かったよ。壁を走るわ、垂直跳びで五メートル程飛ぶわ、パンチで校舎に穴けるわでとんでもなかったよ。不良グループは即刻逃げたそうとしたんだけど・・・生徒会長が許すはずもなかった。全員とっ捕まえて説教してたよ」

貴之はマジかよ、と一言言って天井を仰ぎ見る。

「そういえば裏門から入ったところから見えたけど、穴空いてたな」

彩乃は貴之の青ざめたというか、あきれ果てたというか、なんちゆうーか、かんちゆうーか、の顔を見て小さく笑う。

「でもな、綾城・・・」

「？」

貴之の突然の発言に少々吃驚びっくりしてしまった。

その言葉には何か重たいものがかかっているように感じられる。

「俺は、その魔女、もとい生徒会長に完全マークされてしまったんだ。きつと、いままできちんと授業に出ていないことがバレて矯正しようと思起おこりになっているんだと思う。そこでだ綾城」

「！」

「・・・どうした？」

「いや、なんでもありません」

彩乃は一瞬校舎の外、窓から見える遠くの景色を見た。そこで、貴之が不振がったのですぐに首を戻し、貴之の疑問に答えた。彼女は、その異変を貴之に気づかれなかったが、今の行動にはどこか腑に落ちないものもあるだろう。貴之は疑問に思うはずだ。しかし、それが彼女にとつての大きな失敗だったかというところでもなく、彩乃はすぐに平常心を取り戻し、貴之に対応した。それは彼女がそういった場に慣れていている証だといえよう。

貴之はさほど気にしていないようだ（たぶん）。彩乃はそう思った。

「そうか、それならいいんだが。で、その生徒会長に目を付けられた俺のために少し協力してほしいんだ。・・・具体的に何かして欲しいって訳じゃ無い、そうだな・・・せいぜい何かあった時に口裏を合わせてくれたらいいかな」

「何かあった時、って結局“サボる時”ですよね。・・・まあ、いいですよそれぐらい。別にたいしたことじゃありませんしね」

ああそうだ！

彩乃は閃いたように言う。

貴之はそんな彼女の言葉の意味が分からずに不思議そうな顔をする。仰ぎ見ていた天井から彩乃へと死線を戻す。

「貴之先輩にもお願いしておきます。私が“何かあった時”助けてくれませんか？ 白馬の王子様テイストで」

「・・・なんで？」

貴之は率直に思った答えをそのまま口にした。

彩乃は続ける。コンコンコンと机を叩きながら。

「え〜だって、その〜、なんて言うか、・・・え〜っつと・・・」

彩乃は言葉を濁しながらそのようなあやふやな答えを陳列する。

彼女の顔はうつすらと赤みを帯びている。それを隠すように右手を右頬に添える。

貴之はそんな彼女の心境も知らずにその濁した言葉の意味が分からずにう〜ん、う〜んと考えこんでいる。組んだ腕の右手人差し指で彩乃のコンコンコンに合わせてノックする。

「とにかく、先輩は私の身に危険が生じた時に颯爽と現れて私を奪って・・・じゃなかった、私を救い出して欲しいのです!」

「そんな状況は生まれたいし、そんな状況になった時に俺はお前を助けられるだけの力はない。残念ながらお前の白馬の王子にはなれないよ。せいぜい白馬の王子の家来が食べる野菜を提供する農民だよ。おくらだけに」

「ちょっとこじつけ感が否めませんね。うまいっちゃ、うまいですけど。おくらだけに」

「おくら好きなのか?」

「ええ、両方のおくらオツケーです」

「両方のおくら?」

貴之は彩乃の言いぐさが途中までしか理解できなかった。なので、最後の方のダブルおくらについて理解しえることはなかった。

「さてと、私もそろそろ帰りますかねえ。お姉ちゃんが心配しますし。……もつとも私のお姉ちゃんなら世界中どこにいても私を見つけれそうですが」

彩乃是指コンコンコンを止め貴之に話しの終了を告げる。彩乃はもう少し貴之と話したかった気持ちは残っているが、“あれ”を放っておく訳にはいかない。“あれ”がただの雑魚であっても一応は警戒しておくべきものである。

（まったく、この時期に余計なことをしなすんなんて感じだなあ。もうじき“ハロウィン”が始まるんだから忙しいってのに。私は忙しくないけど。……なんかみんな慌ただしいと私まで慌ただしくなって『忙しい』って感じちゃうのよねえ）

「貴之先輩アデュー　また明日学校でお会いしましょう。彩乃は毎朝貴之先輩とぶつちゅーできることが楽しみで仕方ありません」

「そんなことをしている覚えは無い」

「そにかく、さよならです。では明日」

「おつ」

彩乃はゆっくりと教室を出て行った。しかし、彩乃が廊下に出た後にばたばたとした足音が聞こえる。たぶん教室から出た後に走っていったのだろうと推測がつく。

「……明日か」

今日は九月十一日。

貴之は再び天井を仰ぎ見るところ眩いた。

「今晚また会おう。・・・じゃないか？」

0 - (1) 放課後（後書き）

初めまして、仙國 恭介と申します。お読みいただき有難うございます。この作品は「魔法とは何か」と言う点を中心に書き進めていきます。また、誤字・脱字などがありましたらお教えください。最後によろしければこの作品にお付き合ってください。評価などを頂けると幸いです。

学校生徒会室

彼女はとんでもないペースで要望資料、新しい学校行事予定表、そして新刊の週刊少年ならに目を通していた。

一回述べたがとつもない速度である。1分間に約二十枚の資料を把握し、サインしていく。その間にコミックを読むことを欠かさない。実際、彼女は全て読んでいる、『全て』だ。その資料が書かれた日付、印刷によるページ番号、どのキャラが何の台詞を言ったか、その他諸々。彼女は誤字脱字も見逃さずに見ているので、この資料の処理が一通り済んだら誤字脱字の訂正に入る。

そんな彼女、珠飾ルリカの放課後だった。

「今日はいつもより少ないな」

ルリカは週に二回資料処理をしている。一週間で受理手続きをしなければならぬ資料はざっと三百を超える。それもそのはず、理事会からの資料、学校側からの資料、校区外工場見学の資料、学校の設備点検などそのバリエーションは多種多様である。その一方生徒からの『依頼』を受ける作業も並行して行っている。

「・・・依頼が来ているな。おいしいシチューを作って欲しい？
・・・こちらは銀行のシャッターにピッキングをして欲しいか。これはダメだな。・・・いじめから助けてほしいか。よくある相談だな」

依頼資料を読み続けるルリカ。しかしその間も他の資料にサインや受理手続きを行う作業を休めない。

続いて依頼資料の続きを読む（2・55秒！）。

これは学校に目安箱を設置すると必ずセットで起こる悪戯の類だった。しかし、ルリカはそんなことをものともせず、にやにやに依頼を確認していく。

「生徒会長は彼氏居ますか？」

「いない」

「生徒会長の好きな食べ物は何ですか？」

「デコ弁とへしこだ」

「生徒会長のあの体育祭の時のネコとスク水のコスプレにはどん引きしましたー（生徒数の約80%）」

「かわいかっただろ？」

「生徒会長のお召し物の色は!？」

「白と決めている!！」

まったくもって依頼では無かった。目安箱を設置するとどうしてもこう言った悪戯が出てくる。それは避けられないものでもある。世の中には“無意味”を“有意義”にしようとする馬鹿な人間が多くいることを表している。一概に“無意味を有意義に仕立て上げる、そう思い込む”ということが悪いとは言えない。それを証明するよう存在しているのが、“魔術”であり“魔法”だからだ。

「さて、下らん依頼・・・というか質問が多かったな。いやはや、もう一度根本的なところから学校作りをやり直さねばならんな。日

々精進とは良く言ったものだ。私も日々生徒のためにと尽くしてき
たつもりだが、こういつた輩が出てくるということは私の為体ていらくさを
呈しているではないか」

ルリカは自分を責める。

ルリカ自身は悪くないが、自分を責めるだけの要素がさっきの依
頼の中に混じっていたということだろう。その姿勢には人間が見習
うべき要素が多く含まれている。

「さてこのぐらいで今日は終わりにしよう。おなかも空いたなあ、
そうだ！ 帰りに八つ橋のお店によって買って帰ろう。否！ 不謹
慎ではあるが立ち食い、・・・もとい座り食いしようではないか！」

ルリカは生徒会室生徒会長机生徒会長専用筆入れにペンを入れる
とすつと立ち上がりのびを一つする。

今日終わらせた資料なんと千六百五十二冊！

これらを約一時間で終了させた。

ルリカは何かに気づき、慌てて壁にセットされていた器具を弄り、
のどの調子を整えた。

「え、えゝ生徒のみんな！ もうおうちに帰ったか！？ 今週はテ
スト期間！ 家に帰ってたっぷり勉強するがいい！ 今から私が
校内巡回するから残っていた輩は全員明日の朝反省文を十二枚書い
て貰うぞ！」

ルリカはそう言い切るとマイクのスイッチを切った。

彼女が言った反省文の件は事実、事実であり、実際何十人も生
徒がその罰で朝から涙をのんだ。ルリカ曰く「この程度の仕置きで
泣くな！ 私は毎日五百枚に渡って日記を書いているぞ。もし私が

何かの事故で死んだ時に両親がこれを見て思い出せるようになる!』
だそうだ。その台詞を聞いた生徒は『あなたは事故では死なないよ』
と以心伝心したらしいが。

2年4組

「なんでを残っている? もう下校時刻はとっくに過ぎているぞ貴之君」

ルリカは教室の一番後ろ、窓際から二番目の席に座っている貴之に話しかけた。

貴之はその声を鬱陶しく聞いており、怪訝な表情を浮かべている。関わんな、とでも言いたげに。それを表すように頭の後ろで手を組み、ルリカから顔を窓の外へと背けた。

「貴之君、君が何でこんなところにいるのかは分からないが、なぜ独りなのかは分からないが、私でよければ友達になつてやるぞ? きっと君の人生も少しはいい方向へと傾くだろう。君のような人間は多く見 てきた、故にその者達がどのような人生を送ってきたかも分かっているつもりだ。さあ、貴之君。私が君の友達になつて君の人生をよくしてあげよう」

ルリカは諭すように貴之に述べる。その言葉はカウンセラー染みでいて、教科書があるならこれぞ正解といった口調と内容だった。それに対し貴之はこう答えた。

「あのな、俺は学校に友達ができなくて自暴自棄になった訳じゃ無

いぞ。サボリ、授業を真面目に受けないことによつてみんなから心配されて自分の存在をどうにかして印象づけようとする馬鹿じゃねえつて。・・・今日は用事があるんだよこの学校に」

「・・・放課後まで残つていなくてはいけないものなのか？ まさかとは思つが好きな女子の席の椅子の脚を舐めようとする訳では無いよな！？」

「椅子の脚舐めるつて・・・そんな訳ねえだろが。なんだよ『脚』つて。そんな奴この世にいるか！ つーかそもそもそこは『リコーダー』だろ？」

「いや、分からんぞ。世界広し・・・だからな。というか『リコーダー』を舐めるのか？」

「大多数はな」

誤解を招く言い方をする貴之。別に日本中、もとい世界中の男子が好きな女子のリコーダーを舐める訳がない。あつたとしてもそれは変人で異常人で逮捕されるべき罪人だ。

ルリカはリコーダーの話を切り上げ、貴之の学校に残る理由について訊く。

「話しを戻すが、貴之君はどうして残るんだ？」

貴之は頭の後ろで組んでいた手を元に戻すと首を垂らす。そしてそこからゆつたりと顔を上げる。

「黙れ小娘」

貴之の目は彩乃やルリカと話していたものでは無かった。
無。

言い表すならそれである。無・・・感情の一切を無くしていた。
まるでルリカを景色の一部として眺めているような目だった。

これ以上俺に関わるな・・・そう残酷に告げていた。

ルリカは尻餅をつく。怯^{ひる}み、足がもつれてしまったからである。

これはルリカだからといえよう。もしこれが“普通の”生徒だった
ら尻餅どころか貴之の目の変化に笑って反応していただろう。

しかし、彼女は“完璧な魔女”だった。彼女が執行する依頼とは
何も単純明快なものだけではない。

迫害を受けている集落を普通の街へ復興する依頼、やくざの同盟
解消などこの社会の“裏”の仕事まで行っている彼女である。やく
ざの同盟解消とは、マンシヨン経営をしている一般生徒からの依頼
だった。マンシヨンの場所が同盟を組んだ際、丁度領土の境界線に
立っており、奪い合いになるのではないかとその家の生徒が予想し
たからである。実際やくざの同盟とはそういったところこそ重点的
に話し合い、決定することなのでめったにない。しかし、一般生徒
が知るはずもなく生徒会長へ依頼した。その際、彼女はやくざの一
つを潰したのである。暴力で一方的に。

そんな実績がある彼女だからこそ貴之の目に怯んだ、そして恐怖
を感じた。それは防衛本能として最上級の仕事だったと思う。

「・・・どうした？ 生徒会長さん」

貴之はそう言う。

「・・・貴之君、君は一体なんなんだ？ サボり学生かと思いきや
中間テスト500点。かと思いきや期末テスト受けずに0点。君に
注目したのは何もサボっていたからだけでは無い、むしろそっちの
方面のアプローチが目的だったんだよ」

「へえ、そうなんだ。生徒会長ともあるうお方が、“完璧な魔女”と称されるお方が一端いっばしの男子高校生を相手にするとは驚きですよ。それとも俺に惚れましたか」

貴之は感情のこもっていない声でルリカに感想を述べる。

ルリカは立ち上がりスカートを払う。そして貴之に改めて問う。

「・・・君は本当に“普通”なのか？」

ルリカはまっすぐに貴之を見つめている。

「いやだな生徒会長、そんなに見つめないで下さい、照れますよ。

“普通”じゃないねえ。・・・そうですよ俺は普通じゃないですよ。魔術師です」

「・・・そうなのか」

「とでも言うと思いましたが？ どのSFですか？ まったく誇大妄想も大概にしてくださいよ、生徒会長さん」

ルリカは目を見開いて貴之の顔を窺う。そしてゆっくり頭を垂らすと「そうか」と呟き教室を後にした。

貴之は彼女のその行為に少々驚いていた。てっきりこの後も質問攻めに遭うと思っていたからだ。やけにあっさりと言けに悲しそうに出て行ったその背を貴之は眺めていた。

A 高校 校庭

「・・・ここか。ここに居るんだな、貴之憶良！」

黒のロングコートに身を包み、右手に杖を持った男は“誰にも気づかれずに” ゆっくりと校舎の中へと足を運んでいく。

目的は貴之憶良。対象はその。

A 高校から約2キロとある廃工場

「うーん、私の勘鈍ったかなあ」

彩乃は感じた魔力を頼りにこの場所に来ていた。

そう彼女は魔術師だった。

彩乃は廃工場の入り口から入り中見渡す。その工場には数々の重機が置いてあった。中には作りかけの物もあった。磁力によって鉄を持ち上げる機器があるところを見ると鉄鋼関連の工場だったようだ。彩乃は金属を主とする魔術師がいる可能性を考慮し、いつでも術式を使えるように身構えている。

彩乃は現在制服を着ているが、右手には杖が握られており、魔術師としての風格を呈している。

ガタン。

「!?!」

彩乃は即座に戦闘態勢へと移行する。そこに無駄な動きはない、彼女の戦闘経験の多さを裏付けている。

「誰？」

返答は無い、音は無い、・・・廃工場に響くのは彩乃の声だけだ。彩乃は慎重になりながらもゆっくりと音のした方へと歩き出す。

右手には杖、左手には一枚の紙が握られている。その紙は『神』である。紙に神が宿るとされている魔術分野を習得した彼女は紙によって神を召喚する。そう『式神』を。

しかし、彩乃の専門分野はそこではない。せいぜい一般よりちょっと上の魔術師が使う式神レベルだ。彼女の専門分野はむしろ式神という召喚系とは真逆にあると言ってもいい。

「出てきなさい・・・」

彩乃は誰も居ないだろうと、ただの偶然で起きた音であると推測している。が、それでも分かったうえで呼びかける。それは慎重すぎると言えばそうだが、魔術師が相手だった場合そういった過信は隙を生む。

彩乃はついに音のした場所へと辿り着いた。そこは彩乃がいた場所とは重機を挟んで反対側に位置する場所だった。ただ空いている空間だった。そこのは誰もいなかった。重機なども無く、また工具もなかった。

“だから彩乃は警戒した”。

「!?!」

彩乃は背後に魔力を感じた。彩乃は振り返ることも無く、前方へと転がった。そして魔力のした方向へ顔を向ける。しかしそこには何も無い。誰も居ない。ただ重機の重なりあつたところだった。

「汝、生を受け、汝、忠義を尽くさん・・・白蛇」

そう彩乃は術を唱える。

すると、彼女の持っていた紙から神が出てくる。

召喚術『式神、白蛇』・・・蛇、八虫類、変温動物、肉食。

彩乃によつて召喚された白蛇はぐねぐねと身体を捻らせ、くねらせ、彩乃の左腕に巻き付く。大きさはだいたい2メートル程でさほど大きくはない。・・・いや、訂正しよう大きい。一般の蛇に比べれば大きい。アナコンダやコブラと比べられては小さいものだがそれでも大きい。

彩乃は腕に巻き付いている白蛇の頭をそつと撫でると白蛇はそれによつて命令されたようにゆっくりと彩乃の腕から離れ、魔力を感じた方向へと、くねらせ這っていく。

続いて彩乃は右手に持っていた杖の先端を地面につけると術を唱える。

「永続よ、私を蝕み、永続よ、私を守れ・・・クリスタル代償の守護」カーテン

杖が地面と接している地点から透明の液体が一斉に放出される。その液体の純度は高く、とても透き通っていた。それらは彩乃を中心に半円を描くようにカーテンとなる。彩乃はその液体のカーテンの中に閉じ込められるようになっていく。

「さて、私を誘い出した犯人さん、綾城家のナンバースリーに勝てるかしらん」

A 高校

ルリカは生徒会室に戻っていた。生徒会長専用の椅子に座っている。この椅子はルリカの功績を讃え、理事会から贈られてきたものだ。

「貴之君・・・君は一人じゃないのか？　なぜあんな風に断る・・・」

ルリカはぼそつと呟く。

ルリカは生徒会長の机の上で手を組み、その組んだ手に額を押しつけている。

「私は一人だよ、貴之君」

ルリカはそう言う。

実際彼女に『友達』と呼べる存在はいなかった。それもそのはず“完璧の魔女”と呼ばれる程に完璧なのだ。誰も欠点のない人間に近づこうとはしない。欠点があるからこそ、弱みがあるからこそ人はその人と支え合って生きていこうと決め、友達となる。それが恋人だったりする。・・・多少誇大な言い回しになってしまったがそういうことである。欠点のない人間こそが人間らしくないのだ。最強であっても人間ならば人間。最弱であろうとも人間ならば人間。しかし、完全無欠となってしまうたらそれはもう人間では無い。

彼女はそれを認めている。・・・人間では無い、人間生らず

であることを。

故、彼女は貴之に友達になって欲しいと“願った”。言い回しこそ“なつてやる”だったが実際はなつて欲しかった。

しかし、彼女に『友達』はできなかった。

ルリカはゆっくり立ち上がると生徒会室の出口へと向かった。校内巡回を行うためである。

ルリカはA高校の中校舎中庭にいた。中庭に生徒がいるはずもないが、ある理由で中庭にいた。・・・厳密の言うならば中庭に来なければならなかった。

なぜなら。

黒服のロングコートを着た不審者がいたからである。

生徒会長として、“完璧の魔女”として、そして自分自身の自己満足のために不審者に立ち向かおうとここ中庭に来ていたのである。ルリカには勝算があった。やくざを一つ潰すだけの実力者、パンチで壁に穴を開ける力、垂直跳びで5メートル飛ぶ脚力、どれをとっても“一般人”は異なるスキルを持つ彼女にとって“一般人”は相手ではない、・・・少なくともその段階ではそう思っていた。

「貴様何をしている、ここはA高校の敷地内。もし何らかの理由で校内へ入りたいたのであればきちんと手続きを行うか学校側へ連絡を入れる。私は生徒会長だ。故、学校側への訪問連絡は全て私に報告される。今日、・・・少なくとも午後三時前まではそんな訪問連絡無かったぞ」

黒コートの男はにやりと一つ笑うとルリカに問う。

「なんでお前には虫除けが効かないのかねえ。お兄さん知りたくないなあ、君がどこの一族か、もしくはどこの所属なのか」

「一族？ 所属？ 何のことだ？ 私はA高校現生徒会長2年4組、^{たまかぎり}珠飾ルリカだが？ しかし、この答えは貴様の問いに的確に答えられているとは思えないな、貴様どういう意味で言っている？」

黒コートの男はにやけながら杖を持った右手で頭を搔く。「困ったなあ」と男は笑いながら言う。そこに本当に困ったという気持ちは感じられない。

男はルリカに向き直ると言う。

「ええつと、君生徒会長さんだつて？ ふん、そう。だったらさあ『貴之憶良』って生徒知らない？ ちよつとその子に用事があったね。ああ、心配しなくていいよ。お兄さんは“邪魔さえしなければ”君たちに害なんて与えない善良な」

魔術師だから。

男は一瞬でルリカとの距離を縮める。手を伸ばせばルリカの顔がそこにある。男はルリカの顔に触れようとする。

しかし、その手は空を切った。

「やるねえ」

「当たり前だ。私は数々の難関をクリアしてきたのだ、この程度ピンチにも入らん」

ルリカはその一瞬の間に校舎の壁へと飛び退き、壁に引っ付いている。

男はなお笑う。

「お前とやり合つのもそろられるが、貴之憶良・・・奴はきちんと殺さねばならんなのでな。先を急がせてもらつぞ」

「！」

ルリカは理解した。

貴之が狙われていると。

0 - (2) 訪問者×招待者(後書き)

お読み頂きありがとうございます。さてゆっくりと物語は動き始めます。この作品をどうぞよろしくお願いします。

0 - (3) 意味なき時間

とある廃工場

「いつまでそうやっているのかしらん」

彩乃は重機に向かって問いかける。・・・もちろん実際に重機に問いかけている訳ではない。『そこにいるであろう』魔術師に問いかけている。

彩乃は現在一匹の式神を放っており、その式神によって魔術師の特定を急いでいる。・・・別段急いでいる訳では無いが、どうしてもこの『見えない』という緊張感と圧迫感に耐えきれなくなる。また、持久戦に持ち込んだところで彩乃にメリツトはない。むしろ、彩乃のことを“綾城家のナンバースリー”と分かったうえで勝負をしかけて来たのなら、それ相応の術式や秘策を練ってくるはずだ。その時間をみすみす渡す訳にはいかない。

最悪の場合この倉庫ごとぶっ壊すという手があるが近隣にお住まいの住民に被害を与える訳にはいかない。なるべく、できることからこの倉庫内で決着を付けたい。

「・・・さて、隠れん坊は私あんまり好きじゃないのよねえ」
「・・・出ておいで坊や。いや、私より年上の可能性が高いか、出てきてくださいな」

変態野郎。

彩乃はゆつたりと説得するように言う。その言葉には微塵も感じさせないが、実際額にはうっすら汗を浮かべ、緊張している。
見えない。

暗闇の中足に当たったものが何であろうと怯えるように。ブラックボックスの自身が何であろうと怖れるように。それは人がもつとも苦手とする状況。 見えない。

戦闘経験の豊富な彩乃でさえその状況を好ましいとは思えない。思うことができない。

(お姉ちゃんならこんな状況、呼吸すること並に簡単なんだろうけど・・・私じゃ無理だなあ)

彩乃は透明な液体で包まれたカーテンの中から周りの状況を窺う。それは周囲から術、特に生物召喚系の魔術に警戒するためだった。下手に動いてトラップに引っかかる虞もある。

「いつまで続くのかしらん・・・この状況」

A 高校中庭

「貴之君を殺す・・・？」

ルリカは信じられないような言葉を聞いた。

貴之君が殺される？

貴之君はなんでこの人と関わっている？

貴之君は一体何をした？

貴之君は一体なんなの？

ルリカの頭の中は『貴之』という存在の“不確定さ”で一杯だった。この人物は紛れもなく『普通じゃない』・・・先程貴之に訊いたことがこの人物によって返答された。

「おいおい、お前本当に一般人か？ 壁に張り付くって・・・スパ
○ダーマンかよ」

黒のロングコートを纏った男は淡々と、呆れたように述べる。

現在ルリカは校舎の壁に張り付いている。・・・厳密に言うなら
掴まっているだが、とにもかくにも壁に張り付いていることに変わ
りない。

「お嬢さん、悪いことは言わない。さつさとおうちへ帰りなさいな。
・・・ああ、貴之の場所を教えてもらってからだけど。・・・それ
とも何か？ 貴之はもうここにはいないのか？」

男は見上げるような形でルリカに問う。

一方見下ろしているルリカは返答に困っていた。

どう答えるのがベストか。

下手に貴之の居場所を教えても貴之を危険に晒すだけだ。だから
と言って適当なことを述べては後日この学校に仕返しとばかりに来
られても困る。

今までこういった場面で使っていた方法。

完膚無きまでに倒す・・・か。

できるのか？ ルリカはそれを実行するべくして頭を猛スピード
で回転させる。彼女の人ならざる頭脳と人ならざる能力で、この男
は倒す方法を。

「お嬢さん、返事が遅すぎるぜ？ お兄さんもちよーっとばかり苛

立ってきたかな。・・・っーかさっさち言え、痛い目みたくなかつたらな」

コロスぞ。

殺す・・・。

何十回も何百回も聞いた台詞だ。不良ややくざを相手取っていると少なからずそういつた言葉を浴びせられる。しかし、ルリカはそれを“威嚇”だとして受け取ってきた。ただ、“一般人”が御託を並べているに過ぎないと。

今は？ この男は？

今まで感じたことの無い殺気、覇気。

得体の知れないこの男が発するとそれ相応の緊張を感じるし、恐怖を感じる。いくら、“完璧の魔女”と称されようが、所詮は人間で高校生なのだ。ちよつとばかし異常な。

ルリカは恐怖との葛藤の末一つの答えを男に返す。

それは、“生徒会長として”の勇氣ある一言だった。その役職が彼女の勇氣を奮い立たせたのかも知れない。

「貴之君の居場所は“不審者”には教えられない！ 現生徒会長珠飾ルリカがそんな“一般生徒”を危険に晒すような真似をしでかす訳がなかるう！」

「へえ、お前男じゃねえか。・・・いや、女か。別嬪さんのくせして中々見所のある女だな。好きだぜそういう女はな」

「光栄に頂くよ、不審者」

ルリカは壁を走る。地面と平行に、壁と垂直に。

男はその動きに合わせて移動する。男は何かの術を唱える。それ

はもちろんルリカの知らない“魔術”と呼ばれるものだった。

ルリカは壁を蹴って、男に向かって飛ぶ。

先手必勝。

数々の修羅場をくぐり抜けてきた彼女だからできた行為。得体の知れない男に立ち向かう勇氣。

男はそんなルリカの突然の攻撃に対して慌てることもなく術を唱える。

そして。

ルリカは空中で“何か”を感じ取る。視覚情報では捉えられないが、肌の感覚で分かる“異常”。そしてその“異常”が迫りくる感覚。

「つ……」

ルリカの頬を何かが掠める。

“掠めた”のはルリカが咄嗟に空中で身体を半回転させたことが大きいだろう。もし、そのまま突っ込んでいれば“異常”によってカウンターをもらっていたはずだ。

「おお、関心関心、まさかこの攻撃が一般人に躲されるとはな、驚きだぜ」

男はさして驚いた風には見えず、ただ失笑を浮かべるだけであった。

逆に不安定に着地したルリカの表情には余裕という文字が浮かばない。説破詰まっているという表情だ。それもそうだが、“異常”を回避することに、たった一回回避することにどれだけの集中力とどれだけの緊張感を消費するのか・・・計り知れない。

そんなルリカの緊張を余所に魔術師である男はぺらぺらと話します。

「お嬢さん、君すばらしいよ。君がもし魔術師だったらと思うとぞつとするね。俺みたいなの『水素を操る魔術師』でも関心に値するよ」

男は自信気にそう述べた。

それは完全に失敗であつて、完璧に失態だつた。

その台詞を言ったのが、“普通”だつたら差し支えない、むしろ圧迫するうえでこの上ない台詞となつていただろう。しかし、言つた相手が失敗だつた。

“完璧の魔女”は魔術を使えなくとも魔術師に勝つ算段をし始めた。

そしてその作戦は後にこの魔術師を苦しめることとなる。

□は災いの元。

とある廃工場

「・・・壊すか」

綾城彩乃はそう呟いた。

実際状況が全く動かず、ストレスも限界に達して来ていた。動かないというのは生物において最も過酷な苦行である。校長先生の有り難いのか、ただの世間話なのか分からない話を聞いたことがあるだろう。つまらない・・・と言つては失礼だが興味のない、動かない状況というのは人間に苛立ちを与える。現在彩乃はその状況に類似した場面にあつて・・・。

「あゝもう嫌。ご近所の皆さんごめんなさい。彩乃は三割しか悪く

ありません、ここにいる無頓着な魔術師が七割悪いのです。・・・では、彩乃ちゃんのショーを開催いたします。一瞬ですので瞬きの無いようお願い申し上げます」

彩乃は“誰もいない”工場のなかでそう一人芝居をする。

観客は重機、主役は彩乃、廃工場、・・・彩乃のショーが始まる。

「キヤ、キヤ、キヤ　　はじい、はじめまゝす　　・・・生を戒め、死を快樂とせん・・・代償の花舞台！」
クリスタル　パーティ

彩乃はそう術を唱え、杖をこつんと地面を突く。

すると、彩乃が突いたその場所から大量の透明な液体が弾ける。

・・・そう、弾ける。炭酸を開けた時のように。その液体は彩乃を覆っていたカーテンをするりと抜けると四方八方へ飛び散る。

液体は地面、重機、工具などに向かって飛んでいく。そこに規則制は無い。

そしてその液体は地面、重機、工具などを“突き抜けた”。それはどの液体玉も同じで工場はどんどん穴だらけになっていく。

「はひゃひゃひゃ　　綺麗だね〜いつ見ても」

彩乃は自分が発動させた術をうつとり見つめていた。その表情は綺麗な夜景を眺めるのと類似している。

工場はあつと言う間に崩れ落ちていった。　　全てを飲み込んで。

崩れ落ちた廃工場のだいた中央に立っていたのは彩乃だった。

その彩乃は今なお、透明な液体のカーテンに包まれている。

「うん、出てこないなあ〜魔術師さん。この一瞬で彩乃ちゃんか

ら気配も魔力も感じさせずに逃げることは誰も・・・お姉ちゃん以外できないと思うけどなあ」

彩乃はそう呟く。

実際場には彩乃しかいなかった。・・・否、一人もとい一匹いた。

『白蛇』だ。

「あつ、白蛇さん！ 大丈夫だった？」

彩乃は白蛇を見つけるとてこてこと駆け寄った。

【だいたいぶじゃねえよ、まったく！】

白蛇はそう答えた。・・・そう答えてしまった。

そう、式神と言えど人語を理解し、反論したり意見を申し出たりする。

彩乃は「壊す」ことで頭がいっぱい（怒りに任せてたが故に）だったので白蛇のことをすっかり忘れていた。

【つーか、近寄んな！ 死ぬわ！】

「あつ、ごめん」

彩乃はぎりぎりまで白蛇に近づいていた透明な液体のカーテンを遠ざけるように距離を置いた。その時足場が悪いので途中ぐらぐらと揺らいでしまった。

「ねえ、白蛇さん。どうして誰も出てこないんだろう。・・・確かに魔力は感じたよねえ？」

【感じたね。彩乃嬢は馬鹿だから間違えるとしても俺は間違えねえからな。間違いねえ、魔力を感じた】

白蛇の皮肉というか嫌味を含めた返答を聞いて彩乃は少しむすつとする。

むすつとして明後日の方向を向いたら、そこに『何か』があった。それを見つけると、正体を突き詰めるためにダッシュで駆け寄る。やっぱり、場の瓦礫や重機の残骸で足場は悪かった。

ぐらぐらと、足場を転々と変えながらそこに向かった。

辿り着いたそこには一つのラジオがあった。何の変哲もないラジオだった。魔術の『何か』ではない。

「何これ？」

【さあな】

そして色々と調べて行くうちにこれが『何か』なのか突き止めた。そして彩乃はラジオにこの仕掛けを施したであろうどこかの術者に感嘆した。純粹な敬意である。

白蛇は「してやられた」という顔をした後に、舌を巻いた。

彩乃と白蛇はしばしそのラジオを見つめていた。

0 - (3) 意味なき時間(後書き)

お読みいただき有難うございます。前半から飛ばしていますが、この三話後には細かいルール説明がありますので、この戦闘は流れをお楽しみください。また、注意深く読んで頂きたいです。

A 高校 中庭

「お嬢さん、これ以上やるってんなら一般人問わずに俺は魔術で攻撃するぜ？ その綺麗なお顔が台無しにならないうちに帰っちゃまえ。そうすりゃお前に害はなさないからよ」

黒のロングコートを纏った男はたんたとルリカに述べた。その表情には余裕が満ちあふれており、見下しているようにも見える。対し、ルリカは俯いていた。そして男の話聞き終わるとゆったり顔を起こす。そこには『笑み』があつた。それは形容するなら『嗤った』だった。

「何笑つてんだよ？ 生徒会長さんは頭がおかしくなられましたか
ああ？」

「いやいや、お前を倒す糸口が見つかったのでな。私も随分と忘れていたよ、頭を使って戦うということ。普通にはないスキルを持ち合わせていたせいですっかり忘れてしまっていた。・・・元々私が“魔女”とまで言われるようになったのは圧倒的な力を強いて、絶対的な戦略を練っていたからだ。それをこんなところで思い出させてくれるとは貴様私の恩人だぞ。貴様のような存在は希有なものだな、私に意見をしかも敗北を認めるように勧めてくれるのはお前だけだ。私も私自身が成長することを疎かにさせていたようだ。それら全てを含めて感謝する」

男は聞いてしまった。

アニメや漫画や小説じゃあるまいし、途中で攻撃してもよかった。

い異音を立てて校舎に“めり込む”。

「いや、楽しいな魔術師。これほどまでに楽しい時間は久方振りだぞ。いつも業務に追われ、常時依頼を進め、万事整理をつけてきた私が、羽を伸ばして戦えるというのは実にいいものだな。やっぱり貴様に感謝するよ」

「……………ぐぢや、ぎよ……………」

男は声にならない声を出しながらルリカに何かを言う、言おうとする。

そのルリカはそう誇大に言いながらも身体は傷だらけである。魔術師の攻撃を全て躲すことは不慣れという点を差し引いても避けられない事実である。

「うん？ ああ、しゃべりづらいか、顔面を殴ったからな。それに……貴様があーだこーだ言うてくれてる間に“頭を使って”『殴る方法』を考えたよ。だからそれほどまでに破壊力が上がったのだよ。ベクトルの進行方向に対し、自分の身体のどの神経と筋肉をどのよう動かすか、空気抵抗、圧力、貴様との間合い……そういった自分のことと自然原理を全て理解し、“考えて”殴った結果がそれだ」

「……………」

男は何も言えない。言うことができない。それは必然とも言える。ルリカが殴った力、そしてそこからの仕事量は5万Jを超える。これは運動エネルギーを計算したものである。

「質量×1/2×(速さメートル毎秒)の2条」

5万……これは人間に出せる力ではない。そして“ルリカすら

出すことの出来ないエネルギー”である。しかし、当の本人は知るよしもなかった。

「おい、もう勝負はついたと言っているのか？・・・出来ることならもつと続けたいのだがな。さつき貴様の戯れ言の御陰で『水素』を封じ、『水素』を利用した策を思いついたのだ、ぜひとも使わせて欲しいのだがなあ・・・でなければ私は口だけの女になってしまっているのではないか。それに、これほどまでに楽しいことは他在るまい。さあ、立ち上がれ魔術師！私を存分に楽しませろ！」

ルリカのそれはもはやいつものルリカではなかった。無邪気に遊ぶことを最優先とした、親の心子知らずの子供だった。

友達がない・・・。

その影響も色濃く出ているのかも知れない。

遊ぶことを最優先とする二年生の女子高校生。

「さあ、さあ、さあ！」

止まらないルリカ。止められないルリカ。止めようとしないうる力。

もう魔術師に残された選択肢は二つに一つ、逃げるか遊ぶか。こゝA高校から立ち去り後日貴之憶良を探し出し殺害を執行するか、このまま普通とは思えない普通を相手にして貴之を殺しに行くか。

魔術師の意識はどんどん衰弱していく。出血多量・・・。魔術師であろうとなんであろうと避けられない事象。回復魔術の使い手などなら未だしも男はそんな術は使えない“下っ端”なのだ。それに普通がこれほどまでに力を発揮するとは他の魔術師であろうとも考えなかったと思う。男はそんなことを考えながらただ無言で動けずにいた。

「・・・仕方ない、か。トドメをさして学校から排除するでしょう」
ルリカは殴った男にゆったり近づいていく。そして男の目の前に立ち、ゆっくつりと動かない男の襟首を掴もうとした。
その時。

「はーい、お嬢さん。まさか魔術師をやっつけちゃうなんて素敵ねでもね、お嬢さん初めて会った魔術師が倒せる相手でしかも一人だとは限らないんじゃない？ 漫画や小説じゃないんだから」

突然背後から声がした。

完全に背後を盗られたルリカ。振り変えるだけの時間が無いし、この状況で振り変えるという選択肢は無い。ルリカはこの後ろにいろのが魔術師であることを理解し、また、自分がどういう状況下に置かれているのかも理解した。

やられる・・・。

ルリカは必然的にそう思う。

「私の魔術は至って平凡で精々敵を焼き尽くすだけの炎系の魔術よ。まあ、だからこのぼんくらと組んでたって訳だけどね。・・・さてと、お嬢さん魔術師を倒した意味が分かっているのかしら？」

まあ、分からなくてもここで終わるか。

ルリカはよく分からないが背中に押しつけられているものから“異常”を感じ取る。それは彼女が言った通り、魔術なんであろうと推測がつく。

粹がって未知なる魔術師を倒したことに自惚れ、隙を作り出した自分を恥じようか・・・そう思ったが、それだけの驕りは無かったと思う。

だから・・・これは“仕方がない”ことなのかもしれない。

「ばいばい、生徒会」

「モブキャラはすっこんでろ」

唐突もなくその声は掛けられた。それはまさしくピンチに陥ったヒロインを助ける場面である。そんな漫画染みた小説染みた登場をしたのは、ルリカの聞き慣れた声の主だった。

「・・・貴之君、なのか？」

ルリカは分からずも声で人物を特定する。

そう、現れたのは魔術師が探していた『貴之憶良』だった。

貴之はある魔術を用いて黒い“何か”を放出する。それは紛れもなく今このときルリカを襲おうとした女魔術師に向けられていた。

女魔術師は飛び退く。そしてふわりと浮いたと思うと東校舎二階と西校舎二階を繋ぐ廊下の上に立つ。

女魔術師は男魔術師同様に杖に、黒のロングコートを纏っていた。そのコートを左手でさっと払うと、貴之に向かってこう言う。

「やけに主人公染みた登場するじゃない？ 貴之憶良」

「馬鹿が。二次元というのは結局のところ三次元から生み出された産物。故、二次元染みたことが三次元で起ころうがそれは結局のところ三次元に還元されただけにすぎん。それに主人公ってのはかっこよく登場するものだろ？ 民衆の歓声を網羅するのはこういう人間なんだよ、覚えておくといい・・・雑魚」

貴之は淡々と無表情で述べる。

貴之は東校舎二階の窓から身を乗り出していた。取っ手ならぬ窓のレールを右手で掴み、窓辺に右足を掛けている姿だった。そして貴之は窓から飛んだ、しかし、貴之の身体は空中でふわりと速度変換するとゆつたりとしたペースで地面に着地する。

それは先程、貴之の“何か”を避けるときに女魔術師が使っていたであろう術と類似したものだ。とルリカは察する。

「貴之君、君も魔術師なのか？」

ルリカは“働きすぎる脳”で考えた結論を完結に述べる。そこに戸惑いはなかった、あるのは驚きだけである。

「・・・さあな」

あからさまな嘘だった。

もちろんそれを分かったうえでルリカはこう答える。

「貴之君、逃げる。君が狙われている」と。

貴之憶良のせいで魔術という異能であり、異物であり、異色のものに関与してしまったルリカ。それを踏まえたうえで、嘘を承知で、自分が苦しむだろうことも分かった上で、「逃げる」と言った。

生徒会長として・・・？

違う、『友達になって欲しい人』だから。

自分の“働きすぎる脳”で自問自答するルリカ。そうただ、『友達を守りたい』のだ・・・それが誰であっても、“何で”あっても、貴之は醒めた目でルリカの方を向くところ答えた。

「生徒会長、嘘吐いてごめん、俺は“普通じゃない”……。まさか普通がここまでどうでもいい奴のために戦って守ってくれるとは思ってなかったよ。俺はあくまで俺自身の宿願を果たすためなら何でもするが、それで他の人が犠牲になるのは筋違いだと思ってる」

「漫画や小説のようにいい台詞のシーンを待ってはくれないんだよ！」

女魔術師は貴之が飛び降りた瞬間から詠唱していた魔術を唱える。それは杖から発せられたものでは炎は波のように貴之を襲う。

貴之はさして驚かずに淡々と小言で術を唱える。

その間にも炎は貴之に迫り、結局何も起こらないまま貴之を飲み込んだ。

「はっ、貴之家最後の生き残りが聞いて呆れるな。この程度かよ貴之憶良！」

女魔術師はそう炎に包まれ焼滅したであろう貴之にむかって言う。しかし、女魔術師は気づかない。

それが負け犬の決め台詞だと言うことを……。

炎に包まれた空間。

貴之は当然の如く生きていた。……というか、炎の中であぐらをかいてルリカの正面に座っていた。

「……言いそびれたが、本当にすまないと思っている」

「気にしなくていい、貴之君。別に私はそこまでの怪我を負ってはいないし、嘘の件については気にしてない。それより、この状況をどうにかしてくれないか貴之君。もう少し貴之君から聞きたいこともあるが、この状況では話すも何も無いからな」

ルリカはそう貴之に言う。

「ああ、分かった。今すぐにこいつらは拘束する。個人的な用件でこいつ等には聞きたいことがあるからな、俺としても今すぐになんとかするよ」

貴之はそう答えた。それは機械的とも言えるし、無感情とも言える。でもそんな貴之を見てルリカは「笑った」。魔術師のときのように「嗤った」のではなく「笑った」……。それが彼女ルリカにとってどういう意味をもつのかも知らずに……。貴之は炎へと向いた。

「・・・滅」

貴之がそう呟くと炎は微塵も残らずに消え去った。それは蒸発したようにも見えるし、弾けたようにも見える。

炎の壁が消え、貴之の目に映っているのは自分の術があっさりと消え去ったために呆気に取られている女魔術師だった。

「そうそう・・・」

「!」

女魔術師は貴之の声に反応するように気持ちを入れ替え、身構える。それは戦闘慣れしていることが十分に伝わる早さだった。

「剛炎剛剣^{こうえんこうけん}・・・だよなこれ。この魔術の使い方は違うぜ？ この魔術は大量の炎を一斉放射するものじゃない、それは第一段階だ。実際の剛炎剛剣は・・・」

こう使うんだよ。

一閃。

女魔術師の左あばらを突き抜けていたのは赤い線だった。

「うぐあああ・・・」

呻く女魔術師。右手を左脇腹に伸ばし、痛みを堪えようとする。

そこで、女魔術師は自分の貫かれたところから出血していないことに気づく。その傷の断面をよく見ると、焦げていた。そう、赤い線は貫いたとほぼ同時に周辺の細胞を焼却し細胞を死滅させていた。

女魔術師のあばらであったであろう一部は黒焦げとなって地面にぼとりと落ちる。それを見ていたルリ力は少々怪訝な顔をしたが、すぐに取り戻し、貴之の背を見つめた。

「剛炎剛剣、この術の真価は刀として扱うことを示している。20年前に魔術師による魔術向上の一環で『^{ワン・オワード}剣 聖』と呼ばれるまあ、いわば祭りみたいなものがあつたんだよ。魔術師とあつて、使うのは魔術。そこで開発されたのがこの剛炎剛剣だったって訳だ。それも知らずにこんな使い方をすると魔術師の端くれにも置けんな。・
・魔業界を脱したこの俺でさえ少々異観を覚えるぞ」

貴之は解説するように女魔術師に言う。そこには呆れの文字が浮かび上がる顔を表していた。

女魔術師は痛みによる苦痛と自分への侮辱によって怒りを表^{あらわ}にし

ていた。

「き……のおおおおおおおおおおおおお！」

「何を叫んでんだよ。追い詰められたからって叫べばいいってもんじゃないんだぜ？ それをやっていいのは漫画か小説の中だけさ」

貴之は女魔術師の叫びなど意にも介さず、一つの魔術を発動させる。

貴之の背後に大きな“黒”が現れ、ぐにやぐにやと空中で蠢いていた。それは、形とは言いがたいが強いて言うなら『鬼』を造形していた。そう、『黒鬼』。

黒鬼は貴之の背後から身を乗り出し、女魔術師へと伸びていく。女魔術師はそれを避けるべく右へ走ったがそこには『手』があった。そう黒鬼の手である。

女魔術師は自分から突っ込むような形で黒鬼の手に収束される。

「ぐわああああああ……」

呻く魔術師。

「心配するな、お前は別に殺しはしない……現時点ではな。ただ、ちよつと『異空間』に飛んでもらうだけだ」

貴之がそう告げると女魔術師は黒鬼の右手の中へ消えていった。それは紛れもなく消えていった。

貴之は踵を返すと、ルリカのパンチを浴びた男へと向く。男はやはり動かないし、言葉も話さない。それは意識が飛んでいるからなのか、はたまた油断した瞬間を狙っているのか貴之には分からなかった。

そう、分からなかった。だつたら・・・。

黒鬼は右手を壁にめり込んでいる男へ突き出した。その攻撃・・・トドメによつて男はさらに奥、教室の中へ吹っ飛ぶが、男はうなり声すらあげない。完全に失神してしまつていたからだ。そう、貴之は男が“意識があつた場合”を想定して攻撃を行った。

「さて、邪魔者は片付いたな。そろそろ、この魔結界を外さないと魔術師が群がってくるな・・・」

独り言のように呟く。

「貴之君、私はこれからどうしたらいい？　こんなことになつてしまつた以上」

「二択」

ルリカの質問は途中で貴之によつて遮断された。

「二択？」

「そう二択・・・。魔術を知つた以上ある程度の覚悟は決めねばならんぞ。会長の選択は、ここで俺の協力者、又は従僕になるか・・・」

「

殺されるか。

のどれかだ。

どれがいい？

0・(4) 誤算と現実と二次元(後書き)

お読み頂き有難うございます。誤字・脱字などがありましたらお知らせ頂けると幸いです。また、評価やこつした方がもっとよいという点がありましたらご意見ください。これは趣味で書いているものですが、どうせなら私好み、皆さんも好む作品を作り上げられたらと思います。

A 高校大破した校舎の中庭

「答えは？ 生徒会長、珠飾ルリカ」

貴之はルリカを見てなかった。ルリカという生物を大破した校舎と同化させ、景色として見ていた。話しているのは景色とで、その景色に感情を移入することはないし、同情する気も起きない。

ルリカはそんな貴之の目を見て『笑って』いた。穢れ無き、汚れ無き『笑顔』で。この『笑顔』がどれほどの業を表しているか、本人も貴之も知らずに。

ルリカは答える。しかし、その答えは生徒会長らしくない、“完璧の魔女”としてらしくない、珠飾ルリカという普通らしくない答えだった。

「私は貴之君の『友達』になる。だから『友達』として貴之君のサポート役に、参謀役になってあげるよ」

そう言った。

もちろん貴之がこれに対し腑に落ちないのは火を見るより明らかだったが、貴之はそんなことよりもルリカが“要領の得ない答えを返答した”ことに驚いていた。

ルリカの“答え”は常に完璧であって完全であった。それが今はどうだろう、二択を迫っているのに第三の答えを勝手に創りだし、その要求を『貴之に飲ませた』。これは、出題者と回答者が入れ替わっているようにも捉えられる。Qで二択を訊いて、Aを返した。そしてそのAは貴之にYES/NOの二択を迫っている。受け入れるか、否か。ルリカとは思えない“答え”である。

貴之はくすりと笑う。その目と表情は“景色”を見ていた目とは異なるものであった。貴之はそのルリカの返答にこう返問うした。

「いいよ、それで」

それだけだった。

それだけで、貴之はルリカの頓珍漢な回答を受け入れ、ルリカを再度見直し、手をさしのべた。

「よろしく、俺の『友達』さん」

「こちらこそ、よろしく。私の『友達』」

A 高校中庭の影

息を潜め、魔術師との戦闘及び今の貴之憶良と生徒会長のやり取りを窺い、聞き取っていた人物がいた。

否、人物もとい“魔術師”がいた。

その魔術師はうつすらと驚きの汗を額に浮かべ、気づかれないようにと最新の注意をはらい、ぎりぎりまで二人との距離を詰めていた。

「貴之“先輩”は一体・・・」

その魔術師は二人が中庭から出ていくまで、二人の背を見送っていた。

・・・嫉妬を浮かべて。

イギリス 王室より

「ウィツ、ザウト~~~~~!」

幼き少女はすらりと背丈の高い男の背に飛びついた。

男は「うわっ」と小さく悲鳴を上げると自分の後ろにしがみついているのが、第三王女セリーナ・ウィンザーであることを知る。

「セリーナ様、何度言ったら私のことを『シユナイダー・オミリオン』とお呼びになって頂けるのですか？ また、このような蛮行に及ばないことを進言申し上げます」

「え〜いいじゃん別に。かつこよくネ？ ウィザウトって」

「王女殿下がそのような言葉遣いを用いてはいけませぬぞ。王女たるもの……うぎゃ」

セリーナはウィザウトの背中にしがみついていた手を首に回し、絞めるような行為をした。もちろんそれはいくら王室及び、イギリスの最高騎士パラディンであったとしても耐えきれぬものではない。

「ちょ……セリーナ様……ギブ……ギブ」

「はっ、パラデンが聞いて呆れるわ」

パラディンだろうが。

と、少々言葉使いが荒くなったがそこはお愛嬌。

セリーナは回していた手をほどき、するりとウィザウトの背から滑り落ちる。それによりようやく絞殺染みた遊びから解放されたウィザウトは幾度となくむせる。

そしてセリーナの方を向くと説教を始めた。ウィザウトの目には青目で金髪の人形のような少女が映っている。

「セリーナ様！ 私じゃなければ今のは結構やばかったですよ！？ ルルティア様やエーテル様にそのようなことはしてはいけませんよね！？ あのお方は私のように耐えきれぬ力をお持ちではありません故、決してこのようなマネをしてはいけませんぞ。・・・って聞いていらっしやいますか、セリーナ様？」

「してない、してない。私がテンチューを下すのはウィザウトだけだから」

キランと惱殺ウィंकを決める若干12歳の王女殿下。ウィザウトは無駄だと分かっているながらも一応儀礼のような形で説教補足を言う。

「私なら何をしてもいいって訳ではございませんぞ。私だって色々な仕事、事情がございますからいつもいつもセリーナ様のお相手になつて差し上げることが容易ではありませんし 身が持たん」

最後の方は明後日の方向を向いて小声で呟いた。

しかし、ばつちり小さな王女殿下には聞こえていたようで・・・。

「ウィザウト！ 私がそれほどまでに品が無くて、突然幼少遊びに誘おうとするそこらへんのガキと違って、いるんじゃないでしょうね？」

「そうですね……あつ、違います。えつ、えつと、……セリーナ様は元気いっぱいなのわんぱく少女でございます!」

失言に足下をすくわれ、言葉のチヨイスを間違えるウイザウト。やはり、お決まりのようにセリーナはウイザウトに反発する。反抗期も甚だしい限りである。

「何を……ウイザウトのくせに。私はそれほどもでにガキっばいって言うの? いい加減にしないとテンチューを下すぞ!」

はあ、と一つ重いため息を吐くと、何かにかじつけてこの場を脱しようと目論む。しかし、セリーナはそんなウイザウトを逃さない。

「だいたいねえ、私のお守り係……私のパラディンなら私との交流も大切にしないとイケないんじゃない? それにウイザウトは私に対して冷たすぎるよ、お姉様達にはあんなに鼻の下伸ばしちゃうって!」

「してません。……さつきから気になっていたんですがテンチューをどこで覚えましたか?」

ウイザウトは早々にその意見を真つ向から反した。もしもこんな戯言が王室全域及びイギリス各地域に広まってはウイザウトの地位も名誉も無くなり、逆に非難と汚名を得ることになってしまう……それも冤罪で。

ウイザウトとセリーナの論争(?)は続く。

セリーナに飽きが訪れるまで……。

A 高校 生徒会室

「座ってくれ」

ルリカは生徒会室とは思えない程豪華絢爛なソファに貴之を座らせる。貴之はそのソファの高級さ、上品さにおどおどしていた。・・訳ではなかった。

「一体この学校にはどれだけの資金があると言っただ？」

気になっていたのはそっちの方だった。ふつかふかのソファの素晴らしさにしばし浸っていると、ルリカから今後について話しが持ち上がった。

ルリカは生徒会室生徒会長専用椅子に座っていた。これまた質のよさそうな一品である。

「貴之君、君のことについてまだ色々と分からないことが多い。故、それを訊きたいのだが」

「無理だな。・・・ここでは外部に漏れる可能性がある。もっともすでに盗聴されている可能性も高いがな」

貴之は盗聴及び盗撮の可能性を考え、部屋の中をぐるぐると見渡す。犯人心理からすればそれだけで効果は窺える。

ルリカはそんな貴之を一瞥すると、率直な感想を貴之に述べる。

「貴之君、ちょっと疑心暗鬼になりすぎではないだろうか？ だから友達ができないんだよ」

「お前に言われたくない」

貴之も率直な意見で返答する。ストレートにはストレートできっちりとお返しする。なんとも律儀な性格であることを、皮肉を込めてルリカに送る。

「ふっ、貴之君にこうやって言葉を交わし合い、責め立てられると心が弾むな。友達との会話とはなんとも素晴らしく、愉快的物であろうか。・・・私は今までこのような経験をしていなかったが故により深く友達のありがたみをひしひしと感ずることが出来る。有難う貴之君、有難うマイベストフレンド」

「お前それただのマゾ属性なんじゃないのか？ それに一人しか友達のできていないお前にベストも何もないだろう」

貴之はルリカの賛美とも取れる感謝ストレートをトリッキーなセーフトイバントで返す。

だがこれにルリカは納得したようで、「確かに」と言いながら首を縦に振る。それを見ていた貴之は「本当にこいつは天才なのか？」と疑ったという。

「閑話休題。貴之君、話しをしたいのだがどこならいいと言うのだ？ この学校もそこそこなシステムを有していると思うしここで『友達との交流会』を開いては如何だろうか？」

「いつから『友達との交流会』になったんだよ。・・・それに俺の話はそんなに明るい話じゃないし、白日の下に晒せるような代物じゃないぜ？」

貴之は意味ありげな笑みを浮かべながらルリカに言う。それは意

味がありげであり、価値はないと言う表情だった……ようにルリ力には見えた。

ふむ、と一つ考える人のように考え込むと一つの妙案を思いついた。

それは至って普通の考えであり、至って健康的で、至って高校生らしい案だった。

「そつだ、貴之君ち行こう。」

「そつだ、京都行こう。みたいに言うな。それに俺んちか……」

その言葉に『嫌』という意味は含まれていなかったが、『困った』という意味は十二分に含まれていた。それは貴之自身が全く考えていなかったことであるし、全く想定していないシナリオだった。

ルリ力はそんな貴之の考え込む様子をきよんとした顔で首を斜め45度に傾げて見つめている。

「俺んちはな、“来てもいい”」

「で？ 何か意味を含んでいそつだが？」

「そつだ、“来る”のはいいとしても“来られる”かが問題なんだよな……」

「来られるか？」

ルリ力にはその言葉の意味が理解できなかった。

「道が難しい？ 場所が遠い？ はたまた……核爆弾の実験施設かなにかか！？」
あり得る。貴之君が魔術師だとしたらつじつまが

合う。魔術と呼ばれる未知なる力を軍事利用しようと画策する者が現れたとしてもおかしくはない。朝鮮への交戦予備か？ はたまた

「ちよつと待て」

貴之は暴走を始めたルリカを急ぎ足で止めに入る。ルリカは最高に興奮状態であり、両手をグーにしてハッスルするように立ち上がっている。・・・ハッスルしすぎである。誇大妄想もいい加減にして欲しい。

「つじつまが合う”ってなんだ？ 何がどう交錯すればつじつまが合うんだ？ それに少し落ち着け、魔術を見たことで少々思考回路が鋭敏化するのはよく分かるが話しが進まん、少し黙ってる」

「はい」

なんとも素直に従うルリカに貴之は驚きと呆気にとられてしまった。もう訳の分からん少女には金輪際関係を結ぶことは止めておこうと堅く誓った。・・・後にあっさり破れることになるのだが。

貴之は『俺んち』について話しを進める。

「俺んちはな、色々あって色々あるんだよ。だから、俺と一緒に来て欲しい、片時も離れずに」

ルリカは無表情で妄言・・・もとい狂言を熟々（つらつら）と並べる。

「貴之君、わたしは今まで告白と呼ばれる惨劇を嗜んだことはいささかないが、それでも平常心の片割れを腹に一物おくことはできる。

し、しかしわたちも女のこなのである、そう言った。私の辞書には不可解は無いという条約締結を果たしているような粒々辛苦を千差万別に行ってきたつもりだ。わたすも“岸壁の美女”と呼ばれてはいるが何も全部全治な訳ではない。知らないこともあるし知ってることもある。だから、今回のコンフェッションも受けるか、受け流すかと言われればさながらナイアガラの滝の如く排水溝に流たい。疾風迅雷に、だって・・・恥ずかしいのです」

「・・・・・・・・」

貴之は呆然と力説する狂言女の顔を見ていた。そして徐に口を開く。

「何言ってるの？ しかも無表情で全く文としての構成もおかしく、四文字熟語の意味をはき違えてんだよ。お前が何を言いたかったのか分からないが、一応解説してみるとするか」

貴之はごほん一つ咳払いをして理解不能の今世紀最低の謎解明を行う。

「・・・貴之君私は今まで告白と呼ばれる幸いを受けたことはまあないが、突然であろうとも平常心の一つは持ち合わせる事ができる。しかし、私も女の子なのだ、私はそう言いたい。私の辞書には・・・分らん。私も“完璧の魔女”と呼ばれてはいるが全知全能な訳ではない。知っていることもあるし、知らないこともある。だから今回の告白を受けるか、否かと言われればそれは激流に流されるが如く受け流そう。だって恥ずかしいから・・・何を勘違いしてんだ馬鹿生徒会長」

貴之は本気で呆れながら馬鹿生徒会長であるルリ力を見ると、ル

リカは右手を頬に当てながら可愛げのある仕草で照れていた。

「俺が言いたかったのは“俺から離れると俺の家には辿り着けなくなる”ってことだよ。・・・俺んちは特殊だからな、一般人及び魔術師にも特定できないように細工してある。俺だって本当はこんなところに来ていい人間じゃねえんだけどな・・・どうしてもあの言葉を忘れられなくて・・・いや、最後の方は忘れてくれ」

ルリカは狂言妄言の世界から無事帰還すると、貴之の話しを真剣な眼差しで聞いていた。それは『友達』の言葉だったからという要因が大きく関わってくるからだろう。

一方貴之は最後の自分で吐いた言葉に過去を思い出し、傷心していた。だが、それも数秒で切り替え、現実の問題へと向き直った。

「まあ、貴之君にしては支離滅裂な言葉だったが、だいたい分かったようは貴之君の家に行くには貴之君をずっと、きつく、ほどけないように抱いていればよいの难道ろ？」

ちよつと違う気もしたが、貴之はさほど取り立てずにそれです承した。

ふむ、と頷くとルリカはこう言った。

「じゃあ、貴之君ち行こうか」

貴之とルリカは揃って生徒会室を出て、生徒玄関に向かう。その途中貴之は立ち止まりあるものを眺めていた。

貴之は大破した校舎を見て、「これどうすっかなあ」と考えたあと、ルリカが先に行ってしまったのを見て、「お前人の話聞いてたか？」といいながらその背を追いかけた。

0 - (5) 友達(後書き)

お読み頂き有難うございます。珠飾生徒会長がメインの物語となっております。(今更だけど)貴之君も頑張っています。今はまだルリカちゃんの行動はほとんどないですが、もし、この作品が続いたらとんでもないドンデン返しがい！ちょっと誇大に言い回しすぎましたかねえ。まあ、置いといて、今後ともよろしくお願いします。

0・(6) 思い出を告げる者

中国 釜山某所

釜山・・・名前からして山脈が連なる光景がイメージできるが、実際のところは高層ビルが建ち並び一つの都会として街が活動しているのを知っていると思う。

そんな釜山のとある酒屋の地下に三人の若者と一人の老人がいた。

「王水、もうじき“魔法”を巡って争いが始まるが準備は整っているかのう。やはり、集う者は皆強者。まあ、儂が見てきた中には“最弱故に最強”という一風変わった者もいたが・・・それはさておき、そのような魔術師が犇めくなく、王水よお前は生き残れるかのう」

老人は一人の体格のよい男に向かってそういった。

この地下室はバーのようになっており、その部屋の奥、小さな椅子に老人は腰を掛けており、一方若者三人はその老人の前にきつちりした姿勢で立ち並んでいた。

老人に問われた若者はその疑に答を返す。

「真天津様しんてんしん、そのようなご心配は愚問であり、杞憂であります。私は“魔法”を手に入れ、世界に平和をもたらしてみせます・・・私は“魔法使い”ではありませんが『魔法使いになるための条件』は熟知しております。故、残り一ヶ月後に行われる、日本時間での十月三十一日、『ハロウィン』までに魔法使いとなり、必ずや“魔法”を発動させてご覧にいきます」

その男は言い切るようにその老人に告げる。男には世界中の魔術師の頂点に立つだけの自信があるということなのだろう、その目に迷いや戸惑いはない。

老人はその答えに深く関心し、納得すると男の隣にいた一人の坊主と一人の女に指示を出す。それを聞くと二人は足早に部屋を後にした。

老人は最後にこう述べ綴った。

「王水よ、お前は世界をどのように続ければ平和を保てると思う？ 僕は長年魔術において研究を重ね、修行を積み、世界の真実と嘘を見定めてきた。その経験の結論から言えば、世界は嘘をつき続けている。それをお前は解消することができるか？ そして蟠わたかまりの無い世界を創造すると言えるか？」

「できません。“魔法”という奇跡は必ずや、世界の人々に安定と平和をもたらします。私が真天津様に救われたように、この世界も誰かの、否、私の手によって救われるのです」

老人はその答えを待っていたかのように薄ら笑いを浮かべると席を立った。

とある樹海奥地 貴之家・・・もとい貴之邸

「・・・にしてもあれはなんだったんだ？ 原理がいまいち理解できんし、そもそも魔術とは世界にある物体を想像から具現化するものではないのか？ あれは完全にその点において超越しているぞ、貴之君」

現在貴之とルリカは貴之邸の客間で話しを進めている。ここ貴之邸は八百坪の敷地を有しており、大豪邸と言える程立派な家だった。また、貴之はこの付近の山に魔術を施しており、一般人及びそれ魔術師には入れず位置を特定できないようになっていた。また、東京ドーム二個分の森を有しているので誰にも邪魔をされずに実験や修行を行うことができる。

貴之は高級そうなお茶をルリカと自分の分を用意し、これまた豪勢なテーブルの上に並べる。

ルリカは茶を少々啜ると、この家に来るにあたって、おこつた事を貴之に疑問として提示した。それに貴之は的確に答えていく。

「ああ、あれか。あれは黒鬼を使ったんだが・・・お前も見ただろ？」

「ああ」

魔術師との戦闘において貴之が使用、使役した黒鬼。それは貴之曰く、「対象を異次元に飛ばす過程で異次元に行くことができないから消滅させる術」とのことだった。つまり、別世界に行こうにも行けないから消えるしかなくなるという魔術だった。

貴之はその黒鬼を利用して、ここに移動したと言う。

「黒鬼は　　の能力を持つ。では、異次元とは？　・・・それは物体が干渉できる世界ではない。故、物体は形を保つことができずに扉の前で消滅する」

「ふむ、それは分かったが貴之君、ここに“転送”した原理を説明してもらってないが？」

「ああ、それでその異次元までの“過程”を現実の世界とリンクさせたことによつて俺たちはここ貴之邸に来ることができたんだよ。つまり、厳密に言うと、“転送”では無く“通過”だな。黒鬼の異次元へのリンク先を現実のこの座標に貼り付けたってとこだ」

「ふうん。ようはここと商店街とをどこでもドアで結んだようなものか」

「そうなる」

貴之はどこでもドアの台詞に少々訝しげな表情をしたが、どうでもいいかと言う自己結論に辿り着き、目の前に置いてある茶に手を伸ばす。

啜る。

おいしかった。

ルリカは移動手段については一通り済んだので、続いて“魔術”について貴之に問い始めた。

「魔術・・・私の知識をもつてしてもそのような言葉は聞いたことが無いな。実際、今日この目で魔術を見たがどれもこれも現実のものを具現化したり、形を変えたりしただけにしか見えんが、そのところはどうかんだ？」

ルリカはそう言った後、テーブルの茶を飲む。しかし、熱すぎて飲むことができずにたじろいでいた。さっきも実は飲めていなかった・・・猫舌なのである。ニヤー。

「原点はそこで合っている。実際現実のものを利用したものが“ほとんど”だ。炎なら空気中の酸素が必用になるし、水なら空気中もしくは地中などからの水分が必要となる。つまり、この世の現象を

形にして攻撃・防御などと利用しているにしかすぎん。実際無重力、真空状態のところでは魔術師の“ほとんど”は活動できん」

貴之はところどころに“だいたい”と言う言葉を織り交ぜながら話しを進めていく。

もちろんルリカがこれに反応しない訳がない。

「貴之君、分かっていると思うが私が言葉の綾を見逃すはずはないぞ。その“ほとんど”というのは一体どういう意味だ？　・・・否、一体誰がだというのだ？」

ルリカは自分で自分の言葉が鬱陶しく遠回りしているのに気づき、直結な意見へと変更した。

貴之は答える。

「後々説明しようと思ったんだが、先回りされるとはな。・・・その“ほとんど”というのは　」

イタリア サンピエトロ大聖堂

一人の男と一人の女が世界遺産であるここサンピエトロ大聖堂の内部の荘厳な装飾を眺めていた。

神々しい。

ここサンピエトロ大聖堂はカトリックの総本山であり、一説ではキリストに従った使徒達のリーダー、使徒ペトロの墓所だったのではないかと噂されている。

神々しい限りの装飾を眺めながら金髪黒眼の日本人は隣にいる男に話しかける。男は至って普通の格好をしておりどこかの教団や信

者などとは見受けられず、観光客が見物にくるような格好をしている。

「レオ・・・あなた本当に日本に行くの？」

「・・・魔法を行使するためにな」

レオと呼ばれた男は装飾を見ながら素っ気ない回答をする。女はそんなレオを心配しながらも男が見ている装飾を自分も眺める。

男は尚装飾を見続ける。そして徐に口を開く。

「俺はこの荒んだ世界を変えたいんだよ。お前も見ただろ、ティーナ。ストリートチルドレン・・・彼らはその場その場を生き抜くために必死になつて犯罪を犯しているんだ。それは『生きるため』・・・そんな彼らの所為をどうして咎められようか。なんとしてでも彼らをあの地獄から解放してやるのが俺の努めであり、宿命なんだよ」

願望であつたとしても。

ティーナと呼ばれた女は男の心情を察し、自分もまた男の心情に感化された。そんな思いのなかティーナはレオの顔を見ることができずに、悲しい天使の装飾を眺めている。

「なんとしてでも俺は“魔法”を唱える。それは俺が」

「魔法使い・・・彼らは如何なる状況であつても魔術を行使することが出来る。魔法使いとは魔術師と異なっていて、魔術師の進化形だと思つてくれればいい。・・・まあ、実際は“逆”なんだが」

貴之はルリカにそう言った。

ルリカはその言葉にまたあやふやな言葉が含まれているのに気づいたが、貴之が続きを話そうとしていたので思いとどまっていた。

「気づいていると思うが、“逆”というのには大きな意味合いを持つ。そもそも“魔術”は“魔法”から派生したものに過ぎん。故、先に魔術師よりも魔法使いがいたことになる」

「・・・貴之君の言いたいことは了承したが、魔法使いとはせいぜい『魔術をいつでもどこでも使える者』だけのことを示すのか？」

「違う。そんなものはオプシオンにしか過ぎず、本当の魔法使いとしての利点・・・否、原点は『魔法を唱えることができる』ことにある」

「魔法を唱える？」

ルリカはその言葉に訝しげになりながら貴之に再度問う。

「そう“魔法”を唱えることができるようになる。魔法・・・それは『夢を一つ叶えることができる唯一のもの』なんだよ。そしてその魔法を使用した場合、世界全てがその『夢』を叶えるべくして動き出す」

「世界・・・」

スケールの大きさに高揚感と驚きを覚え、鳥肌がうつすらと立つルリカ。

「例えば、『世界中が自分を王として認める』というものだったら、世界中の全ての人類がその命令に従うことになる。自分の意思とは無関係に、誰であろうと・・・従うことになる。そしてその『夢』が過去に関わるものだった場合世界からその過去が清算される」

ルリカは貴之の言葉に今までに味わったことの無い興奮と恐怖、そして快楽と快感を身体の中に感じる。

そんなルリカを余所に貴之は「但し」というフレーズを付け足す。

「但し・・・その魔法が行使されない者達がいる」

「魔術師・・・いや、魔法使いか」

「そうだ」

貴之は手を目の前で組み肘をテーブルにつけて話しを進めていく。

「魔法使いには魔法は行使されない。それは如何なる理由があるのかは知らないが、行使されないと『書いてあった』」

「書いてあった？」

ルリカは今までのことが本か何かの知識によって説明されていたことを知り、特別どうこう言う訳ではないが、当事者が述べているのではないことに少々落胆する。

「ああ、『鷹狩悠久』と呼ばれる作者によって書かれた本だ。その

本は魔業界の一部にしか回ることはない。一般の・・・一般と言っても変な話だが、一般の魔術師には手が届かないものとなっている」

「？ 貴之君、貴之君の話には大きな矛盾があるぞ？」

「何が？」

貴之は本当に言っている意味が分からなかった。

逆にルリカこそ、なぜ貴之が矛盾を言っていることに気づいてないのかが不思議だった。

「貴之君・・・君は魔業界から脱した者だと言っていたではないか。それなのに今この場では魔業界・・・なんの世界が知らんがその筋の人間しか手に入らない本を手に入れていると言っている。これは大きな矛盾と言わずして何になる？」

「そういえば・・・」

貴之は女魔術師との戦闘において、「魔業界を脱した俺が言う・・・」と言っていたことを思い出す。貴之は「・・・というか、この女計り知れんな」と再確認した。“完璧の魔女”だけある。

貴之はルリカの問いを解消すべく、弁解を述べる。

「よく覚えていたな」

「ふっ、愚問だな。『友達候補生』の言葉を一字一句逃すはずがな
かろう」

「そうかよ。・・・で、そのことなんだが」

ガタン。

この場に合わない異音。

ルリカは一瞬でその異音がした方向を見る。すでにルリカは戦闘態勢に入っており、いつでも戦闘可能な心構えを保っている。

「誰だ？」

ルリカは異音の方向に向かって問う。そしてその方向凝視するとそこには一人の男がいた。黒のシルクハットをかぶり、右手には杖片眼鏡をかけており、黒のスーツに身を包んでいる。年齢は定かではないが、二十代から三十代に見える。

ルリカは貴之とコンタクトを取り、この人物に対し戦闘か話しかを訊ねようとしたがその必要は無くなっていた。

貴之はテーブルの上に置いてあったフルーツナイフを男の首筋に当てている。一瞬で移動し、男に戦闘態勢を見せた。

対し、男はさして驚かず、さして騒がず、さして臆せず、その優美とも言える佇まいで貴之の威嚇攻撃を眺めていた。そして徐に口を開く。

「これはこれは貴之憶良様。 “お久しゅう” ございます。私、鷹狩わたくし たかがり 永久えいきゅうは貴之憶良様に託たくけを伝えに参りました」

「誰だ貴様・・・鷹狩・・・鷹狩悠久の何かか？ それに “お久しゅう” とはどういうことだ？ 俺は貴様なんぞ知らんぞ」

貴之は尚攻撃態勢を緩めず、否、より強め警戒していた。というのも戦闘において関係者を偽るケースは多々あるからだ。そんな基礎中の基礎を貴之が怠るはずがない。

鷹狩永久と名乗った男は貴之にこう言う。

「憶良様、私はあなた様のお兄様、曾良様と並々の関係を結ばせて頂いておりました者でございます。憶良様が幼少の頃より、お目に掛かることは屢々（しばしば）ありました。故、憶良様をご存じでない曾良様との契約、取引なども多数ございます。また、今回のこの貴之邸を伺わせて頂いたのは曾良様からの託けを憶良様にお伝えすることでございます」

「兄さん……」

貴之の心中はごちゃごちゃに混沌し、渦巻いていた。兄という大きく偉大なる存在を思い出し、そこから連想される善き日の思い出、修行した日々、そして……一族を皆殺しにされた日が浮かび上がる。

ルリカは黙って貴之の様子を窺っていた。尚フルーツナイフを永久と名乗った男に突きつけているが、その手が微妙に震えているのが分かる。

「曾良様からの託けは一つ。それは、来月、十月三十日に行われる『ハロウィン』までに魔法を行使するための手はずでございます」

魔法を叶えないかと察します。

曾良様のためにも。

0・(6) 思い出を告げる者(後書き)

お読み頂き有難うございます。鷹狩永久さんの登場です。彼のおかげで貴之君の決意だいが決まったみたいですね。・・・テストがありました。中々平均点が・・・って個人話なんておもしろくないですね。すいません。ええっと第一章を始めるにはもう少し時間がかかりそうです。それでも良い方、奇跡的に毎回読んでくれている方は今後ともよろしく願います。

貴之邸

「憶良様、今この時よりあなた様には“魔法”を巡る戦争にその身投じて頂きますぞ。それは曾良様の願いであり『夢』なのですから」

貴之は鷹狩たかがりえいきゅう永久に突きつけていたフルーツナイフを引き、壁に投げつけた。

それは貴之の兄との思い出を壊したあの女に向けられた怒りだったとも言える。もし、あの女が一族を手に掛けていなければ今頃、兄から直接説明を聞けたはずなのだから。

日々絶えることの無かった復讐心が今一度大きな形となって貴之に再確認させる。

鷹狩はナイフを引いたことに礼を言うと言ちながら貴之に魔法について詳しい説明を始める。貴之にその話を聞かない道理は無かった。

「憶良様、魔法使いというものは重々承知のこととお察しします。では、“魔法”そのものについてのことはご了解でしょうか？」

永久は丁寧な口調で貴之に問う。

「いや、詳しくは知りません」

貴之も敬語へと移り変わっていた。ルリ力は黙って聞いている。

「では、ご説明致しますよう。そちらの方もどうぞこちらへ。その

場所でございますと何かと不便でございます。聞き漏らしなどがございましたら曾良様に顔向けできませんので」

そう言つて永久はルリカも貴之の側に呼んだ。

しかし、貴之は立ち話をさせるのは失礼だと思い永久をルリカの側、つまり来客用のソファ―に座らせることにした。

永久はその持てなしに大層感謝していたが、自分が貴之邸の物品に腰を掛けるのは気が引けると言ったので、永久はソファ―の横後ろ、執事などがよくいる場所に陣取つた。

ルリカはてくてことテーブルを回り貴之の横に座つた。やはり、ルリカも貴之と永久の話しの間に自分がいることが失礼だとし、貴之の視界には映りづらい横へと移動した。

こうして礼儀を弁えた移動が終わり、貴之の視界には永久しか映らず、形式上一対一の会話の形となつた。

永久は話しだす。

「憶良様に果たして頂きたいことは『魔法を唱えること』これに依存、または異議はございませんか？」

「無い。兄である曾良の遺言とあらば聞かぬ道理はありませんし」

「結構。では、曾良様よりの託けをそのままお話致します。敬語などは含まれませんでしたが了承下さい。それもまた曾良様よりのことでございます」

「分かりました。元より、永久殿が俺に敬語を使う必要はありませんし」

貴之は注意事項を聞き、兄である曾良の言葉を聞く覚悟を決める。その覚悟は過去と今を結ぶ大事な財産でもあるからだ。

「では……。『憶良、お前が今どこで何をしているのかは知らない、何歳なのかも。この託けは永久さんから聞いていると思う。まあ、永久さんならきちんと言ってくれると思うしな。・・・となどでこんな遺言染みた託けを永久さんに託したかと言うと、もしもの場合を考えてでだ。俺がどつかそこら辺で魔術の修行している時に聞いているのかもしれないが、まあ一応死んでいた時の場合で話すぞ、憶良。もし俺が生きているのなら帰って来た時に笑ってみる。まあ、死んでたら遺言だと思ってくれ。お前には“魔法”を発動させる意味がある。憶良、お前は【人では無い】。お前は【化け物】だ。お前が生まれたのは実のところ“俺より早い”。母方が違つかそうだったことはない。同じ母のおなかの中から生まれた。そう、貴之 美里みさとの子宮の中から。では、なぜお前が長男では無いのか。・・・それは一族の問題がかかってきたからだ。【化け物】を貴之家の頂点に立たせることはできなかった。それは、魔業界での地位確立を目指した我が貴之家の大きな過ちだと俺は思っている。そのことについて詳しいことはお前には話さない。では、お前と俺が入れ替わった仕組みだけ教えておこうと思う。分かっていると思うが魔術を使って入れ替えた。精神だけを他の器に移す禁術を使ってな。その魔術を使用した時に約十名の貴之分家の人間が死んだ。まあ、完結に言うと言うことだ。そして俺はお前の身体に、お前は俺の身体に精神を宿し、兄弟逆転兄弟として生きたのだよ。それによつて
すまない。ちょっと待ってもらえますか永久さん。どうも何かがここ貴之本家に攻めてきたようです。後にもう一度お話』・・・ここで曾良様のお話は終わりです。この後曾良様は死亡なされました」

貴之は黙って聞いていた。否、黙るしかなかった。

「兄さんが弟で・・・俺が兄？」

記憶には残っていない。そのことについては後日魔術について話せなかったことをルリカに話し、魔法について聞かなかったことをルリカから聞こうと思っっている。

永久は貴之も知らない貴之家への特殊ルートを使って帰ると言っていた。それにルリカも一緒に帰してくれるとのことだったので甘えることとした。

現在貴之は来客用のソファに座って頂垂れている。しかし、兄である曾良の話聞いて“もう一つのやるべきこと”を実行せんと傷心した心を引き摺りながら地下へと向かう。

地下十階。

ここは捕らえた魔術師などを収監したり拷問、尋問などを行う部屋だった。

そんな牢獄の一室に女が壁に束縛されていた。

そう、貴之と高校で戦闘を行ったあの女魔術師である。

金具で両手両足を拘束し、首には鎖で出来た首輪が二つ巻いてある。金具は特殊な金属で出来ており、魔術が発動できないようになっている。

女は貴之に気づくと声をかけた。

「尋問？ それとも拷問かしら。どっちにしても楽しみだわ」

女は余裕の笑みを浮かべている。まるでこうなったことが楽しくて仕方が無い、一種のイベントであるかのよう。

対し、貴之は無表情で女が収監されている部屋に入り女に問う。

「綾城家のことについて話してもらおう」

「嫌よ」

女は微笑みながら貴之に向かって言う。貴之が魔術師である以前

に高校生という年下ということに余裕を抱いているからだろう。

「そうか。・・・男はどうした？」

捕らえたはずの男の魔術師がここにはいない。そんな貴之の疑問に一番首を傾げていたのは女魔術師だった。

「あなたが始末したんじゃないの？」

「ああ、そういえば・・・死んだな」

そんなことはない。男は確かに黒鬼の能力によってここに飛ばされるはずである。しかし、現実ここにはいない。貴之は通過の過程で消滅してしまったのではないかと結論づける。

そして女の尋問を再開する。

「綾城家について話せ。・・・そうだな、まずは綾城彩乃あやき あやのって奴は綾城家にいるか？」

「さあ、知らないねえ」

女は笑いながらとぼける。

貴之はこれ以上この女には話すことだけでは埒が明かないとして実力行使に打ってでた。近くの小刀を右手に持つ。

しかし、女は笑い続ける。こういう諜報部に所属している以上このようなケースは想定済みで拷問尋問に対する訓練も多数受けている。それに高校生が訓練以上のことをできるとはそうそう思えなかった。

それが甘かった。

『述べてしまった』

その機会を貴之が逃すはずもなく女の頭に自分の手を押し当てる。

「墜ちろ」

貴之は短くそう言うところの尋問が終わったことを確認する。

女の意識は遠くへ消えていった。

「終わったか」

貴之は女の頭から手を放すと、とつと地下階段を登り始めた。

先程貴之が行った戦術は、『幻だったと思い込ませ、その瞬間でできる気の緩みに自分の意思を挿入させる』ことだった。つまり、脚が“治ったことが幻術”で実際は脚はちぎれたまま、血は滴っていた。

それに気づかず、脚が治ったことに油断した女は気を緩め貴之家独自の自白専用魔術によって墜ちた。もう分かるところだが、その魔術の発動条件は『安堵』。

貴之は風呂に向かう。女魔術師の返り血を多く浴びていたからだ。風呂はとても大きかった。また、風呂が男女ごとに一個ずつある。いまではもう貴之一人が大浴場を使うことになっているのだが。

貴之は風呂に入りながら、先程得た綾城家の絶対領域の解除コードを頭の中で反復し、確認するとお湯の中に潜った。それは、今まで賑わっていたこの浴場を思い出すためのものでもある。実のところ貴之の本家の憶良や曾良、両親である忠岑^{ただみね}、美里^{みさと}には個人の風呂があったが、憶良、曾良はここ大浴場でよく親戚や本家の人間とはしゃいでいた。それも遠い記憶の中だが。

あの女のせいでも……。

この家に居続けるのには思い出を忘れないためもあるが一番の理由は復讐心をより強く保つためである。

貴之は風呂から上がると、ルリカの携帯に電話を掛けた。ルリカは貴之が「家に行く大変さ」を教えた時に携帯番号を渡していたのだった。……まあ、赤外線ではあるが。

貴之はルリカが本当に家に帰れたか心配で電話を掛ける。しばらくすると電話にルリカが出た。

「おい、ちゃんと帰れたか？」

『無論永久殿にこちらの世界に帰してもらった』

「こちらの世界って……お前俺んちが異世界かなんかと勘違いしてねえか？」

『違うのか？』

「違うわ！ 馬鹿野郎」

『よかった』

「何が？」

『だって貴之君が元気を取り戻したから。私は結構心配していたのだぞ？ こっちの世界に帰還してからもおちおち八つ橋が喰えんかった。まったく、自販機でぜんざいを買う羽目になったぞ』

「知るかそんなこと。まあ、心配してくれるのは大変有り難いが、後半の部分俺に押しつけることじゃなくねえか？」

『なんのなんの。貴之君、私は友達のことを全身全霊をもってして心配するぞ！ そのような些細なことをいちいち気にするな。私の八つ橋がまずくなる』

「全身全霊をもってしてお前のその気迫から逃げ出すことを所望するぞ。・・・ああ、後明日学校休むからよろしく」

『何！？ 聞き捨てならんな貴之君！ なぜだ？』

「傷心したから」

『ふっ、杞憂を。そんなことは貴之君の大親友であるこの私にぶつけ、私の胸に飛び込んでくるがいい。寛大なる心をもってしてさながら聖母マリアのように介抱してやるぞ。もう二度と離れたくなくなるぐらいの私の友達愛を受け取るがいい』

「嫌だね。余計に学校に行きたくなくなっただぜ。というかむしろお前が学校にいるから俺は行きたくないのかもしれないな」

『何！？ そうだったのか！！・・・仕方が無い、今月私は学校を休むとする。貴之君私の分も生徒会業務をこなしてくれ。私はどこかで貴之君を応援しているよ。じゃあ、ま』

「嘘嘘嘘！ 大好き！ 俺ルリカちゃん大好き！ だから俺に生徒会の業務をやらせるとかマジでやめろ！ 絶対だかんな、絶対だぞ！」

『では学校に来ると言うのか！！？ それは嬉しい限りだな。私も友達が学校にいると心が弾むぞ！ やっほーい、貴之君が学校に来

るうううう！』

「遅刻せずに登校させて頂きます」

『うむ、じゃあな貴之君』

「お休み」

そう言って二人は通話を切った。

イギリス 皇室

「ウィツ、ザウト~~~~~」

「させるか！」

ウィザウトはもう喰らわまいと速攻で後ろを振り返る。そして王女セリーナの強襲に備えたがそこには誰もいない。

「何！？」

「甘いわ！ ウィザウトおおおおおおおおお！」

例によって背後から抱きつきを喰らった。セリーナは離れまいと必死で背中にしがみつくのだが、その手はこれまた例によってウィザウトの首に回っている。

ウィザウトはその絞殺染みた攻撃に苦しみながらも勢いよくお辞儀することで、後ろのセリーナを投げ飛ばした。

セリーナは空中を舞う。

すると、ウィザウトは卓越した動きでセリーナの落下地点に入り込み、抱きかかえるような形で小さな身体を受け止める。

「セリーナ様、いつになったらこのお決まりを終えて頂けるのでしょうか？」

「ウィザウト、いつになったら私の強襲に対応できるようになるのかしら？」

ウィザウトは抱きかかえているセリーナに、セリーナは抱きかかえているウィザウトに問いかける。そして、二人とも薄く笑う。

「いつになったら終わるんだよこれ!？」

「ウィザウト、あなた最高騎士パラディンなら私の攻撃ぐらい避けなさいよ!？」

二人はそう言い合う。

そしてウィザウトが先に次の言葉を言う。

「なんで声と強襲の方向が逆なんですか？ セリーナ様は瞬間移動系の魔術使えましたっけ？・・・違う、そうか、録音機」

「はっ、今更気づいたのバラデン？ 戦場では一瞬の判断が死を招く。それに情報攪乱は戦術の鉄則でしょ？ それを怠るのが悪いわ。怠惰ね、お父上に報告してあげましょうか？」

パラディンだろうが。

セリーナは見下されている状況下で上を見ながらウィザウトを見

下さす。ウィザウトはそれに苛立ちを覚えながら、セリーナに対し反発する。

「セリーナ様、そのようなことをおっしゃるのであれば私としても皇帝陛下にお伝えしなければなりませんなあ。一個二億の花瓶を割ったとか、私の剣に落書きしたとか、私を強襲するためだけに使用人を使って家をからくり屋敷にしたこととか・・・まあ、多数ありますなあ」

「・・・くっ、卑怯な。こんな幼気な少女を弄んで楽しいというの？ はつきりしなさいよ」

セリーナは涙でちよつと潤ませた目で訴えたがウィザウトは動じない。むしろ蔑むような目で見ている。

「セリーナ様同情作戦は前々々々回使われたばかりでございますよ。それにセリーナ様の言い分は筋が通っておらず、些か不問を感じざるおえませんな」

「・・・ちっ、やっぱ駄目か。まあ、元よりこの作戦はウィザウトを打ち負かすのに活用はできないと踏んでいたけどね。まあ、究極のところあのことでしょ」

「！！ やりますね。あのことを強請の材料としてこようと。ですが忘れてはいませんか？ 私にも強請のとんでもないことがあることを」

ふふふ。

二人は笑う。

その年の差十二歳。

楽しみに。

「ここは停戦しましょうかウィザウト」

「望むところですセリーナ様」

二人の戦いは続く。

0・(7) 託け(後書き)

お読み頂き有難うございます。日々精進していきたいと思います。

イタリア・ローマ アリタリア空港

「行くのねレオ」

「ああ」

ティーナは男に問う。それは野暮な質問であり、意味も価値もない質問であった。

レオは短くティーナの言葉を聞き入れると日本行き便の待機場所へと向かって行く。その足取りは重く、少し緊張しているようにも見える。彼は今から日本へ向かい、そこで世界を救うという大きな仕事が残っている。それは誰かに強制されたものでもないし、何かの理由がある訳ではない。ティーナには『ストリートチルドレン』を救うためと大義名分を述べたが実際のところは自己満足、ただの償いでしかない。昔犯した罪を子供達を救うというもってもらいたい言い訳を創って洗い流そうとする弱者、卑怯者である。そんなことはレオ自信が重々に分かっていて。それでも。

「じゃあな」

「行ってらっしゃい、レオ。生きて帰ってきてね」

「.....」

レオは何も言わなかった。

魔術の抗争によって、子供達を救う道中で死んだというもっともらしい死に様を望んでいたが故に。

イギリス 王室

「ウィツ、ザウト~~~~~!!!」

「今回はどっちからだ？」

例によって強襲である。しかし、声は聞こえど姿は見えない。録音機という一回使った同じ手を使ってくるとは思えない。

前か後ろか……

「上だああああああ！」

ウィザウトが天井を見上げた瞬間に扉(?)が開き落ちてくる。しかし、ウィザウトは見上げた瞬間に『敗北』を察した。なぜならその物体はセリーナではなく、『人形』だったのだ。つまり、上に意識がいつている今もつとも隙が出来るのは……

「甘いわあああああ！」

そう、『足下』である。

セリーナは床から勢いよく飛び出るとウィザウトの背中にホールドした。今回は手を首に回すようなことはしなかったが代わりに脇の下をこちょこちょとくすぐる。

ウィザウトは耐えきれずにつつすら涙を流す。それは笑いだっただのか、十二歳年下の十二歳に勝つことが出来ない自分を恥じたのか定かではないが……。

「ふうっ、ははは！ どうしたパノラマ？　なんか次は勝つとか嘯いていたような気がしたが？」

「ひっ……ちょ……やめやめ……セリーナアアアアアアアアアアアアアアアア！　……様」

ウィザウトがそうシャウトするとセリーナはなんとも魔性の笑みを浮かべてそのこちよばし攻撃を中断して“やる”。

逆にウィザウトは呼吸困難になり、豪華絢爛な赤のカーペットに手をつき、げほげほと息を乱す。

「だらしないわね、パノラマ」

「パラディン……だって、言っただろうが……申しておりませしょうが。というか……ゲホゲホ……原型がありませんぞ」

ウィザウトは呼吸困難の中必死で言葉を紡ぎ出す。

それを若干十二歳の戦術家は文字通り見下す。（十二歳という年齢に似合わず）こんな小さな女子供に見下されるウィザウトは心底屈辱を感じていた。しかし、それは同時にここウィンザー家において過去類を見ない戦術の天才と謳われた第三王女セリーナ・ウィンザーの真骨頂を見せているとも言える。

「あっ、そうそう。ウィザウトあなた、日本へ行くのだそね」

「そんなことは一度も聞いておりませんが（嘘）」

ウィザウトはいつもとは異なる、厳格すぎる礼儀作法を用いてセリーナの問いに答える。

そのことがここにいるセリーナに知れば「私も行く〜！」とか

言い出すに決まっている。そんなことは絶対に止めさせたい。そんなことになったらウイザウトの身体はもたない。それに・・・今からウイザウトが行かんとしているところは紛れもない戦場である。自分が忠誠を誓った『セリーナ』を戦場に赴かせることなぞ断じてならないことであつた。王が何というかと、忠誠は『セリーナ』に誓つたのだ。セリーナの安全を第一に考えるウイザウトとしては遊びではないのだ。

魔術における戦争。

ウイザウトはその戦争において“魔法使い”として魔法を行使し、世の中から嘘を取り払おうと望んでいる。

それは彼の過去に関わるが、それもまたレオ同様自己満足にしか過ぎないのかも知れない。

そんなウイザウトの心中を察したのか、セリーナはこう進言する。それは第三王女セリーナ・ウィンザーからとしての言葉だつた。ウイザウトのいつもと違う隠し方にセリーナは呼応する。

「ルール・ウイザウト。あなたは私、イギリス第三王女セリーナ・ウィンザーの身を守護し、魔法を行使するためにその身を呈して我と共に戦うことを誓いなさい」

セリーナは第三王女として、英国武士ルール・ウイザウトに命令を下す。

もちろんウイザウトがそれを納得するはずも無く・・・。

「聞けませぬ。我、シュナイダー・オミリオン、もといルール・ウイザウトには王室より、国民より、世界より望まれている願いを果たさねばなりません。その道中、王女様を同伴することは我、ルール・ウイザウトの望みではございませぬ。また、お怪我をなされる可能性も十二分にございます。その」

「行く!!」

セリーナはウイザウトの言葉を遮るように言う。
そこにはただならぬ思いがあった。

「ウイザウト・・・ううん、違う。シュナイダー・オミリオンは初めて『私を』見てくれた人。第三王女セリーナ・ウインガーではなく、私として見てくれた人。そんな恩人が死地へ行こうとしているのを私はただ黙って見ていることはできない!・・・初めての人はやっぱり、特別なの、ウイザウト・・・」

ウイザウトは答えられなかった。

セリーナは自分のことを心配し、着せた訳では無い恩を返そうとしている。その気持ちをどうして蔑ろにできようか。・・・だが、戦場は甘くない。

「ウイザウト! 私を戦地へ連れて行って!」

そう、いくら回り道にしても、いくら言葉を並べようとも、言いたかったのはその想いただ一つ。

セリーナは覚悟を決めた目でウイザウトを直視し、ウイザウトも頑な目でセリーナを見つめ返す。

その目を見て、ウイザウトは一つの結論を出す。

「分かりました。・・・自分の気持ちが」

「じゃあ」

セリーナの顔が綻ぶ。

しかし・・・。

「セリーナ様にはここバツキングダム宮殿にて、お待ちして頂きます」
ウィザウトはそう言い放つ。

セリーナはそんなウィザウトの言葉に表情を無くし、ゆっくり泣き始めた。いくつもの小粒がセリーナの小さな顔を流れ落ちる。

「・・・なんで私を置いていつちゃうの？」

セリーナは涙を浮かべた目で、ウィザウトに問う。その言葉の意味は谷よりも深かった。

セリーナは『女の子』として扱われたことがなかった。また、外も許されず、バツキングダム宮殿内でただ時を過ごしてきた。その時間は全て『軍事戦術』に使われたものだった。彼女は紛れもなく天才であつて、紛争地帯の戦況を一気に傾け、イギリスの有利になるように勝たせてきた。それが永遠と続いた。人を跪かせるための作戦、人を守るための作戦、そして人を殺すための作戦・・・それら全てを行ってきた彼女に『女の子』としての時間は皆無に等しい。故、彼女が唯一『女の子』として慕うウィザウトがいなくなることは並々ならぬ想いがあり、またそれをウィザウトは知っていた。

「セリーナ様、私はセリーナ様を“主人”として慕ってきました。ただ、命に従いたただ業務をこなす。・・・しかし、私はあなた様に関わって行く内に救ってあげたい、守ってあげたいと思うようになりました。こんな小さな子供に人並みの幸せを与えることができないのかと。あなた様は王女様・・・私でさえ王女とはただ優雅に暮らし、時が来れば王となられるお方だと思っております。しかし、ここに仕えるようになりあなた様を知った時、私の現実の本質を見抜けていなかったと、深く反省しました。それこそが私の言う『嘘』です。世間の風評やイメージを全て無とし、人間がその人間として

嘘をつかずに、身分関わらずに生きていける・・・そんな世界を創造するために私は行くのです。そしてそれら消えぬであろう現実を叶えてくれるのが“魔法”です。この戦争はセリーナ様のためでもあるのです。ですから、私の望みを叶える目的を戦地の側に置いて置くわけには参りません」

ウィザウトはそう言い去った。

どれだけ伝わったか分からない。どれだけ理解してくれたか分からない。

でも、ウィザウトは自分の思いを全てセリーナにはき出した。

「では、私はこれでいきます」

ウィザウトは短く、現王エリザベス・ウィンザーにそういつときれいなステップで踵を返すと王室を後にする。

イギリス バッキンガム宮殿 広大な庭 池の畔

彼女はその年齢に合わず、状況を理解してしまう子だった。

それが、良い悪いどちらとも受け取れるスキルなのだが・・・。

「ウィザウト・・・いつてらっしやい」

ウィザウトは車でヒースロー国際空港まで行く予定だが、その前に彼は最高騎士として最優先に守護を行う王女、セリーナ・ウィンザーと話をしていた。

セリーナは無理に取り繕ったのがひしひしと感じられる作り笑顔でウィザウトに別れの言葉を述べる。それは自分がこのパラディンと別れるつらさを雄弁に語っていた。・・・そう、雄弁に。

「私は誇りに思う。我が国イギリスを代表し、魔法を行使することで世界を救おうとするパラディンが私のパラディンであることに。私は・・・ぐすっ・・・私は・・・とても嬉しいわ、ウィザウト！だから・・・がんばってきてね！」

少女には重すぎる言葉だった。

その体格で、その年齢で、その無邪気さで、その明るさで、・・・そんなことを言うのには荷が重すぎる。そしてそれを言わせてしまっている自分がある。ウィザウトはセリーナの心の声をしっかりと自分の心に刻みつけた。

そして、世界を救うであろうパラディンはゆっくり立ち上がる。そして、今なお『泣きながら笑顔を作っている』少女に背を向けながら車へと歩いて行く。セリーナの想いはよく分かっている。彼女は自分がいない間また、自分の代わりに軍事戦術に駆り出され、酷使され、傷ついて傷ついて。そんなことも分かっている。とうの前に分かっている。でも。

「では、あなた様のパラディンは行って参ります。この世界に平和を、あなた様に本当の笑顔を届けるために」

ウィザウトは歩き出す。

振り返らずに。

悲しみて頬をぬらす、彼女と、

悲しみて頬をぬらす、自分に、

想いを押しつけながら。

A 高校

前日、貴之はルリカに電話を掛けたところ、「来なかったら生徒会業務押しつける」と半ば脅される形となったので渋々ここA高校に登校していた。

A 高校。

この学校は進学校でありながらも部活動の充実した学校である。中でもホッケー部は全国で1、2を争う程の強豪チームである。「A高校」・・・これは何も伏せているのではない。「八目地市立A高等学校」という正式名称である。なぜこのような名になったのかは定かではない。

貴之は校門を入ったらすぐに見える大きな十字架の石像を視界の端に捉えながら生徒玄関へと向かう。

校舎のことを心配していたが、朝のショートホームで「何か知らないか？」という先生からの問いかけがあっただけで騒がれることはなかった。それはとても『異常』なことであったが、生徒会長如きに数十万の設備を容易に用意してしまう『理事会』なのだから、校舎のことは理事会が何かしたのかもしれない。

授業に支障がでるのかと思っていたが、どうも空き教室三つを利便して通常授業が行われたそうだ。漫画や小説のように勝手に直っていたらなあと思う貴之の憶良十七歳であった。

さて、時間は人の心知らずその時を迎える。

放課後。

貴之は『綾城彩乃』に出会った。

そう、昨日の尋問で聞き出した『綾城家に関係のある人物』の綾城彩乃である。貴之は今まで彩乃“ただの”綾城さんなのか“対象の”綾城なのか疑っていた。しかし、それを確かめる術はなく二の足を踏んでいた。

今貴之は“復讐の対象者の何か”に会っているのだ。復讐の対象はあくまであの女……。だが、もし都合が整えば綾城家の一族を全員皆殺しにするだけの覚悟と憎しみを持ち合わせている……。貴之家のように。

貴之は彩乃を視界に捉えると。

「おう！ 綾城じゃないか、お前昨日先帰りやがって、俺なんていつも残っているから校舎破損の容疑者になっちまっただろうが。お前がいれば証言者になってくれるからもっと簡単にことを収められたものを……」

「あつ、貴之先輩じゃないですか。こんなところで会うとは奇遇ですね。もしかして、私達結ばれる運命なんじゃないですか？」

貴之はその心中を奥底に封じ込め、『綾城彩乃が知っている貴之憶良』として話しを進めていく。その貴之の葛藤は計り知れない。

彩乃はそんなことに気づくはずもなく、『魔術を知らない、魔法を知らない貴之憶良』に話していく。

「貴之先輩、昨日の用事は本当に大変だったんですって」

「はっ、お前のことだからどうせ、『今日は新作CDの発売日だ！ いかねば……』……ってところだろう？ どうせ、お前だし」

「お前だしってなんなんですか？ 私彩乃ちゃんだったらなんだって言っんですか？ 猛省を猛省を所望します！ 審査に通したら私勝ちますよ？ なんなら訴えてあげましようか？」

彩乃は支離滅裂な言葉をあえて言う。それは笑わすためである。
・貴之の心中など知らずに、ただ好きな先輩と話せることを大いに悦んで。

「どこに訴えるんだよ」

「え〜っと、その〜・・・そうだ！ 生徒会長がいるじゃないですか！」

「それだけは、嫌だね。あいつは俺のことをマークしてるって言うたろ？ 関わりたくねえよあんな“完璧の魔女”なんかに。それに、お前の本当の用件はなんだったんだよ？」

「それは〜・・・ふっ、真実を教えてやるぜ貴之先輩。私はなあ、『新作DVD』を買いに行っていたのだ！」

「エロいやっ？」

「ふっ、見くびってもらっては困る、そんな訳なかるう。お兄ちゃんがたくさん出てきて妹にあ〜んなことやこ〜んなこと」

「やっぱそうじゃねえか」

貴之と彩乃は二人して笑う。

お互いがお互いの腹の中など知らずに。

お互いがお互いを“いろいろな意味で”想っていることなぞ微塵

も心を感じさせずに……。

A 高校 生徒会室

「なんでこうなるんだよ……」

貴之はこの状況を心底深いに思っていた。

現在、生徒会室には貴之の本人を合わせて五人居る。

一人は生徒会書記、大宮おおみやこのみ。彼女の特徴と言うか、チャームというかなんだが……名前を「おおみあ」と読むことにある。実に下らない。だが、本人にはかなりのコンプレックスらしく、今まで一度も、出席名簿にふりがなが書いてあったとしてもきちんと呼ばれたことはない。……珠飾たまもとのほる生徒会長を除いては。

一人は生徒会会計、柝倉たくくら元春。彼女もコンプレックスを抱えている。よく男と間違えられることだ。このどちらとも言える名前のおかげで小学校の風呂割り振りで男子生徒として登録されてしまったという残念な思い出がある。

残りは貴之の憶良。

珠飾ルリカ生徒会長。

そして……。

「ごつめくんなちゃい。まあ、貴之先輩と熱烈じゃんけんしてたら窓割れちゃって。まあ、校舎大破している訳だし許して下さいな生徒会長殿」

ぺこりと頭を下げる天真爛漫、純粹純悪、雷雲不運、綾城彩乃だった。

「いや、別にそこまで怒っている訳ではないのだよ、綾城彩乃ちゃん。ただな、なんで『貴之君』と“熱烈”じゃんけんなんてやっているのかを訊いている」

ルリカは表情には出さないが、腹の中ではふつつつとした怒りが湧いている。

それを女の勘（？）で感じ取ったのか純粹純悪少女は意地汚く、まるで恋人を奪われた女を哀れむが如くルリカに言う。

「いや、貴之先輩と、熱烈！　じゃんけんをしてたのは私と貴之先輩の仲がとて良いからですよ生徒会長。だから、熱烈！　にじゃんけんができるんです」

「熱烈じゃんけんってなんなのだ貴之君？」

ルリカは貴之にそう問う。しかし、貴之が純粹純悪少女が言葉を発する。

「それに生徒会長が私に対してそんな怒った風に“憶良”先輩との関係についてとやかく言う筋合いはないんじゃないかしらん」

「はあ？　貴之君がどこで誰と何やるうが知ったことではないわ！　それに関係についてとやかく言った覚えはないが？　少々熱があるのではないか？　被害妄想が膨らみ過ぎているぞ？」

女達の威嚇。

言葉自体はまあ、なんとか一般の枠に当てはめることができるけど、“言い方”となると、もう爆心地である。

彩乃はルリカの言葉にスイッチが入ったのか、あくまで“上品に

”ルリ力を攻撃していく。

「あら？　じゃあなんでそんなに言葉が荒いのかしらん？　さっきも言いましたけど別に憶ちゃんがどこの誰と仲良くしていようが怒る理由にならないんじゃないやなくて？」

「いつから憶ちゃんになった？」

「はっ！　私としては健全なる貴之つちが貴様のような危うい悪女に誑かされるのを黙って見ているのがつらいだけだ！　生徒会長として生徒の身の安全を憂うのは当然のことであるう」

「いつから貴之つちになった？　それに誑かされた覚えはないが？」

貴之の意見を全く、小耳にも入れずに二人の戦いは続く。残りの二人の生徒会役員は早々にこの場をお後にしている。いつ飛び火するか分からないし。

そして討論は意外や意外、あらぬ方向へと流れ出す。

「へえ、で生徒会長は憶リンのことが好きなんですか？」

「誰が憶リンだ、馬鹿野郎」

腕を組みながら、横目でルリカにそう言う。なんとも嫌な奴である！　綾城彩乃！

生徒会長珠飾ルリカはそっと目をつぶり、そっと開眼すると・・・。

「大好きだが？　（友達として）」

「そ、そう？・・・わ、私も大好きだけとおおおお！？」（異性として）」

「・・・俺はいつからここまでもてるようになった？ モテキか？」

貴之は無表情でその二人を眺めてつつこみを入れていく。観客のように、この色男はまるで自分が関与していないかのように眺めている。

そして食い違う二人の想いはそのまま、食い違ったまま戦場を熱気滾^{たぎ}らせる。

「へえ、以外ね“完璧の魔女”と謳われたあなたがこんなぼんくらを好きになるなんて（貴之先輩のイメージをダウンさせることにより、攻撃しない攻撃を実現！）」

「貴様こそ、全教科95点を超える成績を有しておる癖に、こんな精神の弱い負け犬を好きになるとは（貴之君、本当にすまないと思う。だが！ これも一般人を近づかせないためだ許してくれ）」

「俺の人権は？」

貴之はただ呆然と二人を眺めていた。自分がどんどん辱められていることを気づきながらも。

そして、二人の想いはおもしろいように交錯していく。

魔術師、彩乃 一般人で貴之を好き。（異性）

普通人、ルリカ 魔術師として貴之を好き（友達）

つまり、彩乃は“一般人と恋のバトルしていると思っている”。

（魔術を知り始めた少女なのに）

ルリカは、“魔術師である貴之に一般人を近づかせないために攻撃している”。（真の魔術師なのに）

そんな二人の勘違いを心の中で楽しみながら、貴之はルリカの背後に見える景色を楽しんでいた。二人の論争をBGMとして。

0 - (8) 我が儘 (後書き)

お読み頂き有難うございます。さてさて、秋も深まったなかサツマイモが恋しい今この時です。閑話休題。ウィザウトは今後魔法を巡る戦争である人につくことになりませんがそれは、また後ほど。ではよろしければこの作品にお付き合ってください。誤字脱字には気を付けていますが、ありましたらご報告頂けると幸いです。

A 高校屋上 ルリカと貴之

「・・・あいつには関わるな」

「むむ、聞き捨てならんな。あの悪女と貴之君は結ばれたいと思っているのか？」

ルリカはまだ勘違いしたまま、貴之に問う。

一方貴之はそんなことを無視して話しを始める。昨日あれだけ学校で話すのを嫌がっていたが、もう聞かれたところでいいと思っていた。鷹狩永久・・・兄である曾良（いとこ）からの遺言（いづなごころ）を聞いて。

貴之はフェンスに腰を掛けたまま話す。対し、ルリカは扉の段差に座っている。

「・・・綾城彩乃、あいつは俺の対象だ」

「対象？ 恋愛の？・・・ふっ、どうやらボケパートは要らん用だな」

ルリカは最初こそとぼけていたが、貴之の神妙な顔つきを見て、事は“おもしろくない話”であることを悟る。ルリカは一度貴之から視線を外し、空を見上げる。

貴之はやっとルリカが“おもしろくない話”を真面目に聞いてくれることに安堵する。そして、話を続ける。

「ああ、目的の対象だ。・・・ここから先、お前に選択肢をやる。」

一つ、この場から立ち去り、二度と俺に関わらないこと。二つ、このまま俺の話を聞いて俺に荷担するか」

「愚問だな」

そうルリカの結論は一つ目を聞いた時から決まっている。それはルリカにとって当然で必然で歴然とした結果だった。

「初めてできた『友達』だぞ。この私が見捨てる訳がないだろう？」

「・・・俺が見捨てる側なんだがな、今の立場上」

貴之はルリカの返事に“納得せずに”了承する。こんなことを言っても別に心が通じ合っているという訳ではないが、貴之には初めからルリカがそう言うであろうと予測、否、分かっていた。

「そうか」と一言呟くと、貴之は『目的』について話始める。それは紛れもなく、非人道的であり、非魔術師的である無内容だ。それでも貴之は止まらずに躊躇いも無くルリカに話す。

「俺の目的、それは『綾城家の人間を皆殺しにする』ことだ。お前は」

貴之の言葉は唐突に切れる。それは、噛んだからでも何か横槍が入った訳でも無い。ただ、横から返事を返したのだ、この自分の目の前にいる女が。生徒会長であり、“完璧の魔女”と称され、魔術師を普通が倒すという偉業ならぬ異業を成し遂げた女、珠飾ルリカが・・・こう言っただけだ。

「うん、分かった。『喜んで』手を貸すぞ貴之君」

友達だろ？

貴之は続きの言葉を失った。

「自分で言っている意味を分かっているのか？」

貴之はフェンスに身体を預けた姿勢は変わらないがルリカに切迫するように言い放つ。それを窺わせるかのように貴之はフェンスの一部をぎゅっと力を込めて握っている。

「貴之君が選べと言ったんじゃないか？ だから私はそれに答えたまでに過ぎないし、それに貴之君が言っていることは冗談ではないのだろうか？ 真剣に悩んでいることなのだろう？」

貴之は少し間を置いた後、無言で小さく頷く。

「・・・だったら『友達』として私が動かない理由にならない。貴之君がたとえ、“どんな相談をしてきても”私は喜んで手を貸すぞ」

友達じゃないか。

ルリカは屈託無い、“あの”笑顔で貴之に無言で問いかける。それは貴之に「そうだ」と言わせるためにそうしている。ルリカは右手と左手を自分の両頬に当てると尚笑顔で貴之に質問していく。

「で、具体的な対象は誰で、どこの人間で、どんな人間で、どんな

魔術師で、どんな作戦で、どんな理由で、どんな人とタッグを組むのだ？ 貴之君がこんなことを私に話しているのだから少数では殺せない人間、もとい魔術師なんだろう？」

・・・まるで恋人とデートの計画を進めるかのように

・・・無邪気に

・・・陽気に

・・・楽しそうに

・・・そう、友達と遊ぶ計画を立てるように

・・・復讐を明確な計画に仕立て上げていく。

貴之はそんな彼女を心底怖れ、逆に心底強いと思った。

「こんなところで、こんな奴に出会えるとはな。つくづく俺は幸運、否、不運な男だよ」

「どういう意味かはだいたい察しがつくが、それは褒め言葉として受け取っておくぞ、貴之君。さて、私に話して貰おうか、魔術、魔法、ルール、そして復讐の意味を」

楽しそうに二人は語り出す。

「魔術・・・それはこの世界のありとあらゆる性質や現象、事象を元として構成する、いわば料理のようなものだ。条件を満たし、材料を一個ずつ混ぜ合わせ、計算し、そして料理を完成させる。元となる食材は多数あるから調理の仕方やその食材によってできあがる料理は変わってくる。」

・・・主に魔術は術式を完成させないと発動できない。器具が無ければ上品な料理は作れないように。だが、ここでポイントなのは“上品な”というところにある。つまり、材料だけで勝負することもできる。・・・あまりおすすめできないが、料理と同じで。

その術式というものはある内容の詠唱や、古来からの方法で魔術のサインやマークを使う。そして最後に特別なのが祈るといった。だ。

祈る・・・これは個人では絶対に発動できない類の魔術だ。数十万人規模で祈らないと発動できない魔術がほとんどだ。この話はまた詳しく話す。

魔術に戻るが、基本魔術の魔力と呼ばれるものを底上げしてくれるのが杖だ。一見古くさい物に見えるが、古くさい。それは事実。だけど、古くさいことに意味がある。古くさいと言うことは昔から使われていたものだと言える。それならば、古くから魔術を杖を備品として使っていたのなら、杖の効力は最新の魔術備品より安定していて尚且つ十分な効力を得られるからな。そしてお前に知ってもらいたいことは、『杖を術者から奪うまたは壊すなどすれば魔力は低減する』ということだ。備品で補っている魔術師がほとんどだ。一部を除いて。

さて、次は魔法になる。

魔法はつまるところ昨日話した通り、『夢を叶えるためのもの』だ。それ以外に用途は無い。

では、魔法を使うには？

残念ながら俺も分からない。鷹狩悠久の書によると、『魔法使いが魔法から誘いを受け、その誘いに乗れば魔法が唱えられる』とある。だが、どう考えてもただの誘いじゃ無い。だったらもつと多くの魔法が行使されていないといけないからな。これも鷹狩悠久の書からだが、『魔法が発動されたのは一度しかない』と記されている。俺が思うにこの『一度』とは『魔術を生成する』ことだと思っている。

貴之は長い説明を終え一段落するとルリカの顔を再度見直す。ルリカはさして、物動じずケロっとした顔で貴之を見返していた。それが何を意味するか、“働きすぎる脳”で理解したということ。

そして、それを分かった貴之は最後、自分の復讐について話し出す。

「・・・俺の目的。

綾城家への復讐。

最初に全員殺すと言っておいてなんだが、最悪の場合、・・・違うな、最良の場合『綾城椎奈^{あやきしいな}』奴一人を殺せれば全て終わらせられる。

綾城椎奈・・・奴は俺から全て奪い取った。

仲間も親族も両親もそして、兄さんを・・・。

そんな女を俺は生かしておけない。だが、“俺では一人では絶対に勝てない”。それはどう足掻いても明確な真実で事実だ。絶対という言葉を言うと、『絶対なんてこの世界に無い』と言う奴がいるが、俺もそう思う。ただ、もし、『この世界から乖離したものだったら?』・・・乖離した人間、魔術師、化け物だったら? 絶対は成立するんだよ。憎きことにな。それが奴、綾城椎奈だ」

綾城家 最上階

「ルン、ルン、ルン、ルン」

軽やかな足取りでキッチンへ向かう一人の女。

純白のドレスに身を包みその上にはエプロンが掛かっているといふなんとも不思議な格好をしていて、左手にはフライパン、右手には包丁を持ち危険な所動でスキップをしながらキッチンへ向かう。

この部屋はここ綾城家でも有数の大きさを誇っており、個室が六

部屋、ダイニング、キッチン、露天風呂、大きなリビングといった何とも優雅な一室を個人で専用している。

しかし、場違いな物が一つ置かれている。それは洗濯機だった。

綾城家には専属の衣服屋兼コーディネーターがいる。その他三つ星レストラン並の料理を提供できる執事が五名いる。シェフを雇うというのが富裕層の定番だったりするが、代々綾城家に仕えている執事一家、豊穰家トヨシホはそれら全てをこなしてしまうので余計な部外者は城とも言えるここに入れない暗黙の了解がある。

そんな完璧とも言える環境下でこの女は洗濯物を自分で洗っている。それは今まで綾城家ではありえないようなことであった。まして、『魔術の頂きに立つ者』が、『日本を掌握できよう権力、財力がある一家の頂きに立つ者』が、洗濯を執事に任せずに自分でやる光景がありえようか？・・・繰り返すが無かった。

そんな彼女は『花嫁修行』のために家事を行う。

愛しき人を思い浮かべながら。

「今日は 週に二回の 私の手料理」

女は可愛らしくぎゅと目を瞑り、頬を綻ばせる。それは清楚で可憐で優美で神々しい彼女からは想像もできないような仕草だった。だが、実際ありえてしまっているのだからそれがまた彼女の雰囲気
を不可解にさせる。

女はキッチンのIHヒーターのスイッチを入れ、食材を加熱していく。女が作るうとしているのは、『あんかけ海鮮チャーハン』である。今は野菜を炒めている。

その時も常に有名な歌をアレンジして歌を歌っている。

女の料理は初め「まずい」と批評を喰らって、挫折を味わったところがあるが、それでも愛しき人のためを思って頑張り続けたところ、目覚ましい進歩を遂げ今では「おいしいよねこれ」ランクまで上がってきた。しかし、彼女は満足しない。「うまい！」と一瞬で言わ

せるところまで料理の腕を上げることが目標としている。

「お姉ちゃん、ただついま！」

「ひゃっ！・・・彩乃？」

「ザツツライト！ 彩乃ちゃんは今し方お姉ちゃんのおいの元に返って参りました！ 途中幾度となく生徒会長と言われる妬み女に絡まれましたが、彩乃ちゃんは負けじと応戦し、今ここに帰還した模様であいります！」

彩乃だった。

綾城家へ迎え入れられた養子であり、今はこの女の妹である。

彩乃は後ろから料理中の女にダイブしながら抱きついた。その時女のフライパンが不安定に揺れたがなんとか具は無事である。

女は妹の彩乃にこやかな困り顔で説教する。料理中で後ろにしがみつかれたままなので女はそのまま説教を始めた。

「彩乃、元気がいいのはとってもいいことだけど、今は料理中だし・・・ひゃっ、・・・ちょ止めなさい彩乃！」

「うひゃひゃはひゃ （悪意ある歪んだ笑顔で） よいではないかよいではないか。そんなにいいもの持っているんだからちょっとぐらい堪能させてもよいではないか」

「ちょっと、止めなさいって・・・うう・・・ごめんなさい。ってなんで謝ってるのわた・・・ひゃっ」

「・・・言つまでもないだろう、何をしているかなんて。」ご想像にお任せする。

しかし、流石に女も料理に集中したいのか、彩乃を引き離すべく反撃にでる。

「・・・もう、ちょっとあっちにいったなさい」

そう言つと女から光が発せられる。それ戯れのお開きを意味していて、彩乃は渋々ハッピータイムを終えることになった。そしてゆっくり、女の触っていた部位から手を放していく。だが、ただでは退かない。

「きゃあああああ！」

「ひゃふひゃふふひゃひゃひゃ」

最後にぎゅっ！ と力を入れて揉むというより握るといふ表現で置き土産を残すと足早にリビングへと非難した。

「もう・・・あつ、焦げちゃう焦げちゃう」

女はさっさとフライパンを振り熱を全体に伝え、最後の仕上げを施し料理を完成させる。

「うん？ お姉ちゃん、作ってるやつできた？」

彩乃はリビングからキッチンにいる女に向かって呼びかける。・・・こう言ったのは早く姉の作った料理を味見したい気持ちが芽生えたからである。

「うん。できたよ」

と、キッチンの奥の方で声がしたかと思うと『一瞬』で彩乃の前に立っていた。

彩乃はさして驚きもせず、女の持っている料理をのぞき込み、それがチャーハン系のなにかだと言うことを察する。

「見た目はよし。あとは味だな」

とつても偉そうな純粹純悪少女、綾城彩乃。

女は自分が今し方作った料理を彩乃の前に置く。

「どうぞ」

「・・・頂きます」

彩乃はレンゲを上手に使って、適量のチャーハンとあんかけをすくって一口。

「うん・・・うん・・・うん！・・・う、うん？・・・うん」

うんともすんとも言わない彩乃。

うんとしか言わない彩乃。

首を傾げ、姉の作った料理をまじまじと見つめ、異物が混入していないか、材料が間違っていないか確かめる。・・・別にこれと言つてやばそうな物は入っていなかった。

「・・・お姉ちゃんさあ」

「何？」

「何か入れた？ 隠し味」
「ってな感じで」

「えっ？ 何も入れてないよ？ ……レシピ通り作ったただけ
ど？ レシピは大貝さんから借りたものだけど？」

豊穰大貝、彼のレシピならば間違ったことはあるまい。というか、
二つ星レストラン以上の出来映えは見込める。

じゃあなんでこんなに・・・変なの？

「不味くないんだけど、というかおいしい」

「そうなの？ 良かった」

「でも、何かおかしい」

「何が？」

「分からない」

そうこの海鮮チャーハンは「おいしい」のに「おかしい」のだ。
未知の味？ 未体験の味？ 未体験の鰻？ ……んなことないか。
彩乃はこの料理に訝しげな表情を残したまま、残りも全て食べき
って自分の個室へと向かった。

「・・・なんで？」

女は自分で自分の海鮮チャーハンを食べてそう言った。

少し食べてみて、自分でもこの料理が多少なりとも、本来醸し出
すべき風味や香りがおかしいことに気づいたのだが、なぜなのか、
その理由がいまいち分からなかった。

そんな悶々とした自意識のなか一本の内線電話がかかった。

女は食べていたチャーハンから手を放すも、レンジを口に啜っていたことを忘れるという素晴らしき天然で受話器を取った。

「椎奈様、イギリスより、シュナイダー・オミリオン様がお見えになられました。十階の客間にお通ししておりますのでどうかご面談を」

「おふえ、でふ・・・うん？・・・あつ、わふうれふえた・・・ごほん。分かりました。イギリスよりお見えになられた最高騎士様ハラディンですね」

椎奈は受話器を置くと、こつ呟きながらエプロンを外した。

「そろそろ、魔法の時期かしら。彼も動いてくれるかしらねえ、その時に会えたらきちんと言白しなきゃ」

0 - (9) 綾城椎奈（後書き）

お読み頂き有難うございます。寒いですね。ここ〇県ではもう「冬じゃん」と言いたくなる程の寒さです。私もテストを開けてやっとなここに舞い戻れた次第であります。さて、サブタイトル「ルリカの気持ち」としましたが、まあ、この回はルリカの『友達論』を中心に描きました。まあ、そこには色々ある設定です。予定第三章『九州独立編』でルリカの生活と過去が！・・・って大丈夫かなあ？それはさておき、では、次回！よろしければお願いします！

城家 十階 客間

ウイザウトは豪華絢爛の客間の雰囲気にも多少なりとも緊張を覚えながら、この綾城家現当主の綾城椎奈がここに来るのを待っていた。来客用のソファアームまで半端ではなく、少々引きそうになってしまった。

「これは・・・王室より凄いんじゃない・・・」

天井や壁に掛けられている絵画そして銅像ならぬ金像を見ながらそうばやいていた。すると、この部屋に一つしか無いドアが開かれた。もちろんこのタイミングで出てくるのは・・・。

「初めまして、私が綾城家当主、綾城椎奈です。以後お見知りおきを、イギリスのパラディン様^{わたぐし}」

にこやかな笑顔と共に現れたのは待ちに待った綾城椎奈だった。

ウイザウトは礼儀をすべく立ち上がったのだが、そこで言葉に詰まった。

それは椎奈が美しすぎるからでも、魔業界の頂きに立つ彼女に怯んだのでも、世界及び魔業界で最高地位に位置する当主が華奢な女性だったからでもない。

それは・・・。

彼女がエプロンを着けていたからだった。

「・・・は、初めまして綾城椎奈様。我、イギリスよりの使い、最^バラディン

高騎士、シュナイダー・オミリオン、通り名ルール・ウィザウトであります」

「椎奈様なんて呼ばなくて結構ですよ、パラディン様。私まだ十七ですから」

「・・・はあ、しかしそう言われましても」

「椎奈ちゃんと呼んでくださって」

椎奈はにこやかな笑顔を崩さずにそう言う。

ウィザウトはそういった“経験したことがある”現状にどうやって対応したらよいか迷っていた。前は入るべくした王室でだが、今回は人様なのだ。どうしても、他人行儀・・・。

「しいちゃんと呼んで下さい。それともあえて椎奈と呼び捨てでもいいです」

「椎奈様・・・椎奈ちゃんをお願いします」

「はい」

椎奈は更にはあとした笑顔でそう頷く。

ウィザウトと椎奈は向かい合ってソファアに座る。

ウィザウトは本当に目の前にいる華奢な女性が自分より遙か高見に位置する魔術師、魔法使いなのか些か疑問に思っていた。

しかし、彼女がエプロン着用で着たこと、この部屋に『ボディーガードがないこと』を踏まえれば彼女が正真正銘の魔業界の頂きに立つ者だと言うことが窺える。

はてさて、・・・ウィザウトはこの『交渉』をどうしようか悩ん

でいた。彼女が本気を出せば魔法使いとして、最高騎士、そして、『英国武士』と言われる自分でも呆気なく倒されてしまう。となると、交渉はどうしてもイギリス側が不利になる呈を見せるのではないか……と置いていたところ。

「ウィザウト様」

「ウィザウト様はお止め下さい、椎奈様……椎奈ちゃん」

「椎奈様」と呼んだ瞬間に笑顔の奥に恐ろしい殺気を垣間見て、ウィザウトは「椎奈ちゃん」に変更することを英断した。まさしく英断と言えよう。なぜなら……。

パリン。

何のことはない、ただの花瓶が落ちただけだ。

数十個ほど……。

ウィザウトは「これぐらいで怒りますかあああ!？」と心の中でシャウトした。というのも、どう考えても、彼女が魔力を発散したとは思えないからである。

ウィザウトはさして驚いた呈は表に出さず、あくまで和やかで凛々しい表情を浮かべながら椎奈が何を言おうとしたのか訊ねる。

すると、椎奈は。

「ウィザウトさん、今回の魔法の件ですが、鷹狩悠久さんからの書で確認したんですね?」

「ええ、まあ……毎回『どこからともなく』書物が送られて来ますからね、魔法が発動する時期になると」

ウィザウトは確認事項から話を進めていくことに多少なりとも鬱陶しさを感じたが、またそれも彼女のポリシーと言うか、性格というものだろうと一言を飲むことにした。

「私のところにも『どこからともなく』送られて来た訳ですが、そんなことはどうでもいいのです。それより・・・」

(どうでもいいのかよ・・・)

「それより、今回お話ししたかったのは、今回の魔法争奪戦、今回の通称『ハロウィン』には我が綾城家は参戦致しません」

「・・・そうですか」

ウィザウトは純粹に驚いた。先方の前と言うことで露骨には驚けないが、しかしながら驚きは隠せない。

椎奈は気づいているのかいないのか分からないが、膝に掛かったエプロンの上で交差していた手を解き、エプロンを外し始めた。

(気づいていたのかよ)

「あつ、エプロン着けたままだったの!？」

本気で驚いた風な表情でウィザウトを見ると、頬を赤らめながらそっぽを向いてさっさとエプロンを外した。

ウィザウトが思うに、本当に気づいていなくて、少々バス・・・身体がきついなと思ったので無意識に外し始めたら、あら不思議エプロンが掛かっていたということなのだろうと推測した。

「・・・で、綾城家は参戦しないと。では、どうして我がイギリス

の味方に？」

「いいじゃないですか、イギリスさんの目的って。だから私もはその『綺麗な』夢を魔法によって唱えて頂きたいなあと思っただけですよ。・・・それでも、理解はしても納得できないでしょうから言いますと、我が綾城家は『鷹狩悠久』について追っているのです」

ウイザウトは理解した。この交渉がどうして成り立つのかを。

「そこで、ウイザウトさんもといイギリス側には魔法を唱えて頂く。・・・そしてそこで現れるであろう鷹狩悠久を我々が捕縛すればそれで私もは万事OKなのです。正直魔法を今更どうこうしようなんて綾城家は思っていないですし、それに私的に利用する輩より明確な目的があるイギリスさんに荷担した方が世界的にも平和です。そこで・・・」

そこで、綾城椎奈は言葉を切った。そしてウイザウトは見つめ直すと尚一層、『綺麗な』笑顔でウイザウトに交渉を進める。

「我々綾城はウイザウトさんを全面的に支援致します。そして、イギリス側には鷹狩悠久についてのデータと、『マイア・ネイガウス』についての情報を詮索して頂きたいのです。どうですか？」

にこりと笑顔で、首を傾げながら締めくくる椎奈に対し、ウイザウトの心情は穏やかではなかった。

マイア・ネイガウス・・・。

ウイザウトは動揺を最小限に抑えようと試みたが、失敗に終わった。それは同時に、椎奈に『マイア・ネイガウス』について何かしらの禍根があることを知らしめる結果となってしまった。それについては今更どうしようもないので、ウイザウトは交渉について、

「分かりました」と小さく答えると椎奈の表情を見た。

椎奈は「どうかしんですか？」と言わんばかりの、“何も見えない振り”の笑顔で優しくウィザウトに微笑んだ。

しかし、ウィザウトにはそれが疑心を浮かべる表情よりも恐ろしく映った。

A 高校 屋上

「さて、計画についてはある程度として、お前『俺に荷担する』とか言ってたけど、実際魔術師とどうやって戦うつもりだ？ まさかとは思うが“説教で何とかする”なんてこと考えてねえよな？」

貴之はフェンスにもたれかかったまま、訝しげな表情を浮かべ、屋内に入るためのドア、そのドアの段差に座っているルリカにそう言った。

ルリカは両膝の上に肘をのせ、頬杖をつきながら貴之の問いに答えた。

「無論、貴之君の家でたくさん勉強するつもりだぞ？ 昨日行った時にかなり古くさい書物のおいがした。あの〜、本の独特のおいだな。どうせ貴之君のことだ私一人ぐらい余裕で教え込めるだろう。・・・と、そのつもりなのだが？」

「無論、お前を家に泊めるつもりはないぞ？」

「そんなことは、分かっていたいなかった。・・・マジか。げきやば〜。ぎぞこわ〜」

「お前そんな口調を使うキャラじゃねえだろ？」

ルリカは頼杖を崩さずに、表情を全く変えずに、若い世代がよく使う、貴之にとっては殺気立たせるだけの腐った日本語を用いてリアクションをとった。

貴之は流行などに疎く、そういった言葉を聞いただけでアレルギー反応が起こり出す。

ルリカは口調をいつものものに戻し、貴之を説得する作業に入る。

「貴之君、君がやり出すと言ったんだらう？ だったら、責任を持ちたまえよ、私の分も」

「お前の分は俺の責任じゃねえだろうが。自己負担して自己破産しやがれ」

「ひどいな、貴之君。・・・仕方ないか、ここは女の魅力で」

「お前に魅力はない」

「聞こえていたのか？」

全く話が進展する気配を見せない、女子高校生の宿泊先。

ルリカは諦めず、まだまだ健闘を見せる。

「いやいや、貴之君よく考えて見たまえ。若い女の血肉が目の前を彷徨くのだぞ？ それも家の中で、二人つきりで。しかも、それを提案しているのが弱い私なのだぞ？ いくらでも押し切れるのではないか？ 押し切ってみろ、貴之憶良！ お前ならやれる！」

「血肉言つな、普通の男だつて気が削がれるわ。次、お前はか弱いところか、ど強いだ。あと、最後の方なんで俺を応援してんだよ、普通女の子なら手を出さないでね、だろうが」

「何！？ 血肉ではダメだと言つのか？ ……うむ、いいワードは…これにすつか。よし、リメイクだ。…貴之君よく考えて見たまえ。若い女の多細胞が待ちわびているぞ？」

「気持ち悪いわ。お前はアオミドロか？」

「えっ、貴之君アオミドロって多細胞生物だっけ？」

「そうだろ…？」

そうである。アオミドロ…光合成を行う、多細胞生物である。しかしながら、動物ではない。

貴之もルリカも「どっちだっけ？」などと悩みこむが、それもそこまで、ルリカは、はつとなったように顔を上げると今一度、貴之にアタックする。

「分かった貴之君、では“一日だけ”ということはどうだろうか？

『今日一日お願ひします』と言つたら、貴之君は惜しみなく『こちらこそお願ひ致します』と言つ。そして、実行される……どうだろう？」

「…まあ、遅かれ早かれ魔術には関わって貰うみたいだしな。いいだろう、その条件飲んでやる。しかし、なぜお前が『お願ひします』で俺が『お願ひ致します』なんだ？ なんだか俺が『お願ひしてるみたいじゃねえか？」

「……気がつきやがって。……おお、貴之君よく気づいたな！
まあ、私からのちよっとした言葉遊びだよ」

最初の「気づきやがって」はいかにも、吐き捨てるように小声で
言ったが後の方はいつものルリカらしく明るく言った。

貴之はばっちり前半の方も気がついていたが、追求はしないこと
にした。

「じゃあ、行くか」

「そつだな、貴之君ちへGO〜!!」

「阿保か……」

貴之とルリカは見張られていたことを気づかずに、その場を後に
した。

ルリカに対し、ただならぬ嫉妬を浮かべているとも知らずに。

貴之邸

貴之とルリカは地下五階まで下りていた。

地下一階は予備食料貯蔵室が三カ所、二階は監禁室が多数、三階
は拷問室、四階、そしてここ五階は吹き抜けの訓練場になっていた。
ルリカは訓練場の隅の椅子に座って、貴之が膨大に積み上げた書

物をとんでもない速度で読み進めていた。

「貴之君、古学地理学からの応用第三十五ページの内容が分からん。意味が分かるように解説してくれ」

ルリカは書物を読むことを止めずに貴之に問いかける。

貴之はそれに答えるように次々と魔術関連の詳細を改訳しながらわかりやすく話していく。

「・・・そういうことか。なら、この光合成を模倣した魔力吸収の陣に細工できるのではないか？ 材料は植物3・52?、水8・225?、陣の南西に酉の何か、これで2・35倍の吸収効率を得られるのでは？ 酉は朱雀の代替わりでな」

「ああ、それは俺も考えたことがあるが、後で運んでくる本に書いてある、術式応用と地下水脈を利用した吸収の陣の方が更に吸収効率を高められる。そっちの方を俺は利用してるしな。・・・今は使う機会がねえけど」

「そうか。では、・・・この日と火の因果とは何だ？」

「太陽暦を利用した暦の魔術だよ。暦に応じて火の性質を持つ、よりよい魔術を唱えられるようにとの研究した論文だよ」

「・・・ちよつと貴之君そごいいて」

「うん？ 何だあ？」

貴之はルリカの質問攻めを受けていたところで意味の分からない指示を受けて少々苛立つが、その表情をルリカは見ることに無く、ず

つと書物に目を通したまま、貴之が元いた位置に向かって右手を突き出す。

そして指を一本ずつ折っていく。

「3・・・2・・・1」

「その魔術は・・・」

「ゼロ」

ルリカがそう言った瞬間に、ルリカの折った手から多量の火炎があふれ出す。それは学校の体育館ほど在る訓練場の四分の一を埋め尽くす程の火炎だった。

貴之はその圧倒的な破壊を持つ火炎を見て一瞬見とれていたが、すぐに『黒鬼』をだして、鎮火の作業に移った。

貴之は黒鬼で火炎を異次元へのルートへ飛ばしながら、ルリカに注意を促す。

「お前、魔術を使うんだつたら先に言え！ 家が消し炭になるわ！」

「いや大丈夫だろ？ さっき、『魔解の術』を発動させた時にこの部屋が過敏に反応したぞ？ つまりこの部屋は魔術用のコーティング仕様が施されているのではないのか？」

「・・・正解だよ、“完璧の魔女”」

そう、この部屋には魔術を遮断する術式の陣が張られている。器物に接した魔術は全て遮断されることになっている。

（それにしても、早すぎないか？ 魔術ってこんなに簡単に発動で

きたか？)

貴之は心の中でそう呟いてみた。
彼女珠飾ルリカはたった、三時間で魔術を行使できるようになったのである。

魔術を行使するにはまず、自分の魔力を生成し、それを術式に基づいて様々な性質や形に変えていく。変えたものをそのまま放出する場合と自然界、人間界に存在するエネルギーを利用したりして更に強力な魔術へと昇華していく場合がある。

初めて魔術を使えるようになるまではだいたい三ヶ月ほどの修練期間を要する。魔術生成に一ヶ月、コントロールに一ヶ月半、そして放出に半月といった割り振りだ。

しかし、この“完璧の魔女”は三時間という出鱈目な時間でクリアーしてしまった。それは偉業と言っより異業と呼ばれるべき変化で、貴之すら恐れ、畏れる程だった。

ルリカはある本の最後の文節を読み終わると、突然立ち上がり、貴之の方へと駆け寄った。

貴之はその行動にトイレにでも行くのかと思ったが、どうやらそうではないらしい。

「貴之君、もう本はいい。それより実践しよう」

「はあ？ お前もういって・・・」

「もうよいのだ。理解は終わった。それより、実践を積んでさっそくにでも貴之君の力になりたいのだ。どうか百戦頼む」

「どうか百戦って・・・どうか一戦みたいな言い方するな。なんだか数が少ない感じがしてくるだろうが。まあ、いい。実践なら俺も丁度やりたかったところだしな、受けてやる」

「そうこなくては、流石は貴之君だ」

ルリカは薄く笑うと、貴之に勝負の目を向けて戦意をぶつける。
貴之はその視線を受け止めると、ふっと薄く笑い返すと。

「ちょっと待った。トイレ行ってくる」

「・・・貴之君、私は初めて貴之君に失望したぞ。・・・あの場面は『かかってこいよ、このメスクジャクが！』だろうが！ 何でその台詞を言えんのだ！」

「生理現象馬鹿にすんじゃねえぞ！ このメスシラサギ！」

「それは・・・あまりおもしろくないぞお！」

貴之はポケ返しに失敗したことで、“確認”作業のためにさつと背中をルリカに見せると持っていた書物を丁寧に奥のテーブルに置き上層へ行く階段へ向かった。

貴之邸三階

貴之が確認したかったのは、女のことである。

昨日拷問し、吐かせた女である。

貴之は女がいることを朝確認し、学校へ向かったのだが、拘束されているはずの女はいなかった。

貴之は回りを見渡すが、どこにもいない。それどころか、“拘束

器具に外された跡が無かった”。

これ以上ルリカを待たせるとろくなことにならない気がしたので、
ここの調査はルリカが帰った後で行おうと決めたのだった。

ルリカとの約束を完全に忘れて。

五階

「遅いぞ貴之君。こんなところに一人にされて、まさかのまさか貴
之憶良による放置プレーかと思ったぞ。まったく、か弱い女の子を
一人にするとは、躰が行き届いてないな貴之君」

「放置してみるか？」

「ふっ、遠慮しておこう。私は泣いてしまいそうだ。その後、お決
まりのように貴之君の甘い言葉に籠絡されて私の心はフライ・アウ
エイだ」

「黒鬼でバミューダ海溝に飛ばすぞ？」

貴之はそろそろこのやり取りを止めようと、「マジな声」でルリ
カを威嚇する。

ルリカはそれがお開きの吉兆だということを十二分に理解してい
るので、そこで切り返すことは止め戦闘の準備に取りかかる。

「さあて、貴之君。遊ぼうか」

「だな」

「三、二、一でスタートでよいか、貴之君？」

「OKだ」

ルリカは腕まくりをし、貴之はポケットに手を突っ込んだまま、毅然とした態度で開始するのを待っていた。

「では、カウントに入る。・・・三・・・二！」

ルリカは「二」で高速移動する。それは人間の動きを超越したかの如く、忍者の如く、貴之に急速接近を試みるが・・・。

「読めてんだよ」

貴之も動いていた。黒鬼を既に発動しており、奇襲で強襲して突っ込んできたルリカを返り討ちにする。

黒鬼で殴った。

黒鬼はあくまで貴之が形としてだいたい留めているに過ぎないが、黒鬼そのものが全て魔力で出来ているので固形のものと同等的力で殴ることもできる。

形として不十分な『黒』に殴られたルリカは後方遙かへ吹っ飛び、轟音とともに壁に叩きつけられる。魔術コーティングだけならず、純粹な防御性能も誇っているのだから、ちよつとやそつとでは壊れない。それはこの部屋のどこであろうと同じである。

ルリカはむくりと立ち上がるが、その足取りはとても重い。

苦笑いを浮かべながら、背後に黒鬼を控えて毅然として立っている貴之に皮肉を交えながら、憎まれ口を叩く。

「・・・ゲホ、貴之君ひどいなあ。いきなり女の子殴るなんて・・・ゲホッ、ゲホ、ホント容赦がないなあ、もうちよつと手加減した

らどつだ？ 尚一層男として魅力が上がるぞ？」

「『一』で不意打ちしてくる奴に手加減なんて高尚な真似、俺にはできねえよ」

「まあ、これからだな、私の対貴之君との初マッチは……。夜は長いぞ貴之君。今日は貴之君を寝かせないからそのつもりでいるよ。私は全力で貴之君を飽きさせないからな」

「ご苦労なことで。ただ、俺は寝るぜ？ 眠くなったら寝る。ここでお前の相手をしながらでも寝てやるさ。お前こそ途中で諦めるなよっ。」

「愚答だな、そして愚問だな！ 貴之君を寝かせんと言ったであろう。私の足下に跪かせてやるわ！」

こうして、二人きりの舞踏会は幕を開けた。

魔法は動き出す。

『悩み』 『恨み』 『欲望』 『願望』 『生涯』 『忠誠』 『悪意』 『善意』 『怒り』 『嫉妬』 『幸福』
『不幸』 『約束』 『名声』 『蛇足』 『杞憂』 『賛美』 『怠惰』 『色欲』

そして『愛』 『憎しみ』 を全て巻き込んで、ただ一人の魔法使いを決めるために、

魔法は、『夢を叶える』ために、魔法使いを誘う。

決められた『ストーリー』の中で・・・。

0 - (10) 交渉(後書き)

お読み頂き有難う御座います。ついに第一章に入ります！
と
ここで第十話でした！ 今後ともよろしくお願ひします。

始まり

綾城家

ウィザウトと椎奈は初回の交渉の席で利用した綾城家十階、客間にて今回の魔法について話合っていた。

ウィザウトと椎奈が座っている、黒のソファアが美しい光沢を光らせていた。

「ついにですね、椎奈さ・・・椎奈ちゃん」

「ええ、私のところにも『いつの間にか』ありました・・・例の本が枕元に。内容は既にお読みになられましたか？」

椎奈はウィザウト完結に言った。

「ええ、読みました。今回もやはりと言うか、結局と言うか、鷹狩悠久からでしたね。・・・誰にも分かっていない、『いつの間にか』置かれているという現象。私も警戒を最大にして待つてたんですがね、失礼ながら窓にもドアにも壁にも天井にも魔術が通たら分かるように細工していたんですが、今回も勝手にすり抜けられました」

「まあ、それは殆ど仕方が無いと言ってもいいのかも知れませんが、鷹狩悠久・・・私もも全力で探していますが、所在すら掴めていません。しかし、発行される本だけはきちんと印刷場に届けられているということが続いています。彼は、私達の想像を遙かに超えた魔術師なのかもしれませんし、長考はどつばに嵌まっていくだけですよ」

「そうかも知れませんが。では、切り替えて魔法の『行使方法』の特定に急ぎましょう」

ウィザウトは本の1ページを書き写した紙を前のテーブルの上に置いた。

その紙にはこう書かれてあった。

『赤き道、汝にその道を導き、
黒き線、汝にその道を示す。

汝、日が落ちて、日が昇り、

汝、日が昇り、日が落ちて、

汝、雷鳴を轟かす。

魔、それに応じ、

魔、それに答え、

魔、全てを教え、

魔、全てを賜う。』

「……これだけでは意味がまいちですね。五行目の『汝、雷鳴を轟かす』はたぶん雷系の魔術のことでしょう。雷系の魔法では特定されすぎてしまいますし」

「では、前半が場所ですね。赤き道……前半の後半、この部分に『日』というワードが多く出てきますし、朝日や夕日のことですかね。黒き線は日食でしょうか？日本で『ハロウィン』までに皆既日食はありますか？」

「さあ、ちょっと私には……今調べて頂きます」

椎奈は黒いソファーから立ち上がると、狭い個室の隅に掛けられている外線電話をとって、執事である家系の豊穰家に連絡を入れた。

内線電話とは異なり、外線電話を使う。

豊穰家はここ綾城家に着きつきりで執務をこなしている。しかし、家そのものは、綾城家の敷地内ではあるが別家となっており、綾城家から500メートル程行ったところにある。

綾城家の内線を使って執事の休憩室に電話を掛けてもよいのだが、調べ物となると実家の方に連絡を入れた方が手間が省け、最終的にはそっちの方が早い。

椎奈が電話を掛けて、もの十数秒で受話器は上げられた。電話に出たのは豊穰 人手ひとでだった。彼は豊穰家の二男坊で、運動系の分野に特化した人物だが、それでも日本有名大学で東京に在るW大学を卒業している。

『椎奈様ですか？ ご用でございましょうか』

「ええ、椎奈です。おはようございます、人手さん。大変申し訳ないのですが、十月三十一日までに皆既日食が起らないか調べて頂けますか？」

『・・・椎奈様何度も申し上げていますよう、私どもに敬語を使う必用はございませんし、何でも気軽にお申し付け下さいませ。私どもはあなた様のご希望とあらばすぐにでも馳せ参じます故、何卒、我々をこき使って頂けますようお願い申し上げます』

執事として百点満点の答えを椎奈に言う、二十二歳、豊穰人手。若き彼は、自分の趣味や夢を抱かず、ただただ主従関係の相手へと敬意を払い、執務を全うする。

椎奈と人手はもう少し主従の関係について話していたようだった。

「・・・では、よろしく願います。人手さん」

『・・・分かりました。急ぎの用ではないかと思われまますので分かり次第早急にお電話させて頂きます』

そこで、通話を切った椎奈はウィザウトの正面のソファへと座る。

ウィザウトは内容こそ聞こえなかったが、椎奈が豊穡家の人間から「自分達に敬意を払うことないよう」に説得されていたことが窺える。それに椎奈が反論していたこともしっかりと見ている。

ウィザウトはこの魔の頂きに立つ彼女の真意を窺い、考察しながら通話を眺めていた。

「これ以上何か分かりますか？」

椎奈は可愛らしく小顔を傾げながらウィザウトに問う。それにはまだ幼さが十分に残っているようにウィザウトには映った。

「分かりませんね。・・・まだまだ、これからです。イギリスに『天才』がいらつしゃいますのでその御方に尋ねるのも手かも知れませんが」

「天才？ ウィザウト様がそこまで推す御方がイギリスに？ ぜひともお会いしたいものですね。名前は何とおっしゃるのですか？ 研究者の方がしら？」

椎奈は考える素振りをしながら、興味本位でウィザウトに訊ねる。ウィザウトはその「研究者」や「専門家」といった類では無いことを先に椎奈に告げると、こっぴど切り出した。

「その御方は私の大切な御方です。やんちゃで性急で泣き虫でひ弱

で明るくて元気で、それでも数々の修羅場と地獄を体験した尊敬できる御方です」

「ウイザウト様の思い人かしら？」

「いえいえ、確かに『彼女』ですが、流石に恋人にはできませんよ」

「どうしてですか？ ウイザウト様のような格好良くて、素敵な方なら女性陣は大概OKだと私は思っていますか？」

「お褒めに預かり光栄ですが、なんたって彼女は……」

そこでウイザウトは一拍開ける。そして、頬を綻ばせながら『その御方』の年齢を言う。

「十二歳ですから」

始まり（後書き）

お読み頂き有難うございます。さて、次話から本格的にストーリーを進めて行くことと思っております。よろしければ最後までお付き合いください。では。

1 - (1) ストーリー

魔法使い八名全員動いてくれるといいけどねえ。

俺の『ストーリー』では、魔法使いの動きまでは制限できないしねえ。

少しでも話を盛り上げるためには、数が多い方がいいからねえ。

中心が・・・王水、妃彩乃、ルール・ウイザウト、あとは、九州魔術連盟か。

おおっと、忘れてた。

貴之君の『弟』もなんか関わっちゃうみたいだねえ。

偶然にはできすぎているような気が否めないねえ。

なんかしたのかな？ 『フィクション』でも使ったか？

まあ、いいか。

『ストーリー』は彼女が魔法使いになって、この編は終幕の予定なんだが・・・。

魔法は使われない・・・はずだけど・・・。

『フィクション』が影響しなければ問題ないか。

彼女が魔法使いになることがこの戦争で果たせればいい訳だし。

頑張つてね、珠飾ルリカちゃん・・・元、王女様。

『さて、秋深まり魔法の期間がやって参りました。私のこのお手紙もさぞ気分が高揚した記述となっているのではないでしょうか？

紅葉だけに。皆様に配布したその書物。私の最新作で御座いま

す。ストーリーを読み進め、その後魔法に関して解いて頂けると幸いです。これでも論文、物語と数々の本を出版してきた作家であります。その最新作を皆様にお届けできることは私も光栄に思いますし、皆様方も光栄に思っております。先に言つと物語読んでくれない気も致しますが、一応言つておきます。物語は微塵も魔法に関係しておりません。・・・純粹に私の最新作です。比喻は御座いません。

閑話休題。

今回の魔法争奪戦の総称は先日お届けしたお手紙より、『ハロウィン』と名付けさせて頂きました。舞台は日本。「本場じゃないのかよ!」と仰る方も居るかも知れませんがそこは皆様の寛大な心持ちでどうか寛容して頂けるとこちらとも嬉しゅうございます。

では、皆様、存分に今回の『ハロウィン』を楽しんで下さいませ。

九月二十九日

From 鷹狩 悠久

九月三十日

貴之邸

「貴之君・・・ドSにも程があるぞ・・・ゲホッ・・・ハアハア・・・女の子をここまで痛めつけてそんなに楽しいか? 楽しいんだろうなあ!? うぎゃ・・・」

ルリカは黒鬼にデコピンをされて、床に突っ伏した。

貴之は訓練場のだいたい中央に位置するところに陣取っており、ルリカの攻撃を受けながら椅子を運び、週間少年何たらを読んでいた。

ルリカはしばらく床の体温と自分の体温の差を感じてクールダウンして、ゆつくりと肘を曲げ立ち上がる素振りを見せる。

「貴之君・・・私は・・・やはり魔術の才能がないのか？」

「いやいや、結構見込みあると思うぜ？ 一日で百三十系統の魔術を使いこなす馬鹿は今までで初めて見た。というか、魔業界で一人もいなかったんじゃないか？」

「そこまで褒めるのならちよつとは過保護というか、熱心に教鞭を執ってもいいんじゃないかな？」

「一日で全部終わらそうとするな、話が盛り上がりらん。今読んでいるこのNA TOだってしつかり修行した後で手裏剣みてーな螺旋回転する技を身につけてんだよ。焦るな・・・そうしておくぜ、お前には才能があるんだから」

貴之は少年なんたらを読みながらルリカに素っ気なく言う。「ルリカには才能がある」と。しかしながらそう言っている貴之も半端な魔術師ではない。黒鬼を維持するには膨大と言ってもいい魔力を消費する。自然界などからの『干渉エネルギー』を利用した場合や封印術の場合は別だが、自分の魔力だけで黒鬼を長時間維持するなどは大抵の魔術師では考えることすらできない。

それを本を読みながらリラックスしながら行使する貴之もまた「異端」の魔術師であることを明確に表していた。

「才能があるう？・・・馬鹿も休み休みに言え、貴之君！ たか

が貴之君如き、ひ弱な若輩者で鬱気味の社会から餞別されたもやしつ子を私が倒せないことこそが才能・・・いたいよお~~~~~!」

黒鬼によって後方の壁にまで吹っ飛ばされるルリカ。

しかし、今のは完全に悪意を持って貴之に言ったので、この措置を咎めることなど誰にもできないはずだ。

ルリカは壁に叩きつけられると、最初に叩きつけられた時より“早く”身体を起こす。それは、ルリカが体内の魔力をコントロールし始めたことを意味する。

貴之はルリカが徐々にコントロールしていくに連れて黒鬼の力をゆっくり上げていったので、ルリカにとって、最適な魔力のぶつかり合いが生じていることになるので訓練には常にもってこいの対戦相手だった。それも相まって彼女は今や最初に遭遇した魔術師以上のスキルを手に入れている。

「貴之君、嫌い嫌いも好きの内と言言葉が在るが、流石にこれは厳し過ぎないか？ 私でも少々限界を感じて来たぞ」

「大丈夫、俺はお前のことが・・・」

「大好き？」

「大嫌いだから問題は無いぞ？」

ルリカは分かっているながらも今持てる力で大仰に落胆してみる。

「やれやれ、貴之君も照れ屋さんだぜ」と言っつてまた黒鬼にデコピンされて床に突っ伏す。

「・・・・・・・・」

「……………おい」

「……………」

「起きろ」

「……………」

ルリカはどうも今の一発でKOになってしまったようだった。

貴之はため息を一つつくど、黒鬼を消し去りルリカの元へとゆづり歩いて向かった。近くまでよって足でルリカの背中を軽く踏んづけてみてもルリカはピクリとも動かない。それどころか、小さな寝息まで聞こえてくる。貴之は自分が来ていた制服の上着をポイと投げ捨てるようにルリカに掛けると、上層へと行く階段へ向かった。彼は今から拷問部屋を調べに行く。

女魔術師がどうやって逃げたのかを調べるために。

(しかし、足ぶつた切つたのにどうやって逃げたんだ？ 誰かがここに入り込んで空間移動系の魔術でも使ったか？)

しかし、その可能性を自分で否定した。

空間移動系の魔術はかなり高レベルの魔術で、一般の魔術師如きが使える代物ではないからだ。

それを十分に分かっている貴之は、その他の考えへと張り巡らせていく。

「貴之君……今度ぶつ潰す！」

「……………訳の分からん寝言言いやがって」

いきなり自分の名前を呼ばれたので吃驚してしまっただが、何のことではない、壁際で寝ているルリカが寝言を言っただけだった。

「あつ、学校・・・今日は休日か。俺もおかしくなっちゃったかなあ」

独り言を呟きながら目の前の階段を上っていった。

綾城家

「ウィツ、ザウト~~~~~~~~!!」

「なんで、いるんだよおおおおおお!!」

綾城家の廊下で一人の少女が若く端正な顔立ちを持つ青年に向かってダツシュしていた。そのダツシュ速度は彼の100メートル世界記録ホルダー劣らないとか・・・そんなことはないけど。

「会いたかった、ウィザウト~~~~~~~~!! 死ねねええええええええええええええええええええ!!」

「うあ! 危ねえだろがああああ!? セリーナアアアア! . . . 様」

セリーナはウィザウトに抱きつくと思せかけて、左手に持っていた小太刀を突き刺そうとした。もちろん刃は抜かれており、「冗談で「死ね」が本当の死を予感させざるおえないような再開、もとい、

殺人未遂だった。

セリーナは躲されたのち、もう一回反転してウィザウトに刺し係ろうとしたが、呆気なくウィザウトに左手を掴まれ小太刀を落とししてしまう。

ウィザウトは今回だけは許しがたかったようで、静かな殺気を発していた。

「セリーナ様！ どうしてこんな

パン！

乾いた音が綾城家邸内に木霊する。

それはセリーナが右手に持っていた拳銃であり、ウィザウトの顔面目掛けた放ったものだった。

ウィザウトは銃口が向けられた瞬間に銃口を左手で「押し」、銃口の向きを虚空へと変更させ、そのままセリーナの右手を掴んで捻り、銃を落とさせる。

セリーナの両手首をウィザウトは掴んでいるので、セリーナにはもう手を使った攻撃はできない。

「・・・セリーナ様、つか、セリーナてめえやっていいことと悪いことがあるだろうが。お前これエリザベス様に言い付けるとかそう言うレベル超えてるぞ。お前この後どうなるか分かってんだろくな」

ウィザウトは本気の怒りを齡十二歳のこの少女に向けながら、説教を言い、落とした小太刀を拳銃の種類を見た。

エンフィールド・リボルバー。

第二次世界大戦中にイギリスが生産した中折れ式回転リボルバー。

もう一つは種類が分からないが、傍目から見て、合金を使っているのではないかとウィザウトは推測した。

ウィザウトが銃剣を眺めている様を下からまじまじと見つめていたセリーナは、手を解放できないかと手を左右に振ってみるが、しっかりと掴まれていて動くことはない。

セリーナはそれだけでは飽き足らず、ウィザウトに声をかけた。

「よお！ 我がパラディン。来たぞ」

その瞬間セリーナの左手は解放された。

しかし、「パチン」と一つ音が木霊すると、セリーナは自分の頬が熱く痛くなっていることに気がついた。それは紛れもなく「ぶたれた」ことだった。

一瞬“何をされたのか分からなかった”セリーナは、痛みを感じる左頬に解放された左手を重ねた。

やっぱり熱かった。

やっぱり痛かった。

やっぱりおかしかった。

やっぱり可笑しかった。

やっぱり・・・泣いてしまっていた。

「えっ？ 何をしたのウィザウト？」

「・・・お前に痛みを教えてやったんだよ。お前の親が何をしていたのかは知らんが、俺はお前に幸せになって欲しいからな」

「幸せになるにはこんなに痛い思いしなくちゃいけないの？・・・ウィザウト、言っていることがむちゃくちゃだよ？ さっきの悪のりそんなに怒ってるの？」

ウィザウトはそのことについては怒っていなかった。先程は心底腹立たしかったが、今では違う。

「なんでお前がここに来たんだよ!? お前はイギリスで茶でも飲んでりゃよかつたんだよ! お前がここになんではいるんだよ? ああん!? 言ってみろ!」

「なんでって・・・そりゃ・・・ウイザウトに・・・会いたかった・・・し、力になりたかった・・・」

パチン!

もう一度同じところに痛みが走った。

セリーナの頬はもう真っ赤になっている。

ウイザウトは軽蔑の眼差しを向けたまま、セリーナに怒鳴る。

「お前如きが、力になる訳ないだろうが!? お前がここに来て心底むかつくんだよ、俺はお前にイギリスに残れと言っただろうが!? お前みたいな戦場を知らん糞餓鬼が真っ先に死んでいくんだよ。お前はここに死にに死にに来たのか!？」

「・・・・・・・・」

セリーナはそれ以上何も言わず、ただただ黙って俯いた。

「あのう、申し訳ないんですがそろそろお時間が・・・」

そう言ったのは豊穰 射鹿いるかだった。綾城家の執事の一人。

彼女はウイザウトにそう呟くと、ウイザウトもさっとセリーナの手を放し、踵を返して射鹿に付いていった。

セリーナはその背中を見ることもなく、ただただ真っ赤に染まった赤のカーペットを見つめて泣いていた。

「折角遠くからご足労頂いたのに、客間に監禁致すという処置は如何なものかと思われませんが？」

「いいんです。もし、綾城様のご迷惑となられるのならば、自分は早急にセリーナ様をイギリス本土の方へお送りしてから、もう一度訪問し直しますが？」

「とんでもありません。我が綾城にそのような些事すら拒否するような卑しい理念を持ち合わせておる者はありませんよ。セリーナ様の監禁を些事と申し上げたことには大変失礼いたしますが、私どもは何の損害もありませんのでご自由に言って頂きたい」

現在ウイザウトは綾城家のナンバー2、綾城 真城ましろとエレベーターの中でセリーナの監禁について話していた。

ここ綾城家にはエレベーターなるものが存在する。綾城家の大きく高すぎる高層邸宅にはこう言った物がないと不便極まりない。

十階の来客用の部屋まで豊穰射鹿に案内され、そこで待たれていた綾城真城と合流し、現在二階に在る大規模な会議室に向かった。

ウイザウトは会議において、最重要人物となってくる。

その点綾城家の人間は『鷹狩悠久の捕縛』を目的としているため、魔法に関して重要人物なる者はいない。

この『交渉』が行われたのは魔法を叶えたいイギリス側と鷹狩悠久を捕らえたい綾城側の目的が一致することが大きな要因となっている。つまり、魔法が発動されないと分かっってしまうえばイギリス側にメリットは無いのでウイザウトは引き上げる。そうすると、綾城側も「魔法が発動しないのならばイギリスと手を組む必要がなくなる」ということを意味していて、最悪の場合、ウイザウトが窮地の

危機に陥ってもその『メリット』が無くなれば綾城は見殺しにしかねない。

そんな孤軍奮闘のど真ん中にいるウイザウトにとってこの会議は交渉において最も大切な要因の一つであった。

真城と与太話をしていたところ、いつの間にかエレベーターは二階に到着していた。

エレベーターのドアが開くと見知らぬ女子と言っている体格と風貌の女性が立っていた。胸にはウサギのマスコットの何かが留められていた。

(今日は日本でも休日で学校は休みだよな・・・)

ウイザウトはそう思った。

理由は至って単純でその女の子が制服と呼ばれる衣服を身に纏っていたからである。黒と白をベースとした制服はイギリス慣れしているウイザウトには物珍しかった。

彼女に何とも明るく元気のよさそうな印象を受けた。

ウイザウトはエレベーターを出て歩き出すもその女の子のことが気になっていった。しかし、ウイザウトが振り返った時には彼女はエレベーターに乗り込み、ドアが閉まる場所だった。

(彼女どこかで見たような・・・)

「どうしましたか、ウイザウト殿？・・・あれは我が綾城のナンバー2ですよ。私がナンバー2と呼ばれてはいますが実質彼女の方が上ではないかと思っていますし」

「そんなに強いんですか、あの子？」

「ええ、まあ。『妃』の血を引いている子ですからね。あそこの血

統は誰であろうと病に罹らず、傷を一日で快癒し、元気いっぱいですからね。そんな彼女がいてくれて少々異端が多い、我が一族にも明るい風が舞い込みますのでラッキーマーカーってところですよ」

彼、真城から「ラッキーマーカー」なる創作の語が出るとは思わなかった。

彼女の風貌雰囲気、そして真城の評価。それらを合わせると、彼女が『セリーナ』に通ずるものがあるのではないかとウィザウトは思った。

会議室

「では、今回の魔法争奪戦総称『ハロウィン』についての会議を始めたいと思います」

椎奈が「部屋」と言うより「場」と言った方がよいような大会場で開会の言葉を述べた。

そして、第二声は会場をどよめかすに相当するものだった。

「我が家の目的は十分に分かっているとしますので、内容などを説明していききたいのですが、初めに今回魔法争奪戦において我が家がバックアップすることになったルール・ウィザウト殿について少し。彼には今回魔法を唱えて頂くわけですが、この私綾城椎奈が彼を全面的に、付きつきりでサポートする所存です」

「ちょっと待って下さい。綾城家の頭が動くということはどういうことか分かったうえでのご決断ですよね？」

「もちろんそうですね？」

綾城の頂点が全面サポートをする・・・これは「綾城椎奈だから」問題視されることだった。彼女が動くということは必然的に『魔業界の頂きに立つ魔術師』が動くことを意味する。それ即ち、「魔業界の人間全てに注目される」ことを表す。

綾城の行動は暗躍することを許されなくなることの意味する。

本末転倒ではないか？ そんな声が多く上がった。

注目されるようなことをしては、捕縛対象の鷹狩悠久にまで所為をいられてしまうことになる。そうなつては捕縛はより困難になる。椎奈はそれらを全て理解したうえで、そう言っているのだ。

それを『理解した振りをしている』人物がこう言った。

「皆の者、我が綾城家の頂点がそう仰つておられるのだぞ？ お考えがあるに決まっているだろう？ その意も汲めんとは綾城の名においてそんなに椎奈様が信じられんか！？」

そう言ったのは綾城のナンバー2、綾城真城だった。

椎奈は、叔父である真城を見て、「有難う御座います」と口だけ動かしてそう御礼を言った。真城もそれに気づき小さく椎奈に微笑む。それは、叔父として、姪に向ける親族らしい微笑みだったが、すぐに表情を引き締め、会場に集まった綾城家の総員に続けて言う。

「椎奈様の留守を見計らつて、万が一、綾城家に攻めてこようとす
る愚か者が出てきたとしてもナンバー2の彼女とこの私がいる。そ
れでも不安か？ それとも椎奈様が外に出ている内に狼藉に会うと
思つか？」

会場のざわめきは真城の一声によって全て沈静化された。

「椎奈様、では続きを・・・」

「有難う御座います、真城叔父様。では、改めて会議の方を進めていきます。まず」

1・(1) ストーリー(後書き)

お読み頂き有難うございます。遂に第一章に入ることができました。長かったです。では、第一章『綾城動乱』をお楽しみ下さい。そして、お悲しみください。では！次回よろしければお会いしましょう。

綾城家

「あつ、そう言えばお姉ちゃん今日会議あるとか言ってたな。あつ、どうしよう？ お姉ちゃんを弄りに来たのに。もう口がカレーの味になってまんがな！ なのに閉店かい！ みたいな。どくしょう」

彩乃はこつそり盗んだ椎奈の部屋の鍵を使い、ひっそりと椎奈に近づき仕留める（？）予定だったが、その獲物がいないのでは狩猟にならない。

彩乃はぼふんと椎奈のベッドにダイブすると、椎奈のにおいが染みこんだ枕に顔を沈ませる。

「あゝ暇だなあ、貴之先輩との妄想にでも耽ふけるか？ 何してもらおっかな。ぐふ、ぐふふふうっふ」

枕に顔を沈ませながら厭らしい笑いを続ける彩乃。

彩乃はしばらく（20分ぐらい）妄想に耽ると壁からゴン、ゴンと音が鳴っていることに気づいた。それは、そこから鳴っているのではなく、隣接した部屋から壁を叩かれているものだということが分かった。

彩乃は不思議そうに壁に耳を当てる。

（隣って私の部屋？ ……違うな。あつち側の隣が私の部屋だから……こつち側はお姉ちゃんが男の人を連れてきた場合の特別室だ）

彩乃はしばし自分が言った言葉を反復し、整理してみると・・・。

「お姉ちゃんの彼氏!？」

という結論に至った。

彩乃はヘッドスプリングで飛び起けると、靴を履き（室内用）椎奈の部屋を飛び出した。そして、高速カットステップを決め、隣の部屋の前に緊急停止する。

「さあて、どんな彼氏かしらん　お姉ちゃんには悪いけど私が先に弄っちゃうもんねー　自分の彼氏が自分の妹に籠絡された姿を見て、どんな顔するかなお姉ちゃん？　楽しみで仕方ないぜ！　ひゃひゃひゃは　」

彩乃は純粹純悪モードへ移行すると、歪んだ悪意ある笑顔を浮かべ、椎奈の部屋の鍵に付随するキーを取り出し、がちゃがちゃと扉を開ける。

そして、ゆっくりと開く。

「さあて、どんな男かしらん　」

彩乃が鍵を開けると室内には誰もいなかった。この部屋は隣の椎奈や彩乃の個室ほど大きくないので、一瞬で見渡せる。ホテルの個室のようになったおり、入り口を少し行ったところに、バスルームとトイレの部屋おのこのが各在るだけだ。

「いない？」

そう呟いた瞬間下から何かに掻い付かれた。

突然の衝撃に少々たじろいでしまったがすぐに立て直し、下に掻

い付いている物体を見下ろした。

それは綺麗な金髪で一目見て外国人であることを理解した。そして彼女が泣いているということも理解した。足の冷たい雫が流れ落ちる。

その少女はウィザウトに監禁されていた、イギリス第三王女セリーナ・ウィンザーだったが、現時点で彩乃が知りうることは無かった。

しかし、彼女達のこの出会いを元に、彼女達は『ブラック・ラビット』と称され、魔業界でも怖れ、畏れられるまでに成長することになる。

彼女達はそのようなことを微塵も感じていなかった。

彩乃は下の掻い付いている少女を見て、「誰？」や「なんで？」と言っことを考える前にこのようなことを思っていた。

「お姉ちゃんって少女が好みだったの？」

貴之邸

貴之^{きの}憶^{おく}良^{りょう}は三階の拷問部屋に来ていた。

足を切断した時の多量の血が黒ずんで床に飛び散っているが、妙なことに彼女が逃走した時に残るであろう点になって付くはずの血が一滴も無かった。

貴之は回りをいくらか調べてみたが空間移動系の魔術を使われた痕跡は一つも残っていないかった。

貴之はこれ以上調べても埒が明かないことを悟ると、^{たまがざり}珠飾ルリ力が寝ている訓練場へ向かった。

ルリカは寝ている。

貴之は思った。

「遊んでやるう」と。

貴之は一度一階まであがり、洗濯ばさみとペットボトルに入った水を取つてくると、寝ているルリカの元へ歩き寄り、その場にしゃがみこんだ。

そしてすやすやねているルリカの耳に水を少々垂らす。

「リアル版寝耳に水・・・」

そう小声で呟くとルリカはピクン！ と一度反応したが、何か訳の分からない寝言を呟くともう一度眠ってしまった。

貴之は「水出さなくていいのか？」と思いながらも、「些事だな」と片付けて本命を登場させる。

洗濯ばさみ。

貴之は両手に洗濯ばさみを持つと、ゆっくりルリカの顔に近づけて、ほつぺたと鼻に洗濯ばさみをひつつけた。

するとルリカは呻き声を上げながら、もぞもぞと動き出す（目は閉じたまま）。

消えることのない痛みが意識の覚醒とともに広がっていき、だんだんと「自分になにかされている」と言うことを理解し始める。

しかし、『それ』が貴之の狙いだった。

ルリカは顔を振るが貴之がしつかりとはさんだので中々取ることができない。目を閉じたままなのはよほど眠いことが窺える。

しかし、ルリカも無意識とは言え痛いものを取り払おうとする。それが貴之の作戦だった。

例によってルリカは無意識下で鼻についている「何か」を手で払

う。

その瞬間。

「いったくくくい！ 痛い痛い！ うおおくく？ なんだこれは！？ まさか貴之君が・・・」

「馬鹿め」

「胸部に何かしたのか？」

貴之は瞬間的に黒鬼でぶん殴った。

ルリカは「鼻がいたいくくく！」といいながら後方へ飛んでいった。

貴之邸 一階 客間

「貴之君よ、モーニングコールにしては少々過激すぎないか？ 確かに、貴之君は私の身体に興味はないと思っていたが、それは間違いだっただようだな。まさか朝一番で胸を揉まれて起こされるとは思いもしなんだ。すまないと思う、貴之君。君を男として少々過小評価しすぎたようだった」

現在貴之とルリカは一階の客間で朝食を摂っている。

貴之が料理上手なので、朝からきっちり栄養の取れたものが並べられている。しかし、健康食と言うわけではなく、人気のメニューをアレンジして作った創作料理で、大人から子供まで楽しめる朝食だった。

そして、貴之はコーヒーを嗜んでいる。

「おい、コーヒーぶっかけるぞ」

「よしてくれ貴之君。折角貴之君が揉んでくれたのにその残響をコーヒーの暖かみで消すのはとてつもなく勿体ない。いやしかし、ぶっかけられたあと風呂に入ってもう一回揉んでもらえれば問題ないか」

貴之は近くにあつたフォークを水平に投げつけた。

刺す方がルリカに向かつて真つ直ぐ飛んでいくが、それをルリカは片手で抓むようにして受け止めると貴之に投げ返した。

貴之はルリカ程の心身スキルを持っていて無なので首を捻つて躲し、落ちそうになつたところを黒鬼でキャッチする。そして自身の手にフォークを戻した。

「・・・お前の準備が整い次第、綾城家に行くぞ」

「はあ？ 何を言っておるのだ貴之君。私はまだ魔術の戦闘経験も乏しい若輩者だぞ？ それにそんな簡単に攻め込めるのなら貴之君が一人で勝手に行つて勝手に死んでるだろ？ それをわざわざ一般人だつた私まで起用しなくてはいけない相手なのだろう？ 時を見て行動した方がよいのではないか、せめて私が貴之君をぼっこぼこにできるレベルまで力が即くまで」

「お前こそ俺を見くびるなよ。俺がわざわざ『戦いに行く』訳ねえだろ？ 『戦う』のはまだまだ先だ、お前の助力が要因となるからな。それこそお前の言った通りだ」

「・・・ふうん、そういうことか」

ルリカは“働きすぎる脳”で貴之がしようとしていることを先回りして察する。それを見て貴之は話を分かっていると仮定しながら話す。

「綾城家にリモートコントロール式のトラップを張りにいく。それとも一つ」

「？　トラップだけかと思ったが、何かするのかわか？」

「ああ。こっちの方はお前の助力が必要不可欠だ」

「仰せのままに」

ルリカは大仰に右手を振りかざし、胸の前で格好を執る。貴之はその態度に少々の呆れを抱きながらも、「嫌だ」と言われるよりは格段にいいと判断し、ルリカのその忠義の姿勢を見ながら説明を始める。

「　　と云うことだ」

「可能なのか？」

「綾城は少々特殊な家構造になっていてな、歴史で出てくる城下町のような感じになってんだよ。だから可能だ」

「・・・城が中央にあつてその周りをぐるっと町衆共が囲み、その更に外を百姓が囲むと言った感じか？」

「そうなる。中央が綾城総本家。二層目が綾城家。最も外に位置す

るのが綾城分家だ。俺たちは今から綾城本家までを『焼き尽くす』。綾城総本家と本家の違いが気になるだろうから言っておくと、総本家と本家は元々一つで、双子の兄弟、綾城天鶴あやき てんやと王鶴おうやって言う奴らが生まれてな、その当時の当主、綾城陸奥鶴あやき むつやが死ぬってなった時に権力の相続で問題が起きたんだよ。 どちらが全てを次ぐのにふさわしいか？　　・ ・ ・ 当時は分割するって考えはなかったから陸奥鶴はどちらかに託すかを考えた」

「で、反駁した王鶴が本家。そのまま嗣いだ天鶴が総本家か？」

「察しが“良すぎるな”。その通り、陸奥鶴は天鶴に全てを託した。しかし、王鶴がそれを納得せずに天鶴に反駁し、反乱し、権力の一部を奪い取った」

ルリカは腑に落ちないといった顔を作ると、貴之に向かって疑問を投げかけた。

「・・・では、今は逆になって『王鶴の子孫が総本家』で『天鶴の子孫が本家』か？」

「いや違う。『天鶴の子孫が総本家』だ。・・・お前の言い分も分かる。だがな、王鶴は一部を奪い取ったに過ぎないんだよ。王鶴は元々天鶴に勝てるだけの力はない。それがどうしてか、天鶴が押される程の展開になってな、『訳も分からずに勝った』んだよ。それは今でも説明されてない。 でだ、王鶴は綾城の権力を奪い取ったんだが、王鶴側に『何か』が起きて王鶴は死亡した。そして双方の戦争が終わった」

「死亡？ 唐突にか？」

「ああ。一説では天鶴が政権再奪還のために誰かを差し向けたのではないかと言う説も浮上したが、その節は無くなった。なぜなら、その時『天鶴も死んでいた』んだよ、王鶴と『全く同じ時間』に」

貴之は日頃しないような饒舌に舌が耐えかねて、コーヒーを一杯啜る。

「？　ますます分からん。では、今現在どうやって綾城家は成り立っているのだ？　当主二人ともが死んでは綾城は持たないだろ？　それに双方の疑心暗鬼から次の戦争が起きていてもおかしくないと思うが？」

「ああ、戦争は起きたよ」

貴之はコーヒーを飲みながらさも当然のように言う。そして、続きを語り始めた。

「でも、死人は一人も出ていない」

「なぜ？」

「綾城椎奈・・・奴が全てを無にした。

・・・圧倒的な力で。

・・・絶対的な魔力で。

・・・君主的な命令で。

・・・神官的に説法で。

・・・絶望的な環境下でな」

「先に訊いておくが、それでいざこざは全て『無』になったのか？」

「そういう事だ、奴が黙らせた、全てを。そして政権は綾城椎奈になった。・・・知ってるか神の誕生を？」

貴之は少々訝しげな表情をした後、残っていたコーヒーを飲み干し、カップを皿の上に置いた。

ルリカはコーヒーを飲めないので、貴之に頼んでおいた緑茶を一杯啜る。

そして、神についての話を再開する。

「キリストか？」

「違うと俺は思っている。神って奴は人工的に創られた想像上の『象徴』なんだよ。神が広まった時期を鑑みてみる、丁度、『戦争が起き始めた時期』なんだよ。つまり、戦うために人をまとめ上げる必要があった」

「そう言うことか、『神と呼ばれる大いなる存在が守ってくれるからその神を拝め』という理念を住民すべてに植え付けた訳だな。人類にとって初めての人同士の『狩猟』。縄文時代から狩猟は行われていたが、人同士となると途方も無く恐ろしかっただろうな、そしてそこでの『安全・保身』を約束する、『何か』。・・・継りたくなる気持ちも分からん訳ではないな。なるほど、おもしろい考えだ」

「そう言うことだ。神は拝むことで、継ることで『守護』を与えてくれる大いなる存在と昇華された訳だ・・・仮にいなかったとしても」

貴之は立ち上がりインスタントコーヒーの素を取ってくると、ポットからお湯を注ぎコーヒーを追加する。

「綾城椎奈・・・奴は人々に畏れられる『神』として戦場に現れた。・・・もつとも奴の『神』は『守護する』のではなく。」

動いたら殲滅する・・・だったかな。

「で、話を戻すと綾城椎奈がいざこざ全てを無くしたのか？」

「そうなる。奴は『どうでもいいこと』を終わらせるために双子関係である総本家と本家を創った。これで双方の権力はほぼ拮抗していて、それでいて総本家が実権を握れるという最高の、いや最悪の命令を下した。・・・もつとも奴が考えたのではないだろうけどな」

ルリカはなぜ？ という顔を見ると、「椎奈本人が直接考えた訳ではないのか？」と訊く。

「・・・だって当時の奴は」

7歳だぜ？

綾城家

「あのくええつと、あなた様はイギリスの王女様で在らせられる・・・それでいいのですか？」

綾城彩乃は足に掻い付いている金髪の少女にそう確認した。現在彼女は綾城椎奈の隣、別名『お姉ちゃん』が男の人を連れてきたらここで頑張つて！』部屋の入り口で動けなかった。

と、言うのも足に掻い付いて離れないこの王女セリーナをあやしているところからだった。

先程「日本語話せるの?」と問うたところ、「だって、ウィザウトが日本通なんだもん」と泣きながら少々噛み合っていない返答をされて、それっきり会話も進まず状況が進展しない状況に陥っている純粹純悪少女だった。

「で、セリーナ様はどうしたいのかな?」

「……ぐすん。ぐすん」

セリーナは話そうとしない。

純粹純悪少女はこんなところで悪になるような外道ではないので(年上の人には別)、どうしようか迷っていた。それにそもそも自分より年下の面倒を見たことがないのでどうしたらいいか分からなかった。いつも、「先輩」や「お姉ちゃん」が居たため『頼られる』という経験が乏しいものだった。

(さてこの子どうしたものか……)

彩乃は少し質問していくことにした。

「セリーナ様、先程から仰っている『ウィザウト』とはどなたですか?」

「ばらでいん……私の……」

彩乃はよく分からない返答に困惑しながらも『余計なこと』を考えていた。

(この子がなんなのかはいいとして、このまま行ったら私の『妹属性キャラ』が消えないか?)

「ウィザウトにつ、ウィジャウトに謝りたい・・・」

「そうですか、ウィザウトさんという方に何かしてしまったんですね」

「うん・・・お姉ちゃん助けて」

(お、お姉ちゃんんん!?・・・おいおい、なんだ、この感覚は!?)

彩乃は引きつった笑顔で、セリーナに詳しい説明を求めていく。

「ウィザウトさんはどこにいるのかなあ?」

「分からないだから、一緒に探して、お姉ちゃん」

セリーナは涙を一杯溜めて潤んだ目をして訴える。

(お姉ちゃん、お姉ちゃん、お姉ちゃん・・・)

「わ、分かりましたよ、セリーナ様。涙を拭いて、く、下さいな」

彩乃はスカートポケットからハンカチを取り出し、自分よりも随分と背の低いセリーナに屈んでから手渡す。そして、セリーナから目を極端に逸らした。

「よろしくねお姉ちゃん」

セリーナはそう言ってハンカチを手渡すと、彩乃の手を握る。

「ひゃっ！……すいません。ちょっと驚いちゃって」

彩乃はピクンと身体を上下させると、セリーナの手を遠慮がちに握り替えて、嘘みたいに広いこの屋敷を回っていった。

そしてこう思う。

(お姉ちゃん、小さい子ってなんだか可愛いね)

貴之邸 地下四階五階 訓練場

「さあて、貴之君実践を始めよう」

「おい、区切り方おかしいぞ。それじゃあ、『貴之君で実践を始める』になるだろうが」

「実践は嫌いか？」

「お前は最悪の女だと思うよ」

訓練はここ訓練場で行う。

ルリカはのっけから危ないボケをかまし、貴之は丁寧に拾って突っ込んでいく。これはここ数日で自然と生まれた言わば暗黙の了解^{ポケ}ルルルであり、双方が双方ともにしっかりとこなしている。

ルリカは「さっさと始めよう」と言わんばかりに入念にストレッチ

チをして、準備運動を進めていく。

貴之は前日（もはや今日）と同じく中央に椅子を構え、週間少年なんたらの別の出版社発行の雑誌を読んでいる。

「き、の、く、ん、さつさと始めるぞ。私も貴之君をさつさとパシりに使えるだけの実力を手に入れたいのでな」

「綾城討伐が先だ。その後でたつぷり教えてやるよ、誰に口きいてんのかをな」

貴之は口調こそ荒いが、表情はノーマルで視線は雑誌に向いている。それをルリカは見て、こちらは無表情でストレッチを続けていく。

「なあ貴之君。思うのだが・・・」

「なんだ？」

「私達ってかなり危ないキャラだよな。無表情でボケと突っ込みを全で行っているってみんなに知られたら結構まずい気がするのだが大丈夫だろうか。というか、私達って似てるではないか？ 貴之君が何と言おうと私達って似てるよな」

「まあ、真剣な話をすると確かにそうだな」

ルリカはストレッチを続けていく。

「・・・無表情の私達のこの生活をもしも隠しカメラなどで報道されたらかなり視聴者は困ると思わないか？ だから私はできるだけ無表情でも話が盛り上がるようにボケを噛ましているのだが大丈夫

だろうか？ キャラに合わないことって結構難しいしな」

「心配するな、俺だって突っ込みキャラじゃない。昔は血気盛んだっただがな……」

「だろうな、そう思うよ」

珍しくルリカはボケルトに走らずに貴之の話を真に受けて返答する。それだけ彼らにとってキャラを偽るといふのは深刻な問題なのだろう。

「さて、貴之君そろそろ始めよう。戯れはここまでだ」

「お前が言い出したんだろうが……」

小声でそう呟いて1ページ捲る。

「じゃあ例の如く行くぞ、カウン……ト！」

「ト」で高速移動し貴之に襲いかかるルリカ、そして貴之はそれを黒鬼で迎え撃つ。ルリカは貴之の算段回目までは攻撃を躲したが三回目に躲した『腕らしきもの』から派生した『黒』に殴られてしまふ。そして壁まではじけ飛ぶ。

「ぐはあっ……容赦ないな貴之君……うん？」

「……どうかしたか？」

「いや〜その〜え〜っと……」

「? どうしたらしくない答えだな」

ルリカがはぐらかすように言うのはほぼ初めてに近い気がした。そして、そんなことがルリカで起こり得るのは魔術関連でしかないとも貴之は考えていた。

そしてルリカはようやく口を開く。

「貴之君痛くないぞ?」

「・・・お前の魔力が上がったからじゃないのか?」

「いやそういうんじゃないよ、『黒鬼が当たってないような』・・・そんな感じなんだよ」

「・・・どういうことだ?」

「さあ? 分からんねえ」

訳の分からない現象に貴之とルリカは揃って悩んだ。

1 - (2) 不可解(後書き)

お読み頂き有難うございます。さて、この話を投稿する今まさに三話先を書いております。この彩乃の「不可解」はただの経験不足ですが、ルリカの「不可解」はこのストーリーそのものと言ってもいいほどの「不可解」で前にも言ったような気がしますが、「九州独立戦」で説明する予定のはずです。これからもこの巫山戯たキャラをどうかよろしく願います。

貴之邸 訓練場

ルリカは自分の手を見て、なにがどうなったのか考えていた。そして、“働きすぎる脳”で拳がった疑問を貴之に投げかけてみる。

「貴之君、手を抜いたか？ 障害が入ったか？ 魔力のコントロールをミスしたか？ ここからではよく見えんが漫画のエロシーンで動揺したか？」

「いいや、問題ないぞこの変態」

「よし、貴之君にイレギュラーはないようだ。だとしたら、この私自身がおかしなことになったとしか考えられんな。貴之君今の一部始終を見ていたか？」

「見てない。というか、今もの凄くいいシーンだから黙ってもらえる？」

「貴之君、流石に私でもそこは自粛するぞ？ もしかしたらもの凄い必殺技的なものが生まれる吉兆かも知れんぞ？ いいのかその世紀の大発明を見逃して」

ルリカは腰に手を当てながら無表情で貴之にそう言う。それに対し貴之は本当に熱中して漫画を読んでいる。

それに耐えかねたルリカは貴之の下へ歩き進んでいく。黒鬼は解除されているので、すぐ側まで近づける。

「貴之君本当に熱中して読んでいるのなら私は貴之君の注意を引きつけるために熱中に注意、チューするぞ?」

「してみやがれ」

ルリカは少々沈黙すると、貴之の後部に手を回し、キスをした。

「むんん!?!」

そしてゆっくりと放していく。

貴之は珍しく露骨に動揺すると、顔を赤くどころか青くして自分にいきなりキスをしてきた恐ろしい女を見上げる。するとその女は至って普通の顔で唇を一つ指で這わせるところ言った。

「やっと注意してくれたな、では話すぞ」

「てめえ、いきなり何」

「何って貴之君がキスしろって言ったから・・・」

ルリカは別に何事もなかったかのように涼しい顔で座っている貴之を見下ろす。

貴之はやっとのことで正気に戻ると、急いで立ち上がり、上層へと拳がる階段を駆けていった。

数分後

貴之の表情は淡泊無比に戻っており、こちらは何事もなかったかのように歩き、元の椅子に座る。

この短時間でキャラを修正した貴之は途方も無く素晴らしい逸材であると言える（役者として）。

「お前そういうことは止めて置いた方がいいぞ。俺が何回唇を洗ったと思ってる？ 合計で五十二回だぜ？」

「ひどいな貴之君、折角の初キスをくれてやったと言うのに、何と教養のない男であろうか。哀れなり、貴之憶良。私なんて何回人差し指と中指でエロく拭ったと思っておる？ 実に二百三十二回半だぞ？」

ルリカは柔軟をしていた。貴之との訓練は終わった訳では無い、むしろかれからなので空いた時間を有効活用していた。

貴之はキャラ作りを終えたので、さつさとルリカの疑問に答えることにする。これ以上引き延ばしてまたこんなことをされて『あいつとの味』を忘れる訳にはいかなかったからだ。

「で、その不思議な現象とはなんだ？」

「ふむ、それがだな貴之君、私を感じた通りに話すと『黒鬼の魔力が無くなった』感じなのだ。私に触れた瞬間に無くなってしまったかのように。・・・貴之君に調教されて一晩、それで微弱なりとも魔力と言うものを感じられるようになった。その直感染みたことを告げるとそうなる」

貴之は椅子に前屈みで座り、肘を太腿の上につきそれで組んだ手の上に額を押しつけていた。そして、一つの可能性を導き出す。

「黒鬼の魔力がお前によって消された・・・か」

「消した？ 私が？」

「ああ。それならば辻褄が合う。それに俺の黒鬼に魔力の変化が起こった感じはしなかった・・・はずだ。俺もエ○ンの檻の日用品を使った爆発に気が奪われていて、しかも本来の黒鬼の魔力の五百分の一しか出してなかったから細かい変化には気がいつてない・・・だから確証はないが黒鬼に魔力の変化はなかったはずだ」

「では貴之君、実験しよう。その今の黒鬼の『五百倍』で行えば魔力がどうなったのか分かるのだから？ だったらやってやるうじやないか」

ルリカは胸を張って、貴之に自信ありげにそう言う。

貴之はそれを訝しげな表情で聞いた後、「それは無理だ」とそっぽを向きながら呟く。

「どうして？」

「無理だから」

「そうか、だったら別の案だ」

ルリカは自分が立案した内容が早々に否定されると、後腐れも遺憾もなくさっさと次の内容を提示する。まるで、自分の考えに興味がないように。

貴之はそれを「有り難い」とも思ったが同時に、「おかしい」とももった・・・人間として。

たので、ひとまず椅子に座り、再び少年何たらを読み始める。

数分後

「ぶはっ！・・・はあはあ、貴之君！」

「これ結構おもしろいな、知られざる作品ってところか・・・」

「おい、貴之君！ さも、『この新人今後売れるぜ？ 今のうちに目を付けておいて後からブームに乗ってきた遅刻者共を嘲笑ってやるぜ』的なことをする前に私の救出作戦はどうした！？」

貴之は新たな発見で心ときめかせ、ルリカは死の間際を見捨てられたので心潰されていた。言うまでもないが息を乱しているとはいえ表情はない。

「おう帰って来たか、てつきり途中で死んだかと思っただが、・・・残念だな」

「おい貴之君！ 小声で言っても聞こえているぞ！ せめてもう少し弱った振りが出てきて貴之君を動揺させて、・・・心臓マッサージでも入念にさせれば良かった」

「お前こそ聞こえてんだよ。心マを不純な動機で使おうとするな、救急隊員さんとお医者さん全てに土下座しろ。そして俺の足下にひれ伏せ」

ルリカは謝罪の言葉をきちんと述べてから立ったまま頭を下げた。

別に誰か居るわけでは無いが。

そして顔を起こすと、貴之に向かつて反論を始めた。

「ひれ伏して幾らでも踏まれてやるから、まず私の意見を聞け」

「ドMの癖に上から目線とは新種か・・・」

「貴之君、私にあれだけ『カウントを無視するような奴に傳かすいてやる』いと言っておった癖に自分はアレか!? なんだあれ、気を溜める時間が無かつたじゃないか」

「気を溜める? なんてそんなことしなければならんだよ。それに台詞を捏造するな」

「格好いいだろうが! 鳥山憶良先生原作のあの作品だって、キチンと溜めてから必殺技撃つだろうが、どこまでが必殺技でどこまでが普通の気弾なのか分からんが。ともかくなんであんなに早く撃てるのだ!? 私が『こい! 貴之・・・』までしか言えてないだろうが、しかも攻撃見えなかつたし!」

貴之は面倒くさそうに頭を何回か掻くと、ルリカ専用説得法を始める。それはこの一晩で学んだ大いなる成果で戦果だった。

「ルリカ、お前はなぜ俺のことが好きになつた?」

「そ、それは友達だからだ。友達として貴之君を好きになつたそして、『なぜ?』と聞かれたら、貴之君だからとしか言いようが無い」

「だな。では、気持ち一つで友達になつたんじゃないかそこに理由はいらない。それと同じだよルリカ、俺ができるのだからそういう

ことなんだよ。それにそれはお前が一番よく分かっているんじゃないか？ 分かっただら後で抱いてやる」

「そうだな、そういうことだ貴之君」

説得ミッション完了である。

まず、「お前」という一人称から「ルリカ」へと人称を変える。そして、「友達として」という流れに持ち込みよく考えれば疑問に持つが、そこは流れで押し切って、最後に「何かしてやる」宣言をする。一度もしてないけど。そこはルリカも追求しない。

と、いう流れでミッションはコンプリートされる。

「ああ、そうそう、貴之君に感じたことというか、これを見て欲しいんだが」

そういつて、ルリカは着物の一部を捲った。

言っていないかったが、今ルリカの制服は洗濯に出ている着れるような状態では無いのでどこからともなく貴之が出してきた着物を着ている。

ルリカの行為は傍目から見れば少々危ない所為だったが、その捲られた素肌を見て貴之は困惑する。それは色気や艶やかさといった類ではない。

「傷が一つも無い・・・」

「ああ、ここは黒鬼が直接着撃した場所だ。左手からこの胸にかけて当たった訳だが傷が無い。これはどう見ても」

「魔力が消された・・・？ だが、黒鬼に変化があったようには思えなかったがな」

貴之はその場を硬直してその部位を見つめる。そして、訝しげな表情をした後、ある魔術を使う。

その魔術は、『魔力を審査する』ものだった。何か出てきたり、使ったりするわけでは無く、「目」が変化する。所謂鑑識いわゆると同じだ。残った魔力で誰と誰が戦ったのか、そしてどのような類の魔術を使ったのか・・・貴之家独自の魔術だった。

そしてそれを使役し、ルリカの肌を審査する。

「・・・違うな魔力は残っている、ごく僅かだな」

「ではどうやってノーダメージにしたと言っただけ？」

貴之は審査を終え着物を着直すように促すと、椅子のある場所へと戻っていつて椅子に座った。そして、雑誌を読み始める。

それをルリカはすまし顔で見えていたが、徐に口を開いて威嚇する。

「もう一回キスするか？」

「・・・こう見えても考えてんだよ。まず、黒鬼に魔力の変化はほとんど見られなかった。お前は吹っ飛んだ、が、黒鬼による攻撃はノーダメージ。そして僅かに残っている魔力・・・総合すると、攻撃は喰らったが、それは魔力によるものではない。つまり、一般のベクトルによって吹っ飛んだ」

貴之は雑誌を読んだまま、解析を続けていき、ある仮説を立証するために椅子の近くにルリカを呼び、自信は黒鬼をルリカの目の前にだす。そしてこう告げる。

「黒鬼を触って見る」

ルリカはさして疑問に思わずに貴之の指示に従いすぐに触る。しかし、黒鬼に変化は無かった。

貴之はそれで、一つ目の仮説の一パターンを捨てる。そしてその仮説の第二パターンを実行させる。

「黒鬼を『攻撃』してみる。殴るなりなんなりな」

そして、ルリカは少し距離を取ると、昨日覚えた中で最高ランクの魔術を放つため、まるでキーボードを打つように空中に描いている。傍目には何も起こっていないように見えるが、実際は組み立てている。

剛炎が貴之を襲うが、呆気なく黒鬼の前に消滅する。

貴之はこれでもダメだということに少々頭を悩ませて、ルリカが今した行動に制限を加えていく。

「今度はお前自身の肉体で『攻撃意思を持って』攻撃してみる」

ルリカはまたもや貴之の指示にあっさり従い、黒鬼を『攻撃意思を持って』殴る。

しかし、見た目には何も起こらなかった。

だが、貴之はしっかりと理解していた。

『黒鬼の魔力が削減されたこと』を。

「もう一回殴れ。但し更に条件を足す。黒鬼でお前を攻撃するから、『防御せずに』その攻撃にカウンターを入れる」

「むむ？ 防御してはいけないのか。・・・まあ、貴之君がそう言うのだったらそうしよう私は健気な貴之君の僕だ。じゃなかった」

「

友達だ。

ルリカはそう呟くと一言だけ「先程のように高速じゃないよな？」と念を押すと貴之が頷いたので了承して、攻撃態勢に入る。

貴之はルリカに攻撃する。

黒鬼はたいした速度を出さず、ルリカにもはっきり捉えられる速度でその『黒』をぶつける。それに対し、ルリカは蹴る行為でカウンターする。

双方がぶつかるが『何も起こらなかった』。

一旦、漫画から目を離しその光景を見ていた貴之はルリカのスキルの正体に確信を持つ。そして、再び漫画に目を戻すと、こう呟いた。

「変換効率・・・か」

「ヘンカンコウリツ？」

ルリカは蹴りの姿勢のままそう問う。足は尚黒鬼にぶつけたままだ。

「そう変換だな。今の攻撃で本当はお前が部屋の『壁まで飛んでいていなくて』はいけなかったんだよ。それがどうだ？ お前はきちんと整体している。つまり、お前の肉体は魔力を『ただの』ベクトルに変更し、そしてその力を変減したんだよ。・・・まあ、変減は日本語にはないが」

「・・・つまり私は『魔力』を『ただの力』に変えたと言うことか。そしてその力の増減を操ったと」

そこでようやく黒鬼から足を離し、直立二足歩行する。そして先程黒鬼×300で大破した壁により、「これは？」と訊く。

貴之は漫画を読みながらその問いに仮定を用いて返答する。

「言っただろ『変換』だ、『消滅』じゃない。大きすぎる魔力はただの力に変更され減少されても、莫大なベクトルでお前を吹っ飛ばしたのだろう。そうでなくては変換効率ではないからな、魔力を消し去る力じゃないことを言ってるんだから」

「なるほど。もう一つ訊くと、貴之君が実験の前に『意思を持って』ということも付加される訳だな」

「そういうことだ。『意思』が無い場合その変換効率は使えないようだしな。それが『触れ』の実験だ。あれがないと「オート」なのかどうか分からなかったからな」

貴之は漫画を読み進める。

ルリカは納得し、貴之の元へ歩き寄る。

「さて、貴之君まとめると私の能力はなんだ？」

「魔力に対し意思を持って触れることにより、その魔力を一般的な力に変更。そしてその力を増減させることが自由に操れる・・・はずだ」

「Thanks to Kinokun だな・・・ってちょっと待て、もしそのスキルが本物だったら私は最強じゃないのか？魔力で攻撃してきたものを全て一般ベクトルに変換してほぼノーダメージ。そんなの貴之君に勝てるんじゃないか？」

ルリカは顎に手を当て考える仕草をしながら、貴之にそう進言する。そして、「貴之を倒せる」という希望が間近に迫っていることに興奮し、貴之を指さしながらこう言う。

「貴之君、残念なお知らせだな。君は私に負けるようだぞ？ 勝負しようではないか貴之君。負けた方が勝った方の言うことを聞くというスタンダードな約束の下にな。ふははは！ 貴之君になくにしてもらおっかな、楽しみでしかたないぞ！」

「勝負するのが前提、勝つのが前提か。まあ、いいお前の力がどれほどか見ておきたいな」

「世迷い言を。貴之君今から君は私に負けて私の僕になるのだぞ？ そんな上から目線でいいのかな？ 今のうちに許しを請おうたらどうだ？ 許してやるぞ・・・一週間メイド姿で私に傳く程度でな！」

「・・・御託はいい、さつさと始めるぞ」

貴之とルリカは双方ともに距離を取る。そしてルリカがカウントを取る。

「では、いつもの・・・ようにっ！」

このタイミングでルリカは貴之に向かって、地面を蹴る。ルリカの動きは上下左右に動いており、そこに規制はない。故、貴之に先手を読まれることはない。

ルリカは自分のスキルを過信することはなかった。先程までのそれはあくまで『伏線』でしかない。あえて、自信過剰に言うことで「スキルに頼ってくる」という思考を貴之に与えるための伏線。そ

れで来ると分かっていたら貴之ならば対策を打ってこないはずがない。

ルリカは走りながら描いていた術式を発動させ、多量の水を創りだす。それはカモフラにもなり、貴之はルリカの想像通り居場所を特定できなくなった。そして貴之は水の魔術を黒鬼でなぎ払う。

それを予想していたルリカはピンポイントで黒鬼の一部を『変換』する。

「貴之君、私は勝ってしまいそうだぞ!？」

貴之がどこにいるかルリカ自身あまり特定できないが、魔術を行使した時の場所、そして現在の水の流れを“働きすぎる脳”で読み取って貴之の位置を計る。

そして、強襲しようと考えていた瞬間に何かルリカを襲う。それは右脇腹で、すぐに『変換』を試みるが、変換することができない。

「な、につ……」

あえなくルリカは後方へ吹っ飛ぶ。

水はゆっくりと収まっていった。

ルリカはそこまで大きなダメージを負った訳では無いが、理解不能の攻撃が心理的にダメージを与えていた。

ルリカが右脇腹を押さえながら、部屋のほぼ中央に初めと変わらずに立っている貴之を見た。貴之は身体を半分横にして顔だけでルリカを見ている。

「貴之君、何かしたようだな。というか、弱点発見するの早すぎないか？」

「分析が俺の真骨頂なんだよ、若輩者。そして、その分析を元に最善の策を導き出す。あくまで今のは『お試し』だったが上手くいったようだな」

「はっはは！ 貴之君愉快だな。君が友達で本当に良かったよ」

「そうかよ」

貴之は黒鬼の形を解除していた。

しかし、ルリカは理解していた。貴之の黒鬼が『造形物』で無いことを。本来の形は『無い』ということ。

「やっと本気か？」

「まあな、本気まではいかないが、六割ぐらいの戦術で相手しているやるよ」

「舐められたものだ」

「そういうな、俺は褒め称えてるんだぜ？ お前がここまでできるようになるとは思ってなかったからな。賞賛に値するから、こうやっつて六割も出すんだよ」

貴之は珍しく笑みを浮かべている。それが、『偽物』であるが。ルリカはあの笑みを浮かべている。それは、『本物』であった。

「続きといこう貴之君」

「望むところだ」

1 - (3) 変換効率(後書き)

お読み頂き有難うございます。

貴之邸 訓練場

「貴之君、大変愚かな気がするが、どうやって攻撃したのか教えてはくれないだろうか」

「いいぜ」

「簡単だな。それも勝者の驕りか？」

「いいや、純粹に気が向いたからだよ。・・・お前に攻撃したのは『お前の水』だ。たしかにお前のスキルは一見凄まじく素晴らしく見えるが、『お前自身の魔力』は変換できるのか？そこに疑問を抱いて実験してみたんだよ。そしたら大成功だ」

貴之は「大成功だ」などといいながらもさして喜んだ雰囲気を見せずに、ただただすまし顔で毅然としてルリ力を見ている。

ルリ力はルリ力ですまし顔で髪がべたべたに濡れたので水分を落とす作業をしながら、貴之との会話に興じていた。

「ほう、なるほど、おもしろいな。ふくん、で、なんだ？ 次の手は考えてあるのか？ 理解すれば大したことはない、以後そのようなことをしなければいいだけの話だからな。まさか貴之君、これだけ得意になるなよ？」

「ならねえよ。というか実験本番はこれからだ。そこで俺の隠し玉の一つ見せてやるよ」

「それは楽しみだ。では、再開しよう」

最後にルリカは頭をブルブルと振ると、きれいに髪を整えて攻撃を始めた。

戦闘終了後

「お……い……貴之君……それは反則じゃないか。私のスキルどころか……その魔術に打ち勝つ能力はあるのか……。そんな……もの持っていないながら……なぜ綾城を潰しにいかない……」

ルリカは壁に凭れ掛かりながら平然と立っている貴之にそう訊いた。貴之は貴之でただルリカを眺めていた。

ルリカの身体はずたばろで歩くことすらままならない状態だった。そうだったのは貴之の『懺悔』^{ざんげ}と呼ばれる『何か』を受けたからだった。

「すまないな、これが効くかどうか試したかったんだがここまで効果があるとは思ってなかった。本当にすまないと思っているよ。今から手当してやるから座ってる」

「……ああ、すまない貴之君。残念なことにおんぶしてもらえろ喜びに……浸るだけの……余力がないな……」

貴之はゆっくりとルリカに歩み寄ると、その場にしゃがみルリカ

をおんぶした。そして、上層へと上がる階段へと向かっていった。

貴之邸 一階 専用浴場

「さてと、あとは自分でしろ」

「なんでこんなところに？・・・貴之君、弱ってる私を弄ぼうとする意気込みは結構だが、少々今は止めて欲しいな。たしかに私は負けたが、ちょっと待ってくれないか、せめてこの状態が楽になるまで」

「馬鹿言つな。俺がそんなことする訳ねえだろうが。ここの浴場は専用浴場と言つてな、傷などを癒やすのに打って付けの場所なんだよ。アロマ、湯泉効能、それに微弱に魔力が流れていて、それらが傷の回復促進をする。さつさと快癒して、やってもらわねばならんしな」

貴之はそう言つと、扉を閉めて出て行った。

ルリカは「動けないんだけど、貴之君」とからがら呟いたが、貴之の耳には届かなかつた。

「入るのはいいとしても、入れないんだけど・・・どうするかなあ」

ルリカはようやく寝返りを打てるまでに体力が回復したので、横向きの体勢から仰向けに転がる。そして、天井を見ながら波瀾万丈の三日間を振り返る。

「・・・魔術師に会って、貴之君が倒して、貴之君と友達になって、貴之君の後輩が目の敵だということを知って、貴之君のために今こっぴどく修行に励んでいる・・・か」

ルリカは遠い記憶を振り返るように深いため息と共に天井を仰いだ。天井は憎らしいほど素晴らしい装飾だった。

ルリカはそれを見て薄く呆れ笑いをすると、こっぴどく呟く。

「私の人生もちよつとは『人間らしく』できたかなあ・・・」

貴之邸 一階 貴之の部屋

ルリカは新しい着物に身を包んでいた。結局貴之が助太刀をしてくれなかったので、風呂に入るだけで一時間半も掛かってしまった。貴之はベッドに座り、小型端末の最新版、ZIGAジーガと呼ばれるもので何かを見ているようだった。

ZEGAはTVが地デジに変更になったことにあやかり、地下電波を日本中どこでも受信できるという画期的なシステムを取り入れた。過去はどこか規定の場所に電波が届かなければネットは繋がらないが、現在はそういう発信・受信塔がなくてもネットを傍受できる。ルリカは黒髪と紅と黒を色鮮やかに描いた着物がとても似合っていた。

貴之はその容貌に気を囚われずにただただ端末を見ていた。すると、ルリカは貴之の真横にちょこんと座ると、貴之が見ていたものを横から拝見する。

「なんだこれは？ 女？ あっ……」

ルリカがそう訊ねるときののはさっさとネットを切り、端末をベッド横の棚に置いた。それにルリカはむっと頬を膨らませると（表面上だけ、顔はいつもどおり変化がない）貴之に反論した。

「おい、貴之君。私に冷たすぎないか？ もうちょっと労りの心をおおお……」

ルリカは貴之に押し倒され、ベッドの上に仰向けになる。

「何をする？ 何をするってそういうことか？ これが罰ゲームか」

貴之はそれ以上何かするようなことはなく、ただただルリカの顔を無表情で眺めてから部屋を出て行った。

最後にルリカは天井を仰ぎながらこう呟く。

「なんだあれ？ 訳が分からん。まあ、それはおいておいて……チキンが」

貴之は階段を下りて一階に向かっていた。

（似ているな……ルリカはあいつに……愛歌あいかに）

貴之邸 一階

貴之はサンテラスにある椅子に腰を掛けていた。そこにルリカがゆっくりと入ってくる。

「貴之君、どうした？ 私が風呂から上がったから様子がおかしいぞ。何かあったのか？」

「……なんでもない、気にするな」

「そうか、では気にしないで置こう」

あっさりと言いの言い分を受け、聞き流すと自分も貴之の正面の椅子に座る。貴之とルリカはテーブルを挟んで向かい合った形になっている。

貴之はサンテラスから見える四季折々の草花を眺めていた。ルリカはそんな貴之を眺めていた。

「貴之君、身体のはうはだいぶ回復したから、いつでも実践に戻れるぞ。……今はそんな気分ではないか」

ルリカは貴之の表情を見て、貴之がいつもの貴之でないことを悟り、自分も貴之から目を離し、美しいガーデンを鑑賞することにした。

「……フリーズ」

貴之は徐に口を開いた。

ルリカは“働きすぎる脳”の一部に記憶されている、「フリーズ

ア」花言葉を思い出す。

「慈愛……か」

「ああ。……俺の初恋の人が植えた花だよ……俺のためにな」

貴之は一本のフリージアを見つめながらルリカにそう呟いた。いつもの貴之とは異なる言葉の重みだった。何かの思い出を蘇らせるように、沈殿させていた想いをゆっくり掻き上げるように……。

「貴之君の初恋ねえ……どんな子だったのだ？ まあ、無理に答えなくてもいいがな」

「お前……みたいな奴だよ」

貴之は外に儂く咲き続ける富利慈亜フリージアを見つめながらルリカにそう答えた。

「それはそれは、なんとも皮肉なことだな貴之君。ばっちくそつてやつだ。私みたいな奴か……ふむ、最低の女だったに違いない」

ルリカは感情を込めずに坦々と言葉を羅列していった。

「……そうだな、お前が言うようにそうかも知れない。でも、お前より何百倍も儂い存在だったよ。儂くて、頼りなくて、無邪気で、無垢で、天然で馬鹿みたいに俺に寄り添って来た、馬鹿な女だったよ」

「……それでさっきの写真を見てから腐っていたのだな。この着物ももしかしてその女が着ていた私物か？」

「……………ああ」

貴之はただ口を開いたと言えるような答え方をした。
その台詞を聞いてルリカは、

「いいものを着ていたのだなその女は。……で、その女はもういないと。それで、あの奥に“鎮魂”の意味があるイチヨウが植えられている訳だな。……どこまで思い入れしてたんだよ、“お前”は。家族よりも大切な者だったのか？ その……『愛歌』って女は」

「！……………なぜ知っている」

貴之は一瞬動揺したが、すぐに表情を無に戻し、フリージアの花を見つめる。

「簡単なことだよ貴之君。その女は」

私が殺したから。

貴之は動揺という言葉を失った。すぐに立ち上がると、黒鬼を発動させルリカを地面に叩きつける。そして『黒』を刃物状態にしたものをルリカの首元に今にも切れそうなくらい強引に押しつける。

「……………落ち着けよ貴之君。そんなに瞳孔が開いては見えていくものまで見えなくなるぞ？ それに殺したのにはちゃんと理由がある、心配するな」

「……………話せ。そのあとお前を殺す」

「おいおい、ここまで必死になって魔術を訓練したのにいきなり殺すはないだろう、貴之君。情緒不安定も大概にしるよ、ちゃんと説明してやるから」

「・・・・・・・・」

「五年前のことだろ？ あそこの石碑に××04 12/24 つて書いてあったからたぶん間違いはないと思うぞ。」

あの日はちよつと用事があつてな、福井県の東尋坊とうじんぼと呼ばれる自殺の名所を訪れていたのだよ。まあ、なんのことはない私は『死に場所』を探していたのだ。私はこういう体質上なかなか一般の方法で死ねないんだよ、だからきちんと死ねる場所を探して福井まで行つたのだ。その時丁度蟹解禁でな、おいしかったぞ、蟹。北海道の毛蟹とは比べものにならないほどおいしかった。越前蟹と呼ばれるブランドものでな、タラバ蟹並にジューシーな食べ応えとうまみだった。なんでも昔はそれが『おやつ』として出ていたらしい、なんとも羨ましい限りだ。

・・・話を戻すか。で、私は東尋坊から飛び降りた訳だ。しかし、残念なことに“一回目”は死ねなかった。

愛歌って女が身代わりになつたからな。

愛歌は私が飛び降りた瞬間に手を掴んでな、身体が入れ替わるようにして東尋坊から落ちていったよ。

でだ、漫画の如く「死んだら何も無いよ？」って言いながら落ちていったぞ。馬鹿な女だ、自分が死に行っているではないか。

まあ、珍しかったと言えば、漫画のように死の瞬間で台詞を言えたことかな。普通「落ちる！」とか「うわあああ！」とか言うだろうに、小声だが私の心身スキルでしっかりと最後の言葉を聞き取つたぞ。

“あれ”が落ちて死んだ訳だが、ああ、先に言っておくが『死体

が上がって来なくて、もしかしたら・・・」なんて淡い期待するなよ。すっかり上がって来たのを私が運んで埋葬しておいたからな。話を戻すと、私は“それ”に「死なないで」と言われた訳だが、落ちて浮かんできたのを埋葬してから、すっかり飛び降りている。・

無駄死にだなあれの行為は。まさしく無駄としか言いようが無い、ああ、蛇足という言葉があったか。

そんなこんなで私は生きている訳だがどうする、貴之君？ 私を殺すか？」

貴之は片眼から涙を零し、片眼には明確な殺意をルリカに向けていた。

ルリカは今、殺されるといふ状況に合いながらもささして動じず、ただ貴之の表情を観察していた。

「貴之君どうした？ 殺すのであろう、さつさと殺したらどうだ？ 私はやっとこさ死ぬる場所を見つけられたのだから万々歳なのだな。それにその殺害者が最も敬愛する『友達』なのだ、これ以上の幸福はあるまい」

貴之は涙を零し、それがルリカの頬に当たる。

貴之は睨んでいた。

『笑顔』で自身を見つめているこの女を。

しかし、

あの笑顔で、自分のことを真っ直ぐな瞳で、
穢れ無く、憂い無く、恐怖無く、この状況を愛し、
自身を蔑むこの女を、
自身を愛し、

貴之は殺すことができなかった。

綾城を潰すには、兄の願いを叶えるには、そして何より、感情論で、

殺すことができなかった。

貴之はサンテラスを黒鬼で破壊し、そしてガーデンングを「無」へと施した。

フリージアがそこにあるうとも。

「落ち着いたか、過去に囚われた馬鹿野郎が」

「……」

貴之はむちゃくちゃに壊した庭の真ん中で泣いていた。

嗚咽すら上げず、言葉すら呟かず、ただ空を仰ぎ見て泣いていた。ルリカは破壊活動を景色を見るように眺めていた。それは、『人間としては異常な表情』で『人間としては不十分な行為』だった。眺める……ただそれだけ。気持ちの移入もなければ、行動にすらしない。

「……さて、『特訓を始めよう』」

先程のことが何事も無かったかのように、何事かがあったとしても過去の話であるように、ルリカはゆっくりと椅子から立ち上がりサンテラスから貴之のいる庭へと下りていった。

貴之はルリカに気づくと、ゆっくり顔を回し面と向かう。

「……全部、綾城のことも、兄さんの託けのことも、俺が化け物

であることも全部片付いたらきちんと殺してやる。それまでお前はきちんとした『友達』だ。それまではな……」

「では、今まで通りに接して今まで通りボケと突っ込みをやり合えばいいのだな？」

「もちろんだ。言っただろ、終わるまでは『何一つ変わらない』ってな」

「いいだろう貴之君、おもしろい提案だ。では、逆に言うと、全部終わったら貴之君と本気で『殺し合って』いいのだな？」

「もちろん。そこで『友達』は解消される訳だからな、赤の他人だ。お前を殺す理由はただ一つ、『俺の八つ当たり』だ」

「いいねえ。では私は『殺人鬼を成敗する』ということにするよ。その時が楽しみだ」

貴之とルリカの話合いはここで終わる。

被害者と加害者。

復讐者と共犯者。

そしてなにより……

『友達』と『友達』

ここに約束は結ばれた……。

某所 と 某所

「おつ、珍しいね『貴之君』。君が話しかけてくるとは」

『いえいえ、お久しぶりです、『悠久さん』。魔外師を見つけたのでその連絡をしようと思ひましてね。中々どうして、『憶良』のところにいりましたよ。灯台もと暗し・・・世界は入り組んでますね』

「君がそれを言うかい？ もともと貴之君が『あんなこと』しなかつたらここまで面倒くさい状況にはならなかつたはずだぞ。まったく、私の『ストーリー』に多大なる影響を及ぼしたんだから賠償請求もきちんと通るんじゃないか？」

『あなたがそれを言いますか？ 僕達に表の世界の法律は関係ないじゃないですか。私達が被るのは表世界の【現象】だけでしょ？ ・・・と与太話もここまでにして、魔外師のことですよ』

「そうだった、そうだった・・・珠飾のお嬢ちゃんだろ？」

『早いですね。いつからですか？』

「一昨日」

『一緒ですね。僕も久しぶりに憶良に【会つて】来ましたよ。いや〜毎回記憶消すので、毎回一時間程驚かれますがね。それもで弟と会うのは中々のおもしろみがあつていいものですな。しみじみそう思います。まあ、憶良の【定期検診】が第一の目的ですが・・・』

「どうだい彼、きちんと【王】になりつつあるかい？」

『頭角は無いですね。まだ【鬼】の段階ですし。それに珠飾さんと共生していけばきっと【王】になると思ひますから焦る必要はない』

でしょう』

「そう。あっちの魔外師はどうなってる？」

『いや、それが・・・』

「また何かやったのか？ まさかとは思いますがまた魔術師の大量虐殺とかしてないよな。本当に『ストーリー』がむちゃくちゃになっちゃまう」

『そのまさかですよ。フランスの方で五百人ほどやっちゃったらしいです。なんでも、メッゾファミリーって言うろくでもない魔術マフィアの裏酒場に迷子でてここ入っちゃったそうで、そこでそのファミリーの一員から殺意を受けて・・・』

「『絶対死^{デッド}』か・・・」

『ええ、その発動で酒場にいた魔術師は全滅、というか消滅ですね。あの子今回は消滅にしちゃったらしいです。悠久さんの『ストーリー』で最も避けたいことが起こっちゃいましたね』

「なんとかしてくれ、貴之君。これ以上は“本格的に”『ストーリー』を使わなくてはいけなくなる。私だってめんどくさいんだよ、そうになったら休みが少なくなる。一般小説だって執筆してるんだからな」

『ああ、そうですね。買いましたよ悠久さんの最新刊。今回は恋愛ですか、珍しいのでは？ いつもならファンタジーが一風変わった現実小説をお書きになるのに』

「貴之君、真価とは進化なんだよ」

『たぶん上手いこと言ってるのでしようが、伝心ですのでちょっと伝わりにくいです』

「おいおい、真価に進化をかけたのだよ。NICEだとは思わないか？」

『小説でやってください』

「そう言つなよ、貴之君。というか君今どこにいるの?」

『上手いこと流れを創らないでください。言ったらここら辺の設定ストーリー変えて殺しにかかるでしょ? 嫌ですよそんなの。表に【嫌煙権】ストーリーというのがあるように【嫌殺権】ストーリーというのも主張できるような気がします?』

「連れないこと言つなよ、釣れないなあ。大丈夫、私の『設定』ストーリーを行使して、精々そこをマグマで満ちた世界にソフトチェンジするだけだよ。そして貴之君が溶け消えたらきちんと元に戻すよ」

『悠久さん、いくら僕たちが【死なない】ストーリーからってそれはまずいですよ。身体が無くなったら元には戻らないんですから、僕の魂だけがどこかで浮遊することになつちやいますよ。というか、僕の【遊イクシオン戯言葉】イクシオンを使ってその【設定】ストーリーを変更します』

「おもしろくないなあ・・・」

二人の魔外師は魔法まがいの言葉で魔術まがいの世間話を進めて

行く。

1 - (4) まがい、魔外（後書き）

お読み頂き有難うございます。

1 - (5) ルリカのキャラ

貴之邸 初心愛歌の部屋

貴之はルリカに訓練は一時間後に始めると告げ、ここ、うぶ初心あいか愛歌が昔使っていた部屋に来ていた。そして入り口の扉に凭もたれかかっている。

部屋は他の部屋に比べ、少々女の子らしさが滲み出た部屋となっている。愛歌が最後に使っていた状態のまま何も動かしていなかった。

貴之の淡い期待は、珠飾ルリカという女の自殺未遂によって打ち消された。

もうこの部屋に未練が無いと言えば嘘としか言えない。むしろ、より一層無念が心を苛む。

ここで漫画らしく、小説らしく遺産となるようなものがあればいいのだが、残念ながら愛歌は思い入れして扱っていたものはほぼ皆無である。強いて挙げるなら、『オルゴール』が残っている。

愛歌、愛の歌を奏でる少女・・・そういう意味で付けられた名前らしい。オルゴールとはなんと名残にびつたりの一品だった。

貴之は数分部屋を眺めると、ベッドの上に置いてあるオルゴールを手に持った。彼女が寝る時に聴いていたであろうことが窺える。

貴之はオルゴールを回し、その聴いていたであろう音色を聴き、音色が終わるとともに貴之はオルゴールを破壊した。

そこにどのような気持ちがあったのか、分からない。貴之本人ですら分からなかった。それでも、全てを終わらせるために貴之はオルゴールを破壊することで『哀歌』を奏でた。

某所

「憶良は本当に、『終わらせる』つもりなのかな……。愛歌ちゃん、椎奈ちゃん、そして初心一族と貴之一族、魔法、魔術、魔術、そしてなにより、ルリカさん。どれだけ悲しもうが自由だけど、こっからストーリーは進んで行くのね。ルリカさんが『瑠璃歌』さんで、しかも
だって知ったらどうするのかなあ。『ルリカ』さんは知らないけど、『瑠璃歌』ちゃんは知ってるからなあ、九州……。か。そこで全部終わるのかな。そこは悠久さんがどう動かすかによるか……。僕が遊戯言葉フィクションで全てやってもいいんだけど……。ここは悠久さんに任せておこう、僕は椎奈ちゃんに当たるとするか。応援しているよ、憶良。『兄さん』はいつでも憶良の味方だからね……。」

十月二十四日 ハロウィンまで残り七日

貴之家訓練場

「そこで、魔術を使え。……。変換して減少、そっちの攻撃は魔術で防げ。……。遅い、もっと早く動け。十二時、三時、六時、九時の順で火の性質の魔術で術式を描け、……。そういうことだ」

貴之は黒鬼“二体”を使い、ルリカを特訓していた。

どういふ事情があろうとも、綾城を倒すには力がある。そして稀有な魔力変換効率を持つこの少女がいれば心強いこと間違いないだ

った。

ルリカの成長は著しく、“爆発的に”伸びていき、今では約八百の魔術を行使し、四つまで同時に魔術を発動できるようになった。現在貴之の黒鬼は二百倍引きで訓練を行っている。そのラインまでルリカが達したことを表す。

「ふう、貴之君終わりにしよう。宿題が残っているであろう、学校は大切だぞ」

「分かってる。それより今日はなんだか動きが鈍かったな。生理でも罹ったか？」

「そうだな、そうかもしれない。なあ貴之君、私達もう二週間も同じ屋根の下で暮らしているのだぞ。そろそろ一回ぐらいいいではないのか？」

「殴るぞお前。それよりさっさと後始末しろ。遂に明後日から動き出すぞ、お前は学校行かなくていいんだから、片付けでもしてろ」

貴之は黒鬼を解消し、上層への階段へ向かって歩いていった。それを瓦礫をせっせかせっせか運んでいるルリカはむっとした表情で眺め、手にしていた瓦礫を貴之に投げつけた。

瓦礫は五キロくらいあるがそれをいともたやすく投げつける。

貴之はひよいと躲すと、ルリカを黒鬼でぶん殴った。そしてルリカは壁に叩きつけられ、目を渦巻きにしている。

貴之は後ろを振り向かず上層へ上がっていった。

同日

A 高校

貴之はきちんと学校に通っている。それは生徒としては普通のことなのだが、魔術師となると少々異質でもあった。貴之は宿題などをきちんとやるように、ルリカから教え込まれた（しなかったらキスすると脅されて）。それにより、テストも受けルリカと同率の五百点満点の一位を継続して獲っている。名前がコンプレックスの生徒会の大宮はルリカに次いで二位だったが、「どこからともなく現れたキノオクラという奴に二位を獲られてしまったああああ！」と教師に向かって叫び、ついでに「教員共これは真実なのか、きちんと採点しやがれ！」と情に任せて言ってしまう、現在生徒会活動を禁じられている。

閑話休題。

十月に入ってから、彩乃が姿を見せなくなった。貴之はすぐに魔術関連だということに気がついたが、『魔法』関連だということには気がつけなかった。

長期に渡る休学願い・・・校長の方は、少々訝しげな態度を取ったらしいが、理事会がOKを出し、彩乃は現在『ちよつと早めのインフルエンザが一ヶ月罹っている』ということになっているらしい。どう考えてもおおかしな休学理由だが、「彩乃ならあり得るね」「彩乃ならたぶん男ともめ事起こしたんだよ」「揉め事？ まあ、厭らしい彩乃ならあり得るか」「それ違うね？」などとクラスメイトの間では取り扱われているらしい。

貴之は今日も又、学校の屋上で昼寝をしていた。

初めの出会いは、ここで説教を受けたことから始まった。

と回想シーンを頭の中で描いていくうちにふとした疑問が拳がった。

「俺はなぜ、『一般人であるはずのルリカ如きに話をしたんだ?』」
貴之は思う。

過去、つまり自分のことはかなり嚴重な鉄壁で守っていたはずだ。それがなぜ、『一般人』に話した? “完璧の魔女”と称されていたから? ……なぜだ。

貴之の中の『何か』がうねりを上げ始めた瞬間だった。

十月二十六日

貴之家出発後 樹海

ついに当日を迎えた。

今日は、まだトラップを張りにいくことにしかなさない。

本当の戦争は明日、十月二十七日午前四時に奇襲をかける予定だ。貴之とルリカは揃って並んで歩いていた。徒歩というのは本当に徒歩で、魔術式で高速移動している訳では無い。となると、必然的に綾城家が、「歩いて行ける距離」だということを表す。

そこには、色々な事情がある。

「ルリカ、もう疲れた。憶良君、私、喉が渴いちゃった。憶良君が今飲んだ水筒でいいから、一口くれない? ルリカもう、我慢できないよ!」

「……………」

貴之は飲んでいた水筒から口を離すと、ルリカの表情を見て、そ

のお茶をぶっかけた。ルリカはしばらく固まったままで、無表情で貴之を見つめると・・・

「貴之君何をする！ そんなにすけすけに興味があるのか、貴之君は！？ 馬鹿じゃ無いのか！？ 私のこの綺麗な黒の着物がべちいべちいじゃないか」

「お前が気持ち悪い言い方するからだよ。一人称を『ルリカ』にするな、気持ち悪い。あと俺のことを下の名前で呼ぶな、寒気がして卒倒しそうになる。最後のその着物はお前のじゃない、愛歌のものだ、大切に扱え、変態無表情野郎が」

「変態無表情とは些か伝わりにくい言葉ではないか？ いっそのこと、『変態魔女』とかの方がスマートに決まると思わないか？」

「それだと、『無表情』だということが伝わらなくなる。芝居する時だけ一丁前に頬を赤くしたり、呆気にとられたり、変な表情しやがるんだから、そっちの方が変態らしくていいだろ」

「確かに変態無表情の方が、的を得ているな。しかし、漢字が五つも連なっているのはなんだか呼びづらいと思わないか？ それなら英語変換して、a sexual pervert でどうだろう？」

貴之は空になった水筒にある液体をルリカに見えないようにそっとな入れると、ルリカに水筒を手渡した。それをルリカは受け取り、逆さにして水が出てこないか試してみる。すると、中から貴之が入れた液体が出てきた。

貴之はこう言う。

「英語バージョンか・・・悪くはないが中々変態だということを率

直に伝えられないな。それでは意味が無い、“完璧の魔女”の名を廃するぐらいまで著名な人物の名として『変態』が用いられる訳だからユニーク且つ、わかりやすい変態の名前で無ければならない。・
・ああ、言い忘れてた。その液体、水酸化ナトリウムだから」

「ブツーーーーー！ 馬鹿か、貴之君は！ 馬鹿なのか!？」

ルリカはぺっぺつと傍目を気にせずに吐き続ける。それもそのはず、水酸化ナトリウムとは人体の皮膚を溶かす作用がある。それを飲めばもちろん口内の皮膚は爛れることになる。

しかし、ルリカに異常は見られず・・・

「貴之君！ 私がいくら『河豚の毒』を飲んでも死ななかつたとは言え、やり過ぎだぞ！」

「おいおい、『河豚の毒』って確か、テトロドトキシンって毒素があるんじゃないかっただけ？」

「その通りだ貴之君。私はその言葉通り、テトロドトキシンだけを抽出した河豚毒、クサフグと呼ばれる河豚の毒を500mcc飲んだのだがな、案外たいしたことなくて下痢にすらならなかった。青酸カリの二百倍はあるはずなんだがな」

貴之はここで「毒殺は無理か」と思い至ったという。

「で、なんの話だったけ？・・・というか服乾かしたい。脱いでいいか？」

「好きにしる」

「つまらんぞ貴之君。男の子なら『それは、それは・・・お願いします!』と葛藤の末に欲望に負けると言うお決まりのサービスシーンを、みすみす逃すことになるのだぞ? 素直になればいいのに、貴之憶良。本当は私に興味津々のくせにい〜」

右手を口に添えて、なんとも厭らしく言うルリカ。

「・・・・・・・・」

貴之は近くにあつた小石を拾うと、ルリカを手招きして「ちょっと来て見る」と真剣味の増した声でルリカを呼ぶ。ルリカは何事かと駆け寄った。

貴之は石を右手で持って、「これは・・・」と言うと、ルリカも顔を近づけてくる。

その時反対の手で持っていた紙をルリカの額に押しつけた。そしてこう言う。

「つつかまえた」

「? なんだか可愛らしい言葉だな、貴之君。全く似合っていないぞ、というか気持ちい」

すると、ルリカの額から『黒』が発生し、ルリカの身体を包み込んだ。その『黒』は球体の形をしており、ふわふわと浮いている。

「気持ちいい? やっぱ変態じゃねえか。今その中でお前の魔力がぐつちやくちやくにかき混ぜられているはずだが? 身体ンなか弄くり回されてる気分だろ? 無重力の中でな」

貴之は黒の球体の中にいるルリカにそう言った。

すると、返答とは筋違いな答え（？）が返って来た。

「おおおおおおお！　そこそこ。うん、いいねえ。もうちょつとそこ刺激してみようか。腰いいねえ。効くうううううう！　肩とかも最高だね。・・・うん？　貴之君何か言ったか？　というかこの『マツサージの術式』凄くいいなあ。なんだよ、貴之君。私にサービスするなら先に言えよ。この照れ屋さん」

「・・・」

やむを得ず、貴之は術を解いた。すると、黒が霧散しルリカが中から出てきた。その表情は晴れやかだった（無表情の中で）。

「う~~~~ん！　最高だったな・・・うっ・・・おえ~~~~」

ここに来ての魔術が発動した。

ルリカは吐きこしなかったが「う~~~~ん・・・」と「う~~~~ん」の違いで言いながら、地面に四つん這いになって気分を落ち着けていた。

その四つん這いになって頂垂れているルリカを貴之は後ろから蹴り倒す。

「きゃっ！　ごめんなさい悪気はなかったの。許して、これ以上暴力を振るわないで！　私が悪かったわ。どうか、どうか、この身体で・・・」

「・・・一閃」

「うぎゃ・・・ゲッホ、ゲホゲホ・・・貴之君、流石に秘孔突きは効果がばつぐんだぞ」

貴之は気分の悪さと今し方の秘孔突きで心身がぼろぼろになったルリカを見て、「この醜い変態女が」と小さく言い捨てる。

貴之は進むべき道へ振り返ると、地面に這いつくばっているルリカを置いて先へ進んでいく。ルリカはそれに気づき、さつと今までが嘘のような勢いで立ち上がると貴之の背をてこてこ追いかけた。

「・・・今日はやけに変態度が高いな」

貴之は追いついたルリカを振り返らずにそう言う。

「それはそうだろう、だって今日は戦争の数日前、仕込みを行う日だぞ？　言わば前哨戦だ。それに張り切らずしてどうしようか」

「張り切るところがおかしいだろうか」

「それは、この絵面をってみろ、一目瞭然じゃないか。もし、私達の戦記を見てくれる健全なる青少年達が無表情で無口なこの移動シーンを喜んで見てくれるだろうか？　否、そんなことはありえない。だからこうして張り切っているのだろうか」

「俺たちのことを誰が見てるてんだよ」

「それは・・・ちょっと回り道をするぞ。もし、私達が魔業界の頂きに立つ綾城一族を滅ぼしたらそれは間違いなく語り続けられ、語り綴られるだろ？　そのストーリーの主人公で美少女の珠飾ルリカとルリカ様の忠実なる下僕の貴之憶良がつまらない時間なんて作っちゃいけないだよ。おわかり？　美少女と下僕のその大いなるストーリーを見てくれるであろう健全なる青少年達が見てくれると仮定して私はサービスシーンを下僕の貴之君にしてやってるのだぞ？

・・・というか『本当は私のキャラじゃない』のだ。それを我慢してやっているのだ。こんな小つ恥ずかしいことをさっさと止めて、専属のキャラに託したいのだから」

なんとも嫌そうな顔をして大仰に「大変だぜ」というポーズを取るルリカ。

「色々語ったが、それどう考えても鑑みても健全な青少年が見てくれないだろ。見てくれるであろう奴らは『魔術という暗黒史に嵌まって』『表沙汰にはできない』『殺意に満ちた』『日陰者』だろ？ そいつらしか見てくれないような気がするのは俺の気のせいだろうか」

「私もそう思う」

あっさりと自分が言った言葉を否定し、貴之に向き直る。貴之は「本当にこいつは俺の言うことを真に受ける奴だな」と思っていたが、「ちっ」と小さく舌打ちが聞こえて来たのでその意見を改変することにした。

ルリカは歩いている足下にあつた小石を蹴つ飛ばす。そして退屈を紛らわせるためか、貴之に綾城家までどのくらいか訊いてみた。すると、貴之はこう答えた。

「10分」

ルリカは初め「100分」と聞き間違えたかと思ったがどうも本当に「10分」らしく、貴之は「もうすぐだ」と言った。

「ふん、意外と綾城家と近いんだな」

「もともと綾城家は貴之家の私有地の中に家を建てたんだよ。それは、貴之家と綾城家の両家が昔魔業界において同盟を結んでいたことが深く関わっている。貴之家は綾城と同盟を結び、魔業界において最高権力を手に入れた。元々魔業界で最強の名を誇っていたのは我が貴之家だ。綾城が力を付け始めたのが俺が生まれる四年前。兄さんが三歳の頃からだ」

ルリカは手持ちの術式が書かれている紙を確認する。正しく術式が描かれていないと術を発動することはできないからだ。

「綾城は貴之の戦力、権力に肖り魔業界での地位確立を狙った。そして、綾城は貴之と対等な条件の下同盟を結んだ。そこで計略結婚を行ったわけだ」

「許嫁ってやつか」

「そうだ。その道具として利用されたのが」

俺だ。

貴之は一瞬間を置いてから、そう言う。

ルリカは一瞬確認作業を止めたが、すぐにまた確認作業を再開する。

「ふん。で、結婚相手が綾城椎奈って訳か？」

「その通り。結婚年齢は二十歳。成人式同日に婚約を済ませる予定になっていたらしい。ああ、それを聞いたのが六歳の時だ。『この子と結婚するんだよ』ってな。椎奈は昔貴之本家によく遊びに来ていてな、兄さんと俺、そして椎奈の三人で遊んでいたものだよ。愛

歌と知り合っただのが十三の時だ。一族を滅ぼされた俺はただ闇雲に樹海の中を歩いていて。そしたら・・・」

「愛歌と出会ったと？」

「いや、出会ったのは別の女の子だった。その子は俺に・・・ああ、そうか。俺の初めての友達お前じゃなかったわ」

ルリカは術式の確認作業をすぐに中断し、貴之に向かって異見を述べる。

「おい貴之君、巫山戯たことをぬかすな。貴之君に友達ができる訳なからうが。貴之君のファーストフレンドはこの私だよ！ 貴之君は友達の出来ない寂しい人生を過ごしてきたのに、自分の都合のいいように記憶を改竄するな！」

貴之は間髪いれずにルリカの頭を殴った。ルリカは頭を押さえて、地面にしゃがみ込む。その時、「貴之君の馬鹿。貴之君の馬鹿・・・」と小声が聞こえてきたような気がしたが、貴之はスルーした。

「俺がその女の子に出会った時言われたのが『友達になろう』って言葉だった。優しい笑みで俺にそう言ってきたよ・・・お前とは大違いだ。俺はその子と『友達になる約束』をした訳だが、その子とその日以来出会うことはなかった。数日後、俺が初心家に預けられて適当に借りたベッドで寝ていると、違う女の子が部屋に入ってきていきなり俺に抱きついてきた。・・・そう、それが初心愛歌だ」

「そこで愛歌ちゃんって野郎に、心配された貴之少年は心を奪われ、

後々には身体も奪われた訳だ。実に尻軽男だな、貴之君は。友達として少々女つたらしを咎める必要があるそうだ」

「お前に説法される気はさらさらねえけどな。そこから俺と愛歌の素晴らしい青春時代が幕を開けた訳だ」

「きもつ！ 真顔でそんなこと言える人間、ルリカ初めてみたあゝ（<―>）」

貴之は再び同じところを殴った。今度は「貴之君の女つたらし。貴之君の変態DS・・・」などと聞こえて来たので、気のせいかもしれないがもう一発ルリカを殴ることにした。ルリカは「頭が壊れるわ！」と抗議したが貴之は全く取り合わなかった。

「で、その素晴らしき俺の時代をむっちゃくちやに壊しやがったお前はきちんと殺すから、何も心配しなくていいぞ」

「何を心配するのだ？ 結局、馬鹿な愛歌と一緒に冥土から私の素晴らしき世界征服を眺めて、『すごいなあゝ、俺あんな奴に喧嘩売っちゃまったのか』と二人仲良く頂垂れていることになるのだぞ？ ここに何を心配する要素が含まれている？」

1 - (5) ルリカのキャラ（後書き）

お読み頂きありがとうございます。さてはて、「ちよっと読んでみて？」と知り合いに勧めたところ、「序章意味分からん」と言われました。自分としては、半ば計画通りで、半ばごめんなさいです。この作品は胃もたれしそうなものとなっているはずです。ですから、スツキリと第一章の終わりで片をしっかりつけるつもりです。皆さんが今まで読んだ作品を侮辱するような、「そんなことしますか？」と言いたくなるようなラストを用意しております。ここでやってほしくないのは、序章のなぞを真剣に考えることです。絶対に止めてください。・・・後々悲しくなりますから。

綾城敷地内

二人が軽めの牽制を行っていると、遂に綾城の“街”が姿を現した。周りは高い城壁に囲まれている。貴之とルリカは城壁の二十メートル程外側で足を止める。

「で、ここから一步でも近づけば感知される訳だな？」

「ああ、城壁から十八メートルまでが、『魔力探知』。城壁から五十メートルまでが『温感探知』だ。すでに俺たちは『温感探知』のレーダーの中に足を踏み入れている」

「だったな。で、このステレスの術式はいつまで持つのだ？」

ルリカは自分の着物の袖に入っている紙を取り出し、ぴらぴらと貴之に見せる。そこには意味の分からない文字が歪な形を描きながら並んでいる。

「基本破れないまでずっとだ。お前の魔力変換効率の邪魔にもならないように細工してある。それは綾城の術式を完璧に理解してないと作れない術式だから無くすなよ？俺でも作るのに三十分はかかるんだからな」

「たったこれだけの絵柄でか？貴之君、美術の練習をたくさんすることをおすすめするよ」

「阿呆が。その紙には見えないが、実際は『紙』から作らないといけねえんだよ。材料も全て調達しなければいけねえし、何よりやる気が削がれる」

ルリカは紙を袖の下に入れ、別の紙を取り出す。それは今から実行する『トラップ』の術式であり、この前哨戦において最も重要な紙だった。

ルリカは地面にしゃがみ込み、紙を地面に置く。

「さ、て、と、貴之君始めようか」

「そうだな。じゃあ俺はそろそろ行く。何かあったらこの『トランシーバー』で連絡を入れる」

「イエッサー！・・・って魔水晶が使えるのは本当に面倒くさいな」

「仕方ねえだろ、ここで魔力を垂れ流しにして傍受されちゃ意味がねえんだから」

魔水晶とは空気や光の振動を魔力に変換し、特定の周波数を発している魔力に伝わるという通信機器だ。しかし、現実の盗聴動揺に、その魔力の周波数を測定し、傍受並びに妨害することができる。感度、鮮明度、更には映像まで送ることができる便利な道具だが戦場での需要は前述のことがあるためにあまり多くない。

貴之はそうルリカに言うと、ゆっくりと『十八メートル圏内』に歩いていった。しかし、それは直線とも曲線とも言い難い、言うならば酔っ払いのような足取りで城壁に近づいていく。

「貴之君大丈夫かー！」

「話かけんな・・・って、うん？」

「どうかしたのかー！」

貴之は突然立ち止まり、ルリカの方に身体を向けないまま、ルリカにこう言った。

「感知が作動していない・・・」

「ナンダツテエー」

ルリカはかたこと口調で貴之に答える。

「いちいちむかつくなお前は。・・・それより、作動していないとはどういうことだ？　おい、お前なんかやったかー？」

「私がやったのは、貴之君の注意力が散漫するように微塵も心に思っていない黄色い声援を贈り続けたことだけだぞ。・・・まあ、おもしろくなるように十八メーター圏内に小石を転がしてみたり、足だけ入れてみたりしてたけど」

「お前の初期設定が早くも崩れそうだよ」

「いやいや、だから何度も言うように、私のキャラは学校では質実剛健天衣無縫天下無敵才色兼備の誠実な生徒会長だが、貴之君と二人ってか学校出たらこっちのキャラだな。道中に述べたとおり、この無表情をなんとかカバーしないとイケないからな」

ルリカは貴之の反応に少々疑問を抱いたが、追求はしないことにした。そうこうルリカが考えているうちに貴之からその疑問を解消するキーパーソンを得られた。

「どの道見つかる可能性の方が高かったんだ、これは仕方ねえよ。トラップはもういいか、結局明日には戦争だったんだ全部終わらせるぞ」

「トラップって仕掛ける時に見つかって良いものだったのか？」

「ああ、トラップは仕掛けたらお前を囿にして俺が一旦逃げて」

「酷いな。まあ、後々助けて」

「お前ごと焼き払うつもりだったからな」

ルリカは沈黙という名で反論と傷心を表し、貴之に思いっきり抱きついた。

「やだやだやだやだやだ！ 捨てないで、私を」

「倒置法使ってもさして心に響かな。まあいい行くぞ。そろそろ」

「シリアスパートだ。」

ウィザウトはここむじま智島に来ていた。小笠原諸島の一つの島で、人口は約二十五名、初寝村という集落が存在する島だ。

なぜわざわざここまで辺鄙なところへ赴いたのか・・・綾城諜報部及び暗号解読部の進展により、『赤き道』を解読したところにあった。『赤き道』即ち『赤道』ではないかという推測がついたのだ。毎回この謎解きは何かを何かに例えた比喻表現が多くある。その観点からの推測でそこに行き着いた。

赤道というキーが一つ判明すれば、続けて判明するのが『黒き道』。当初『黒き道』とは夜や暗闇、又は地下、魔道に関する名目で進められていたが、赤道が判明した時、『黒き道』は『経線』ではないかと話が持ち上がった。

経線、地球を百八十度で東西に分け、一本の間隔が地球上で十五度の尺度を表す線。しかし、これが分かっただけでは『どの経線』かが分からない。すると、残っているワードが意味を示す。

汝、日が落ちて、日が昇り、

汝、日が昇り、日が落ちて

これらは『日付』を表す言葉であることが分かる。そしてこれが『経線』を示したものだとなると、地球上で日付を表す経線、即ち『日付変更線』ということが察せられる。

まだ、決定的な根拠はないがだいたいの全体像を浮かび上がらせることに変わりなかった。

しかし、『魔法』である。『夢を叶える』というもの・・・。そう簡単に手がかりが掴めたとしたらそれこそ夢のようである。故、ウィザウト一同を含め努々（ゆめゆめ）分かったなどと思うものはなかった。

それでも進展には変わらない。ウィザウトは進んで進言し、この調査に名乗りを上げた。

ウィザウトはすっかり秋染まった日本の真東にあるこの島を見て、日本とは別の国だなど思っていた。秋景色ならぬ温带景色に四季の特色は薄く、足下の草木がぎりぎり色づいているだけで、殆ど秋を見受けられなかった。

ウィザウトは起伏した丘を歩きながら集落を探していた。聞き込み調査も必要なものである。

そんな折、背後に気配を感じた。

(一人か・・・?)

そう人数審査をしていると背後の人物は姿を現した。

男は見えて分かる彼の如く中国の衣服を纏っていた。身長は高く、百九十はあるのではないかとウィザウトは見定めた。

すると、名知らぬ男は徐に口を開いた。

「貴公が『魔法使い』のウィザウトか？ 英国武士の異名を取る男か？」

「・・・人違いじゃありませんか？」

「日本語を話すイギリス人を見たことがなにのだから。それにその脇差し、噂に聞く刀匠、武者小路千羽むしやのちうじの一本ではないか？」

ウィザウトは自分の脇差しをちらりと見て男に向き直った。

そして、背後から迫ってきたくないを脇差しで打ち落とした。

「見事」

「いきなり先制攻撃とは、“貴殿等”は礼儀がなっていないようだな」

「そうでもないさ、今の攻撃が喰らっていたなら私は素直に引いたさ。だがしかし・・・」

ゆつくりと男は自分の刀を抜いていく。それは綺麗な曲線を描いた刀だった。

「魔法使いとあっては、やるしかなかるう」

男は極限の早さでウィザウトとの距離を詰めた。男の刀がウィザウトの首を狙う。ウィザウトは抜刀しながらその刀を“日本刀”で防ぐ。甲高い金属音が閑散した島に響く。

ウィザウトはそのまま刀を押し切り、男をはしぎ飛ばす。男はそのまま押し切られ、後方に飛び距離を取る。

「見事。まさか、初段を受け止められるとは、思っていなかった。最高速に強化魔術を施したのだから」

「いや、なかなか良かったよ。『貴殿よりも遅くなった』自分に戸惑ったからな」

「いやはや、見事としか言いようがありませんな。最高速を発する魔術、そして刀の強化魔術、最後に時を操る魔術まで発つしたのがな。全て破られるとは」

「・・・ところで貴殿は、本丸ではないな」

ウイザウトは男を見ながら刀を下ろし、そのまま納刀する。男はしばし黙ったあと、口を開く。

「属しているところが分かったのか」

「ああ、中国のグループ『最天』だろうとな。確かあそこのトップは真天津、そして今現在の戦闘及び指揮は『王水』が取っているはずのところだろ」

ウイザウトの口調が崩れていく。

「左様。隠していても致し方ないであろうしな。では、そろそろ」

男が喋っている途中に、くないが大量にウイザウトに向かって飛ぶ。ウイザウトはちらりとくないを見た後で姿を消した。

それは、消したというより動いたと表記した方が正しいのだが、実際男にはウイザウトが消えたようにしか見えなかった。

気がつくとも男は空を見ていた。背中が地面についているのが分かる。何があったのか、どうなったのか全く分からない。ただ分かっているのは自分が負けたであろうという抽象的な言葉だけだった。

近くにまだ、ウイザウトがいる気配がする。男は声を出す。意外にすんなりと乱れることなく声がでたことに少々驚きを感じた。

「何をした？」

「お前の全身の『神経』を断った、ただそれだけだ」

「私が結界魔術を仕掛けていたのは分かっていただろ？ その圏内

に入ればどれだけ早かろうが速かろうが動きは一秒の十分の一に軽減されるようになっていく。その速度なら躲せなくても感ずることができる。それが全くなかった……」

「俺の通り名知ってるか？」

ウィザウトは納刀しながら男にそう言った。

「英国武士……」

「違うもう一つの呼び名、『ルール・ウィザウト』の方だ。もちろんこれは本名じゃない。ウィザウト・意味は『くなしで』って意味だ。そう、俺の名を直訳すると」

規制無用。

「俺に魔術の『領域』は意味を持たない。結界であろうが、魔術であろうが全て『無用』となる。そして、お前を切断した『風』のスキル。これが俺の戦闘だ」

これだけのスキルじゃないけどな。

ウィザウトは男に背を向けたまま一つ訊いた。

「本丸はどこだ？」

「あつちの隠れていた奴もやったのか？ ……ふっ、俺の仲間なんだがな」

「ああ、『お前より先に』始末した。……はぐらかすな、本体は

「どこだ？」

「言えないな」

「そうか、じゃあいい」

ウィザウトは本当にどうでもよさげな態度で男を残して集落を探しに歩いて行く。

彼にとってこれは戦闘では無い。こんなものはただの事故に過ぎない。名を知らない男の行為は足止めにはすらならない程の些事。

規制無用にとっては下らない規制だった。

媒島

「ここどこだあああああ！」

綾城彩乃あやぎあやのはここ媒島まゐしまに来ていた。

姉の椎奈が「彩乃魔法の調査お願いね」と頼まれて「いいよ」と軽い返事をしてしまったところ訳の分からない島に辿り着いた。

今やどっちが北でどっちが南かも分からない。というか、ジャングルにいた。

「ってかお姉ちゃんこの島のことなんて言ってたっけ？ 媒体の媒に島で……バイジマ？ もういいやバイジマで」

この島は媒島まゐしま、バイジマと書いて媒島まゐしまと呼ぶ。諸説は多々ある。詳しくはヤホーって欲しい。

彩乃は迷い込んだ森の中をあっち行ったりこっち行ったり、奔放自由に歩き回っていた。森は昼間だが薄暗く、訪れる人間を拒むようだった。

「怖いよ~~~~。ってお姉ちゃん飛ばすのはいいけど、場所とどんなところなのかしつかり教えて欲しいの」

彩乃はここ媒島に自足で来た訳ではない。椎奈の魔術によって“飛ばされた”ことでここに来ていた。

彩乃は赤道を目指すためになぜこんな辺鄙なところへ飛ばしたのか疑問に思っていた。むしろ魔法うんぬんは抜きにして、厄介払いされたような気がしてならなかった。

そんな疑問と別種の不安を覚えながらふらふらしていると、後方より凜々しい男の声が聞こえて来た。

「お嬢さん、道に迷っているのかい？」

彩乃は振り返り、男の顔をまずチェックし、続いて衣服に着目して男を見定めた。

(うん！ いい男！)

彩乃は中国系の衣服だったことに少々の違和感を抱いたが、いい男ならば何を着ていようと気にすることはない。

「はい！ 迷ってます。できればその腕に抱かれて海辺にでも連れて行ってくれると有り難いのですが」

「・・・元気がいいお嬢さんだ。ところで、それは制服かい？ こんなところでは着るような服ではないように思えるが」

「ああ、これは・・・私制服が大好きなので。巷では結構制服を私服代わりに着る女の子が増えているんですよ。私もその流行の端くれ者です」

彩乃は少々照れながら、“いい男”に対して制服を着ている意図を話す。森の中だと言うのに彩乃丈の短いスカートを穿くことがどれほど無鉄砲なことなのか彩乃自身分かっているので、恥ずかしさを隠すように身体を捻る。

(こういう仕草って結構効果あるだよね　　恥を隠す女子！ 照れ隠し乙！・・・みたいなやつ)

「あのう、あなた様のお名前はなんですか？」

「私かい？ 私は・・・シャオメイというよ」

「シャオメイさん・・・在日中国人の方ですか？」

「まあ、そんなところだよ」

シャオメイと名乗った男は柔和な笑みを浮かべて彩乃の問いに答える。

「ところで、あなたのお名前は？」

「私ですか？ 私は綾城彩乃と言います」

彩乃がそう答えようとすると、突然男が動き出した。そしてその刹那、彩乃は男の小刀によって刺された。

彩乃は突然の所為に動けなかった。ただ掠れた声で紡がれた言葉は、

「どうし、て・・・」

だった。

それに対し、男は凜々しい顔を引き締めてこう答える。

「綾城彩乃・・・『魔法使い』だな。内容はもちろん『魔法使いの権利剥奪』だ。・・・魔法使い、それは『魔法に選ばれること』で成ることが出来る。選ばれる条件は不明だが、簡単に考えれば、魔法を使えるだけの実力者ということになる。だったら、現魔法使いを殺すことが一番手っ取り早いだろうという考えに行き着く」

「それで、私を・・・」

シャオメイは刀をぐるりと回す。それにより彩乃は短い悲鳴を上げ、そして“溶けた”。そして王水の後方の茂みからゆっくりと本体が出てくる。

「!!!・・・気づいていたのか」

「こんなところに在日中国人がいるとは思えませんからね。それにシャオメイなんて名前は偽名でしょ？　あなたは確か、『最天』の実質的なリーダーの王水でしょ？」

「・・・ご名答。そこまで分かっていたとはな。もう余談もいらないだろう、さっさと殺し合いを始めよう」

「殺し合いって、一体十五つて反則じゃありませんかねえ」

彩乃は後方にちらりと目をやる。それは「十五人も控えていることが分かってるぞ」と王水に宣言することでもあった。

王水は黙って見ていたが、宣告もなく彩乃に襲いかかる。

走り出したと同時に背に掛けていた刀を抜く。その刀は綺麗な曲線を描いていた。刃渡りは大きく、先端になると幅が三十センチ近くある。それを彩乃に向かって突き出す。

彩乃はそれを躲すことができないので、防御術式を展開し受け止める。それを発動させるのに紙も何も無かった。

王水はそれをみて、一旦距離を取る。そして彩乃に問いかける。

「それが、魔法使いのオプションの『術式なしで魔術を発動することができる』権利か。とても便利だなそれは」

「ええまあ、楽ですからねこのスキルを持ち合わせていると。．．．
つと、代償（クリスタルの守護^{カーテン}）」

彩乃はそう最後に呟きながら答える。そして、廃工場で見せた透明な液体のベールをかぶる。

王水はそれを見て、どのような魔術が分析していく。傍目は透明な液体．．．

（水を利用した能力か？）

王水はそればっかりを気にしては勝負にならないので、攻撃を与えながら探っていく方針に決めた。王水は自分の刀の柄を撫でる。すると刀は彩乃とは対照的にドスのきいた濃い色の紫を帯びていく。

彩乃はそれを見て、訝しげな表情を取ると、「なんかグロい」と呟くと王水と正対した。

王水は切り先を彩乃に向け、こう言った。

「今から貴様には死を授ける。我が刀身と我が魔術に溺れよ」

1 - (6) 規制無用(後書き)

お読み頂き有難うございます。「活動報告」の方に載せさせて頂きました。少々この中身を変えていこうと思っっています。見て頂ければ分かるのですが、「この作品むずすぎね? あといみわかんね」という結論ができて、それで……。しかしながら、こっちの本編はどんどん進んでいきます。前話でも書きましたが、絶対に推理とかしないでください。この「第一章」は全て起承転結の「起」です。すからなぞはほとんど関係ありません。それも第一章のラストで明かすつもりなので待っていてください。では。

1 - (7) 乱心

媒島

彩乃は王水に向けられた切りさきを見つめながら王水が仕掛けて来るであろう攻撃を予測し、頭の中でイメージしていた。

「いざ尋常に参らん！」

王水は勢いよく切っ先を向けたまま彩乃に突っ込む。彩乃はそれを加減速魔術を用いて横に躲す。それを追いかけるように王水も彩乃が元いた位置からワンステップで方向転換し、彩乃に襲いかかる。彩乃はそれを予期していたかのように液体を王水に向かって透明な液体のカーテンから放つ。

「ぐっ……」

王水はそれを高速移動で躲し、一度呼吸を整える。

彩乃も勢いを押し殺すため、地面に手をつきながら距離を取る。

「やりますね」

「貴公もな。流石は魔法使いだ、そこらの魔術師より反応が早い。え、今の攻撃もかなり深手を負ってしまいそうなものだった」

「あなたもかなりの使い手……仕方ないか、私も本領を發揮しましょう」

彩乃はこれまでになかったような静かながら鬼気の籠もった声を放つ。そして、ゆっくりと目を閉じ、
くわっ！ と目を開いた瞬間！

逃げた。

これでもかと言おうか、天晴れと言おうか、美しいとでも形容するかの如く逃げ出した。

王水は彼らしくなく呆気にとられてしまった。しかし、ものの一瞬。彼はすぐに自我を取り戻し、部下に指示を出す。

「今すぐに追え！ この島から逃がすな！」

彩乃は加減速魔法を使い、時速八十キロで逃げていた。

「・・・別に戦ってもいいんだけどなあ、お姉ちゃんがるべく自然のものが無い場所で戦いなさい、って言ってたしなあ。まあ、私も植物破壊は断固反対派だけど、こんな時でもダメだって言ってたからなあ。ああ、なるべくなら戦わないこと！ っても言ってたっけ」

彩乃は鬱蒼とした森を走っていくと、森が終わるであろう光が見えてきたので、そこに飛び込んだ。

彩乃が出た場所は森を抜けた平地だった。丘陵とでも言うべきところだった。しかし、最初に映ってきたものは平地ではなく、王水だった。

「・・・速いですね」

「貴公が逃げるとは思いもしなかったが、まさかの事態のために先にルートは絞り込んでおいた。出てくるであろうルートに先回りしただけだ」

彩乃はもう逃走することを諦めた、否、“逃げる必要が無くなった”ので、立ち止まってゆっくりと深呼吸をした。

王水の背後には数多くのメンバーが控えている。そのどれ等も強者の風貌を現していた。

彩乃は一人ずつ相手取することは苦手としているので、“まとめて排除する”ことを決心した。

「はあゝめんどくさ。なんで私が戦わなくちゃいけないかなあ？

本当に環境に悪いんだって、私が戦うと・・・あの〴〵皆さんここは、ってかもう二度と私の前に出てこないでくれますう〜？」

「・・・世迷い言を」

「さいですか」

彩乃は大きく落胆するとゆっくりと身体を起こし、

「来いよ、雑魚。相手してあげるわ」

と言う。

それが皮切りとなって、王水は初めに見せた突きを構え突っ込んでいった。今回は後方にいた魔術軍団も魔術を一齐に唱え、王水を援護する。

「・・・モブキャラがなんで頑張るかなあ？ だから私はこういう場面が嫌いなよ。だって、こういうシーンって一人のスッゴイ強い奴がまとめて倒しちゃうしょうも無いシーンだからさ」

彩乃は攻撃を無視しながら攻撃を適当に見つめている。そしてそんな小言を呟いた後、後方から大量の透明な液体が溢れ出てきた。

それは“二十メートル”あった。

王水はその津波のように正面から迫ってくる津波を構わず突っ込んでいった。それは攻撃の力と魔術と相まってその液体を突き抜けるかと踏んでいたからだ。

そしてそれが間違이었다。

王水をサポートするように打ち込まれた魔術がその透明な津波に当たった瞬間に“溶けて”いつている。

王水は津波を突き進めることができた。

が、

そのまま津波に飲まれていった。

津波は王水を飲み込んだあと、そのまま後方の魔術軍団へと向かっていった。

「防御術式を張れ！」 「結界術式を張れる者は直ちに行え！」

と、いくつかの声が彩乃の耳にも届いた。津波で軍団の姿を目視することはできないが、防御魔術を立式し、展開しているのだらうと推測がついた。

「・・・無駄なのになあ」

彩乃はそう呟いて軍団とは別のあらぬ方向へと歩いていった。それはもう勝負が終わっていることを意味していた。

津波は防御術式を“溶かしながら”軍団モブキャラを飲み込んで

いった。

「これが強い奴の戦闘なんだよなあ、しょうもな・・・」

津波が進んだところの地面がクレーターのようになくなっていて・・・。

綾城

「貴之君やつとこさ私達のシーンだな。半ば無理矢理終わらせた気もするがそこは気にしないでおいてやろう」

「何言ってるんだおまえは」

「閑話休題。・・・貴之君シリアスシーンってこんなだったけ？」

「真剣味が多く合って、重要な場面を現す。そしてこれが・・・いや、これはシリアスシーンというかホラーだな」

「これが私達がやるうとしていたことなのだ。この目の前に映る現状が、状況が、心情が・・・。不快にはならんが、普通に気持ち悪いな」

貴之とルリカは城壁を壊し、内部へ入り込んでいた。

彼らが初めに見たものは招待されていたが如くの魔術師軍団、ではなかった。貴之とルリカが見ていたものは、

おびただ
夥しい数の死体だった。

死体、死体、死体、死体、死体……どこを見ても死体が転がっていた。外部の城下町が赤く染まり、物が破壊されていた。貴之の足下にも死体が転がっている。

ルリカは貴之の足下にある死体に顔を近づけ、においを嗅ぎ分析を始めた。

「ふむ、死体特有のにおいが薄いな、死後間もないことが窺える。それに心臓を一突き（？）されたようだな、的確に心臓部に穴が空いている。即死かな」

「その穴は奴の光の魔術だろう。奴の光を収束した光線を一闪と言ったところだろう。まあ、即死だと決めつけられんぞ。人間は心臓を無くなっても生き返ることもある。基本的に人間が死ぬのは、『脳波』が止まった時だ。ペースメーカーに近い人工心臓機器も創られているしな」

「ふうん、あつそ。まあいい、それよりも今後どうするかだ。このまま綾城のあの高い城目指して歩き出すか？」

貴之は今日に映っている状況と自分達の現状から得策を示唆する。その時にも映ってきたのは死体だった。

「……行こう。綾城総本家もとい綾城椎奈を討伐に向かう」

「あつそ」

ルリカは素っ気なく答えると、死体に数十秒黙想をすると、先に向かっていった貴之の背を追いかけた。その時にルリカは、家の隅

に隠れていた人々を見つけた。貴之に素早く報告する。

「貴之君、貴之君、あそこに人がいるぞ」

「人？ 敵か？」

「どうやらそんな感じはないぞ。むしろ私達に怯えているような感じだ。あつ、誰か出てきた」

貴之はルリカの言いながら見ている方向を自分も見ると、一人の男が隠れていた家から出てきたところだった。

男は汚れやほこりが大量がついた衣服を揺らしながら助けを乞うようにルリカの元へやって来た。男はルリカに縋るように場にしゃがみ込むと、こう言った。

「助けてくれ！ 椎奈様が、椎奈様が・・・私達を虐殺している！」

「！・・・どういうことだ？ 綾城椎奈はそんなことをする人間ではないぞ？」

貴之は男を睨むようにしてそう問うた。その訊き方をルリカは不快に思いながら貴之を見つめた。

「確かに・・・椎奈様は我々一人一人に優しく微笑んでくださってくれる、人の上に立つ御方としてはこの上なく優れた御方だ。しかし、現実、あの御方は『本家』の人間を根絶やしている。私達は本家の分家故、狙われる可能性も多くある。隙を見て逃げようと思っているのだが・・・城壁が」

「きっかけがあるのだろうか？ 例えば・・・」

「ああ、本家の人間が総本家に向かって反逆を始めた。・・・内容は分からないが、まほう？ についてのことらしい」

貴之はその男を見つめ、嘘ではないことを確かめると、ルリカを見て顎で指示を出した。

行くぞと。

ルリカは掻い付いている男に自分達が這入ってきた穴を教え、男に別れを告げた。

ルリカは貴之を追いかけて追いつくと、先程の言い方について訊いた。

「自分の一族を殺した女をやたらといい人風に言うんだな」

「ただ、椎奈ちゃ・・・綾城椎奈はそんなことをする人間ではないと言っているだけだ。十歳までのやつからはな」

「で、椎奈ちゃんは突然人が変わったかのように貴之家を滅ぼしたわけだ。・・・貴之君を除いて。前々から気になっていたんだが、どうして貴之君だけが生きてるのかねえ？」

貴之はルリカがわざと「椎奈ちゃん」と言ったことに苛立ちを覚えたが、完全に自分のミスなので仕方なく堪えることにした。

「もしかして、『私の最愛の人は殺せない！』とかメルヘン染みたことで殺さなかったとか？ 私ならこんなもやし根暗早々に躊躇いなく遠慮無く意気揚々と殺してやるけどなあ」

「お前は人を殺すという意味が分かっているのか？」

「分からないね。だって、殺したことないもん。私こそ問うよ、人を殺すことはどういうことなのだ？ 結局その人が人を殺めるには必ず理由がある。それは紛うこと無き『正義』なんだよ。誰がなんと言おうと、正義なんだ。だから、人殺しを咎めることは誰にもできない。それに、戦国時代は人を殺し、のし上がるこそこそが正義だったはずだ。かの有名な武将だって人を何十人も何百人も何千人も何万人も殺しているんだよ。それなのに現在の人々から尊敬と理解を得ているのだ。現在に当てはまらん訳がなかるうが」

ルリカの言っていることは正論だということをお貴之は理解していた。間違っていない。そう、正しい。でも・・・

正しすぎる。

どれだけ正しくてもどれだけ間違っているても要は多数決と風潮。どれだけ正しいかろうと大勢が言えばそれは悪になる。

貴之はルリカの正論を受けて尚、人を殺す人間は悪だとそう思った。そう思わなければこの戦いに意味が無くなってしまふからだ。過去に囚われてはいけけない。“優しかった椎奈”なんてものは存在しない。そう思った。そう思いたかった。

貴之はブルーなモードに入ったことをルリカに悟られないようにしながら、城を目指して歩いていた。ルリカは「すげーな」と言いながら、城中心部に向かって装飾が美しくなっていく町並みを眺めていた。すると、一人の男がルリカの視線に映った。

「おい貴之君、また人だぞ。なんだか戦闘モードに入っている奴」

「距離は？」

「正面から二時の方向」

貴之は一瞬足を止めて、『黒』を分散させる。そして、見えない

ところまで把握すると、再び歩き始めた。
すると、ルリカが言っていた男と鉢合わせした。

「何者だ？」

男はそう言うが、貴之とルリカは気にせず歩いていく。男はか
つとなつて貴之に向かって魔術を唱えようとした。が、それは叶わ
ずにバタリと前のめりに倒れた。

「貴之君、殺すんじゃないか？」

「人を殺人鬼に仕立て上げるな」

「貴之君が殲滅するって言ったんじゃないか？」

「・・・行くぞ」

ルリカはもうどうでもよくなったのか、別段追求はせずに貴之に
ついて行く。しかし、すぐに次の敵が現れた。

ルリカは「また来た」と貴之に進言するも、貴之は「分かっている」と素っ気なく返答したので、腹いせに魔術師と貴之の一直線上
に向かって魔術を放った。

貴之は前傾する形で後ろを見ずに回避すると、その魔術は貴之達
に気づいてもいない魔術師に当たった。そして、一撃で倒す。

「・・・貴之君つまらん」

「綾城城に近づくとつれて更に増えるぞ」

「面倒くさいな。ってかここ一番しょうも無いシーンじゃね？」

「キャラをここで崩すな。仕方ないだろ、こういうシーンだってある」

「誰だお前達!？」

貴之とルリカは立ち止まった。そして、珍しく二人の意見が合致したために美しいハーモニーを奏でる台詞となった。

「タイミングよすぎね?」

だった。

男は見た目で魔術師と分かる風貌をしていた。年齢は若く見え、二十代と言ったところか。身長はそれほど高くなく、百七十二達してはいないだろうと推測がつく。

男はすぐに戦闘モードに移行していた。その構えには隙が無く、戦闘慣れしているということを貴之とルリカは察した。

「我が名は」

「さつさと行くぞ、ルリカ」

「おい、貴之君、あやつが可哀想じゃ無いか。あそこはきちんとな乗らせて、『貴様はあの名高き……』みたいな感じで行かないとあやつのメンツ無いつて。そういうところを配慮しながら戦闘しないと駄目なんだって、貴之君。……すまないな、うちの貴之君が無愛想な態度を取って」

男はその巫山戯たやりとりを苛立ち、すぐさま立式し、魔術を発

動させる。

「貴様等が誰だかは知らんが、綾城のナンバーファイブ、綾城辰也の前にひれ伏させてやるわ！」

「なつ、貴之君。ああいう、なんだか、今から倒してやるぜ！ みたいなのりの中できちんと名前の説明入れて来ただろ？」

「確かに。今後は気をつけるとしよう。でも、大抵こう言う感じってモブキャラじゃねえか？」

「それを言うな、聞こえるだろ。・・・よし、私が相手になろう！ 貴様結構強そうだな！ って魔術もう発動してるし」

それは大規模な雷だった。四方八方からの波状攻撃。ルリカはその魔術を身体を高速で移動することで躲していた。そして、ルリカは辰也に向かって真っ直ぐに突き進んでいく。

辰也はその攻撃にカウンターとして彼の最速魔術を放つ。

「この高速魔術で貴様・・・」

その最速魔術をあつさりとルリカは躲すと、辰也の後方へ回り込み首元を突こうとした。

（無駄だ！ 俺の身体の周りには雷の鎧で直接攻撃を撃迎する・・・）

辰也は自信の鎧、『雷ノ鎧』という魔術を戦闘時に常時発動しているので、直接攻撃は喰らわないと踏んでいた。が、

魔力変換効率応用編パート1！

「あ・・・がっ・・・」

ルリカの突きが辰也の後頭部に突き刺さった。そして辰也はその一撃で意識を失い、前のめりに倒れていった。ルリカは辰也を見下ろしながらこう言った。

「ふむ。中々悪くない攻撃魔術だったな。関心するぞ、貴様はそこそこできる魔術師のようだな。この体験をバネに更に飛躍した魔術を期待しているぞ。ではな」

ルリカは自分の足下で寝ている男にそう上から目線で言うと、勝負など気にせず先に進んでいる貴之の背中を追いかけた。

綾城城城内

綾城真城は最上階、綾城椎奈の寝室の下層、管制塔の役割を果たす、指令室に来ていた。周りには誰もいない。

ここ指令室は壁に数々の電子機器が張り巡らされており、城内の重要なシステムに異常が来すとアラームが鳴ったり、知らせられるようになっていた。

真城が見つめていたのは城下町中層に設置されているカメラに写っている一組の男女だった。そして、真城はシステムを弄り魔力で動く探知結界を張る。

真城はそこで一息つくともう一方のカメラを見つめた。そこに映っているのは綾城椎奈だった。

“綾城本家の人間を殲滅している”綾城椎奈だった。
それを見つめ、薄く微笑むとカメラから目を離し、通信用の魔力
水晶に手を伸ばした。

「・・・聞こえるか？・・・そうか、現状は？・・・赤道と日
付変更線へのコンタクトは？・・・そうか。では、引き続き綾城
彩乃と英国武士はそこに留めておけ」

そこで真城は通信を切った。

(ことは順調だな。では、ストーリーを進めよう)

真城は計画を進めていく予定を立てていく。

それが、“誰かの計画”の手の平の上だったとしても。

1 - (7) 乱心(後書き)

お読み頂き有難うございました。

綾城

貴之とルリ力は綾城あやきじょう城間近に迫っていた。城へ近づく程に町並みが美しく荘厳な建物へと変わっていった。この一体には死体や破壊が無く、惨状を知らぬようにただ建っていた。

貴之とルリ力はまたもや魔術師と対峙していた。それらは真城によって、指示された軍団だった。

「貴之君、このパターンもう止めない？ 最初っからボス出てくれればいいのに、なんでわざわざ手下から攻めてきて最後にラスボスなのかねえ。グハハハ！ とか言ってるラスボス前にMP、HPぎりぎりになってるからな。ボスってほど強いのなら手下使わないで自分で攻めてこんかいっ！ と思うのは私だけだろうか？」

「あながち間違っではないない。でも考えて見ろ、漫画然り、小説然り、ゲーム然り・・・どれも手下から攻めてくる、それはな、物語を盛り上げるためなんだよ。悪しき風習だよな」

「それもそうか、確かにそれが無くなったら、『さあ、てめーの手下は全部倒した！ 後はお前だけだ！』 って言う台詞が廃止になるな。じゃあ、ここは漫画的には『さあ、行くぞ貴之君！ 私達の手を見せてやろう！』 ってところだな」

魔術師軍団はどこから湧いたのか、二十名近く貴之とルリ力に對峙している。そのどれもこれも、杖を装備している。

貴之はその軍団を一瞥すると、あらぬ方向へ歩き出した。そして、すかさずにルリカは止めに入る。

「待て待て貴之君！　ここは『一緒に戦おう！』シーンだろうが！？」

「いや、ここは『ここは私に任せろ、お前は先に行くんだ！』と言って戦いの果てに死ぬシーンだ。さっきの台詞なんて完璧なフラグじゃねーか」

「いや死なねーし。私は最低でも貴之君をぶっ殺すまで生きるつもりだ」

「じゃあ、頑張れ」

「仕方ないなあ。そこまで貴之君が泣き絶って敬って畏まるのならやってやらんこともないぞ。やってやるうではないか。さあ、行け！　貴之……ってもう行ってるし」

ルリカはため息を一つつくと、魔術師の人数を数え始めた。一人一人指を指して気怠そうに数えていく。

「モブイチ、モブニ、モブサン、モブシ……もう嫌だな数えるのも億劫だ。はあ、嫌だな。私も激しいシーン獲りたいな」

魔術師軍団の一斉攻撃が始まった。火、水、雷……十人十色、縦横無尽の攻撃がルリカを襲っていく。

ルリカは先程とは比べものにならないくらいしつかりと、胸を張ってその攻撃を見定める。そして魔術を発動させる。その魔術は展開していくと相手の魔術を包み込むように広がっていった。その魔

術は魔術範囲を絞らせるものだった。その標的は誰でもない自身。そのような能力の故、一点集中の攻撃がルリカを襲った。ルリカは一点に集中した魔術に向かって右手を突き出した。

「魔力変換効率応用編パート2」

相手の魔術はルリカの手に触れると吸い込まれるように無くなっていった。生まれたのは魔術師軍団の驚愕と遺憾だった。

ルリカは右手一つで全ての魔術を消し去った。すると、魔術師軍団の中から一つの声が上がった。

「吸収したのか!？」と。それに対し、ルリカは呟くように答えた。
「吸収じゃ無い、変換だ。今返そう」

ルリカの右手から、“見えなベクトル”が大量に吹き出す。そのベクトルは全ての魔術師を文字通り吹き飛ばした。後方にあった家や、何かの館など全てを吹き飛ばした。効力範囲は扇形に二十?を超える。

ルリカは右手をゆっくり下ろすと、自分が行った“破壊”を見て深いため息をついた。

「まだまだ、変換効率が足りんな」と。

ルリカが変換した魔力は約六十%。これではまだまだ綾城椎奈や貴之憶良には届かないと目分量で計算した。

足りない。貴之君を殺すには。

“貴之を殺す”ということ。それは初めての友達からの約束だった。初めての“約束”を破ることはルリカにはできなかった。だから、だからこそルリカは貴之を殺すために自身の力を高めていくことを誓った。

「って、貴之君どこ行ったんだ？ 貴之くくくん！」

ルリカはてくてこ歩いていく内にとんでも無いものに出会ってしまった。それは決して出会ってはならず、決して触れてはいけない存在だった。

対峙しただけで分かる。

天使が如き微笑みは全てを断罪する残酷な死刑台だということ。美しい純白のドレスは天神の象徴だということ。

その美しき美貌は人間を脱した天使だと言うことを。

貴之からは写真は見せられていない。だが、分かる。

目の前にいる女は、

『綾城椎奈』だと言うことを……。

太平洋遠洋

彩乃と豊穰粹美ほつじょうすいみは太平洋のどこかを小船で進んでいた。豊穰粹美は彩乃の執事兼、悪友兼、親友兼、つつこみ役だった。彼女は彩乃と同じ年で、彩乃が養子として綾城家に迎え入れられてからずっと世話を担当している。時には執事という概念を超えて、トランプをしたり、ゲームをしたり、恋バナを咲かせたりする仲である。

そんな二人は椎奈の指示で赤道を目指していた。しかし、彼女等は進んでも進んでも辿り着くことが出来なかった。出発した地点か

「スイミーちゃん、遊びましょ」

「あーあのちゃん、仕事代われや」

彩乃は憎たらしい笑顔を操縦室の上からのぞき込むようにして粹美を見た。粹美もにこつ、と晴れ晴れした笑顔を返すと、天井を思いつきり殴った。

「うわっ！ あぶなっ！ いきなり天井殴っちゃだめでしょスイミー。今のが重心を的確に捉えていたら私落ちてたよ？」

「いいじゃん別に」

「いけない子だな。また、あれかあれしちゃうぞ」

「や、やれるもんならやってみたら？」

「ふふふ、私のレステクニクを忘れたとは言わせないぜ！ あんなに・・・ねええ？ ねええ？ くつくつくつ、凄いことになったしねえ。私、『雷雲不運』から『百合挑戦』レスチャレンジに改名しようかしらんもう一個のあれの方が堪こたえたかなあ？」

粹美は恥ずかしそうに頬を真っ赤に染めると、もう一度天井を殴った。そして、彩乃の身体が前のめりになったところで腕を取って引きずり落とした。

どすると、船上に引きずり落とされる。

「痛った。って何すんのよ！」

粹美は頬を赤らめたまま、手に持ったスタンガンを彩乃に向けて

いた。バチバチと甲高い音が彩乃の目の前で響き渡り、彩乃はにやけ顔を引きつらせながら粹美に問うた。

「な、何それ？ 瞬間発電エコロジ―変換エネルギーダイナマイトクラッシュってやつ？」

「これはね彩乃ちゃん、スタンガンって言う不審者をぶつ殺すために使う必殺武器なんだよ。出力は弄れてね、50ボルトから50000ボルトまで調整できる優れものなのよ」

「幅広すぎね？」

彩乃は足だけで震えながら後退する。しかし、船の側面にぶつかってゴンと鈍い音がした。

「あれなんてやらないからそれは止めよう、ねっ？ それは悪者を倒すためのものであって、私を倒すためのものじゃないから」

「うっせーよ、海に落ちろ！」

粹美がそう叫ぶと、突然彩乃の後方から巨大な、蛇が現れた。全長は推定二十メートルはあるのではないかと窺える。青を象徴とした蛇だった。

「何！？」

「あなたの後ろに大きい蛇がいるわ。うんとね、でかいわ。もの凄くデカイ。とんでもなくデカイ。超絶デカイ。あつ、彩乃あの蛇倒してよ、今海に入れてあげるから」

彩乃は振り返り、その大きな蛇を見る。そして、「あー」と声を上げる。そしてゆっくり立ち上がり、呆然と見ているうちにそっと逃れようとする。しかし、粹美はそれを見逃すはずもなく首根っこを掴んだ。

「彩乃？」

「何？」

「いつてらっしやい」

粹美は彩乃を蹴り飛ばした。彩乃は船の側面にいたのもちろん海にダイブした。

彩乃は中を舞う。

その時に一言もとい一悲鳴。

「ばっかじゃねーの！！！！！！！！」

「私の執事、水着、メイド、入浴シーンをウェブにアップしやがったお前に言われたくないわ。しかも、『コスプレです』<」>とか付け足しやがって。この盗撮野郎」

青い蛇は仰向けになって水上に浮かんでいた。鱗は爛れ、頭は半分溶けていた。

彩乃は水上へ顔を出した。

「ぶはっ、ブクブクブク……。なにすんのよ」

「はっ、いい気味ね。仕返しよ」

「いいじゃん、あれ人気高くて、一日のアクセス数どれだけだと思
つて!？ 二百万だよ?」

「どこにアップしたらそうなるのよ」

「ヤホーとユーチューブのトップ」

粹美は一瞬顔を青ざめさせた後、顔を真つ赤に染めて水中から浮
かんできた彩乃にスタンガン当てた。甲高い音と共に彩乃は沈んで
いった。しばらくしても、彩乃の姿は見えなかった。粹美は自分の
スタンガンの出力を見て、『500』になっていることを確認する
と「まあ、いつか」と呟いて踵を返し操縦室へと乗り込んだ。

「待て待て待てえい! 彩乃ちゃんを捨てる気か!? 必死に孤軍
奮闘してあのでっかい蛇を倒した勇者にスタンガンなんぞ当ておっ
てからに、さすがは恩師捨て去ろう思いついてあっけんからんとその師
恩師を弔おうともせずその身すてなそうろうだぶじゃばじゃばじゃ」

「スタンガンを当ておつてからにまでしか分からない」

彩乃はひょこつと水面から出て、船の側面をよじ登り船の上にな
がってきたところだった。べちょべちょの制服をばさばさとはだけ
させると「どう? ナチュラルエロい?」と粹美に訊いた。

粹美はそれを無表情で眺めると、蹴りでもう一度海に突き落と
した。

綾城

純白のドレスに身を包んだ天使はそこにいた。すべてに慈悲を与えるような微笑みで、貴族を思わせる振る舞いで、人間離れた美しさを持ってそこに立っていた。天使はただ微笑みながら立っていた。

子供の死体の横に。

天使の名は綾城椎奈と呼ばれる天使だった。神が使わした天使は残酷なる裁きとして人々を殲滅していた。その一連は神に逆らった者の末路を現しているようだった。

その神が如き天使に抗う者が椎奈の前の前に砕けた立ち姿で立っている。

その名は珠飾ルリカ。

「さてと、貴様が綾城椎奈か？」

「そうですよ、私が綾城椎奈張本人です。あなたはどなたかしら？綾城総本家の人かしら？綾城本家の人かしら？」

「私は生徒会会長珠飾ルリカだ。徒然なる事情があつて貴之憶良と共に貴様を殺しに来た者だ。覚悟はしなくていいからさつさと貴之君と戦つてくれ」

「憶良君が来ているの！？」

椎奈は突然その優雅な振る舞いを一転させ、一人の女の子としての振るまいに戻り、ただただ目を輝かせながらルリカに再度問うた。

「憶良君がここに来ているの!? どこにいるのかしら!? どうしよう、まだ心の準備が……。でも、覚悟は決まっているの、今回こそはきちんと言わないといけないわ。あっ……。でも憶良君に好きな人がいたらどうしよう? 私はやっぱり断られるのかしら、でもそんなことを考えてたら切りが無いし、でもやっぱり、振られるのかもしれないと思うと心がどうしても躊躇いを……」

「なんだこの女は?」

ルリカはばりばりの戦闘シリアスモードで突入したと自負していたのに、結局こうなってしまうのかと心底悲しんだ。

決死の思いでシリアス展開に運ぼうと一大決心をしていた矢先のこと。まさかの敵役がシリアスを壊すとはルリカ自身全く想定していなかったので対処できずに呆然と立ち尽くしていた。しかし、椎奈の妄想モードは限りを知らない。

「憶良君あの時に会って以来どうなったのかしら? まさか料理がとても上手になってたりして……。私の妻としての立場が危ぶまれるわね。なんとしてもきちんとした料理を作れるようにならないと、憶良君が悲しいじゃうし、迷惑かけちゃう」

「貴之君料理超うまいよ」

「あっ、でも貴之君男の子だしあんまり料理してないか。ちょっと考えすぎたわね。でも、洗濯とかは自分でやってるわよね。貴之君って『何かあった』らしいし、お手伝いさんとかもみんな『何かあった』いなくなっちゃったって聞いているし。うーん、家事スキルはそこそこあると思うけど、もし憶良君の気に障るような失態をしちゃう訳にはいかないし、それに一人でこなしていたとすると細かいこだわりみたいなのもあるだろうしなあ。そこはでも憶良君と同居

してからよね、じゃないと分からないし。って私なんで憶良君と同じ居していることなんて前提で考えているのかしら、いけないわ、妄想がリアリティの世界まで浸食しているわ。落ち着きなさい私。綾城としての尊厳を取り戻しなさい……。ふう、やっぱりダメだわ！ どうしても気に掛かっちゃう。そもそも好きな人のことを考えて落ち着いていられるなんて化け物じゃない、人間じゃないわ……

「そろそろいいかな？」

「人間じゃないと言ったらダメよね。それは冒涇だわ。反省しないと。人はそう簡単に蔑ろにしていい存在じゃないわ。一人の人を想うことでそれ以外の人を全て軽んじてはいけないわね、全人類全てを人として重んずることでこそやっと一人の人を想うことができるのよね。未熟者ね、何が『神々の失敗』よ、私はそこまで完璧じゃない、ただの人の十七歳。まだまだ学ぶべきことが数多くあるのに、世論は優れた一点を特価するから神のように私は奉られているのよね、まったくもって遺憾だわ。風潮とかに肖って一人の人を持て囃す……。果たしてそれがその人として本当に受け入れているのかしら？ と疑問に思うわよね。憶良君も『鬼童』と呼ばれて小さい頃から大人達に奉られていたけど、憶良君は嬉しそうではなかった……。私と憶良君、そして曾良君と三人で遊んでいる時がとても楽しそう嬉しそう良かった……。はっ、その時に私は憶良君に惹かれたのね。あんなに小さい頃に惹かれた事が今でもこうやって惹かれています……。憶良君とても幸せ者よね。仮に私が嫌われていたとしても、こうやって想っていてくれる人がいるのだから……。ちょっと待って、私は憶良君が大好きなんだから、憶良君の幸せを願うのだから、別に私じゃなくてもいいんじゃないかしら？ 憶良君がこの人だと想ってくれる人を応援すべきなんじゃないかしら。ダメ、ダメ！ それは逃げているにすぎないわ。私は誰かに憶良君

の幸せを責任転嫁しているに過ぎないわ！ 仮に嫌われていたとしても憶良君のためにこの気持ち素直に伝えてそれから憶良君に幸せになつてもらおうそれが一番だよね！」

「長いぞ、綾城椎奈！」

「あつあなたいたの？」

「しばらくぞ貴様」

鳥取県某所

男は薄暗い洞窟の中、ただ一人歩いていた。洞窟自体が発光していて、男の行き先を照らし導いているようだった。洞窟の発光はこの地域には珍しく、ヒカリゴケと呼ばれるコケの所為でヒカリゴケそのものは発光しないが光を収束し反射する性質がある。

男は薄暗く足場の悪い洞窟の内部で懐中電灯も持たずにこの洞窟の中を休むこと無く歩いて行った。

途中コウモリや洞窟で見られない目が退化した生物などがいたが男は無関心そうに目的を果たすために歩いていく。

しばらく男が歩いて行くと次第に洞窟の奥が光っているように見えた。男はそれでも慌てずに歩調を乱さず歩いて行く。

男は遂に光源へと辿り着いた。そこで目にした物は水晶だった。

『赤色の水晶』だった。

その水晶の近くには一人の男がいた。

「おやおや？ まさかここに辿り着く魔法使いがいるとは思ひませ

んでしたね。どう考えても私だけだと思ったんですけどね。」

「ミスター・ヒヤエル、お前だったのか」

妙に高い音程で話かけたのは中年を過ぎた男だった。白い髪を無造作に伸ばしており、前髪はオールバック風になっている。左手には両端に水晶のついた杖を持ち、右手には古文書を持っていた。衣服は白衣を真っ黒に染め上げ、ところどころに切れ込みを入れたような服だった。身体は異常な程やせている。

対し、洞窟を進んできた男は毅然とした態度で立っている。赤を中心としたTシャツに黒のジャケットを着ている。ジーンズを穿いているが、そのベルトには小さな十字架がチェーンで結ばれていた。

「あなたは確か、イタリアのレオ殿だったか？ 『罪人レオ』で有名な」

「・・・ああ、その『罪人』だよ。それより、トラップを幾重にも仕掛けたのはお前だな。環境破壊を進めるようなトラップを仕掛けるな」

「罪人が良く言う。どれだけ良いことを言ってもあなたは罪人。そんな言葉は説法にもなりませんね。一体誰が何を言っているのですかね。」

ヒヤエルは嘲笑いながらレオを軽蔑していた。笑い終わると自分の隣で妖しい光を発している赤い水晶を眺めながらこう呟いた。

「これが『魔法』ですか・・・楽しみですね。」

1 - (8) 椎奈暴走(後書き)

お読み頂き有難うございます。

1 - (9) 天使への抗い

鳥取県洞窟

「・・・まあ、『魔法』と言っても源ですけどね」

男は赤い水晶を撫でながらそう呟いた。

赤い水晶は妖しい光を放っている。大きさは十メートルを超え、洞窟の突き当たりであるこの空間の中央に佇んでいる。

「魔法とは形無き想像上の物ですからね」。『物』という言い方をしているのかも分かりませんが、どうやら『魔法の性質』を隠蔽したり改竄していたりするそうですね。しかしながらそんな偽物に引かかる輩は魔法を手にする資格はありませんね」

「偽物か？」

「ええ、そうです。『鷹狩悠久の偽物の手紙』ですね。誰がやっているのかは分かりませんが、どうやら『魔法の性質』を隠蔽したり改竄していたりするそうですね。しかしながらそんな偽物に引かかる輩は魔法を手にする資格はありませんね」

レオはその『発端者』を知っているが、ここでは黙っておくことにした。それよりも、この洞窟内に攻撃トラップが仕掛けられていないかを確認する。水晶によって魔力が入り乱れているために完全には把握できない。

「さてと、私は魔法が出現するであろうポイントへ移動しますからここで終わりに致しますかねえ。太平洋がどうか・・・」

「嘘は吐くな、日本海一帯にトラップを仕掛けたのはお前だろ。領域の磁場を狂わせ方向感覚を乱れさせる魔術。幻覚の蛇を召喚する魔術。綾城の足止めか」

「分かってましたか？　ここに来る前に偽物情報を掴みましたからね、先にトラップでも仕掛けておこうかと思いましたがね」

ヒヤエルは高笑いしながら杖を今頃トラップに引っかかっているであろう魔法使い達を想像し軽蔑した。

レオは立ち姿を崩さずにそのヒヤエルを見つめていた。

「それに魔法はどこか特定のポイントには出現しないことをお前も十分知っているだろう？　俺も『色々あった』からその情報も確証高い人物から得ている。それ」

「貴之ですね」

レオはその言葉に動揺した後、『この男もあれに関わっている』と言うことを悟った。

「・・・知っているのか。貴之を」

「ええまあ、あれに関わった私達なら知っていて当然でしょう。後はマイア・ネイガウスのことですかね。どっちにしろ私とあなたは同じ種類のようなですね。・・・さてと、話はここまでにしましょう、私も魔法を探さなければなりませんしね」

ヒヤエルはその洞窟から忽然と姿を消した。レオはその様を見送ると、自分の目的であった『赤い水晶』を眺め、その後水晶の部屋

を出て行った。

綾城

「私は戦うべきなのか、否か。そもそもこの復讐は貴之君が決心したことだし、私が口出し手出しすることではないのか・・・」

「復讐？ 誰にです？」

珠飾ルリカは適当に空を見上げながら綾城あやきしいな椎奈に向かってそう言った。

椎奈は『復讐』と言うことばの意味を把握できずにきよとんとした顔でルリカを見つめる。

「なあ、椎奈ちゃん」

「まあ、初めての方が椎奈ちゃんって呼んでくれた、嬉しい」

「そうなのか・・・まあいいや、椎奈ちゃんって魔術の世界の頂きに立っているんだよな」

「その言われ方は嬉しくないけど、そういうことね」

椎奈は本当に不機嫌な顔を見ると、しかたなくといった表情で返答する。

「だったらさ、ちょっと私と戦わないか？」

「あなたと？ 嫌です」

椎奈はすぐさまに返事を返す。打って変わったかのようにのろけ
雰囲気から真剣な雰囲気になる。その気変わりにルリカは少々驚い
た。

椎奈はルリカに説法するように話し出す。

「そもそも人は戦うべきではありません。しかし、それでも戦う人
間はいます。魔術師などは特に多く、権力の剥奪を望んでいる者や、
お金欲しさに魔術を利用して戦争を起こそうとしている輩もいます。
ですから私はせめて、私と戦いを望む者には戦わないように促して
います。ですから分かってください。あなたと戦うつもりはありません」

「そうか高尚な考えだな。では一つ問おう」

その死体はなんだ？ 明らかに貴様が殺しただろ？

椎奈の足下に寝転がる子供の死体。その死体は外傷が殆ど無く、
ただ心臓を貫かれたようだった。死後硬直のために分かる死の間際
の表情。

恐怖。

泣き顔が恐怖によって引き攣られたまま死んでいる。

そしてそれは紛れもなく、綾城椎奈本人がやったことだった。

「で、答えは？」

「はい、私が殺しました。だって、『殺意』を向けて来たのですよ
？ 殺さないと。『殺意』を向けて来た者にはしっかり死んで貰わ

ないと。だって、怖いでしょ。殺しに懸かって来ているのですから」

「そうか、分かった。私は貴之君の約束のためにここにいる全員を殺すつもりだったのだが、まさかこんなところにとんだ悪党がいるとはな。貴之君の幼なじみと聞いていたからどれだけ捻れた人間かと思っただら、なんのことはない純粹で綺麗な子じゃないか。私はそういう奴が大好きだぞ。だから」

殺してやる、悪党。

ルリ力は戦闘モードへと移行していた。『殺気』を周囲にばらまく。それに椎奈は敏感に反応し、柔らかな笑みのなかに全てを凍り付けせるような『殺気』を宿す。

「では、行こう」

「戦わないという選択肢はないのですね」

ルリ力は少し重心を落としたかと思うと、

「ない」

と、いつて時速五十キロで綾城椎奈を襲撃する。

ルリ力は強化魔術を使い右手に魔力を集中させる。その攻撃力は岩をも簡単に貫く魔力の槍。その槍は的確に綾城椎奈の急所を狙っている。

対し、綾城椎奈は常時発動の『視力を上げる魔術』でルリ力の攻撃を見定める。そして、その攻撃が『その程度』だと言うことを理解し、なんの策も取らずにただ立ち尽くす。

そしてルリ力は容赦なく椎奈を貫こうとする。

しかし、

その槍は椎奈に届く前に止まった。

ルリカと椎奈の間に壁があるように。

ルリカは一瞬はつとなつたが、すぐに形成を立て直すべく後方へと飛び下がる。

(なんだあれは。さっきの魔術師とはまた違う防御……)

などと考えている最中、ルリカの目の前には椎奈の顔があった。

「！ なっ……」

「速さでは勝てませんよ？」

椎奈はルリカに向かって輝く一つの球をぶつけた。

それによりルリカは遙か後方へ吹っ飛ぶ。そして一軒の家の壁にぶち当たり、その勢いを殺した。壁にめり込むようにしてルリカは地面に座る。

「なんだ……アレは」

「光です」

またもやルリカの目の前には椎奈の姿があった。吹っ飛ばされた距離は約二十メートル。そして壁にぶつかってから一秒立たずに目の前に存在する。

椎奈はテレポーションしたかのように現れ、ふわりと地面に降り立つと同時に先程放った光の球を再びぶつけようとする。

ルリカも速攻で構え、

魔力変換効率！

光の球がルリカに当たる。

その球が消えて行く。

そして、椎奈に“見えない力”が放たれる。

「喰らえ・・・」

「おもしろい能力ですね」

しかし、その力が椎奈を攻撃することはなかった。椎奈はルリカの後方へと移動していた。つまり壁を挟んで反対側にいる。

一瞬の移動にルリカは驚いていた。

「ふっ、マジか」

「マジです」

「私が一発でスタボロになって勝つ手がかかり一つ見つからん。残念だが実力の差がありすぎる」

と言つとでも思ったか？

椎奈は壁の反対側から異常な気を感じていた。それは魔力ではあるが魔術らしからぬ動き。

「魔術にはたくさんの種類があるよな、例えば結界魔術とか」

その瞬間にルリカを中心として同心円状に赤の光が地面を駆け、その光は一定の長さになると、曲線を描き円へとなっていた。

赤の半球がルリカと椎奈を包み込む。

「^{ヘキサゴン}六角形の（・）^{アンサー}定義」

その円は『円』から『六角錐』へと形を変化させていった。その赤のドームは椎奈の動きを束縛した。

ヘキサゴン・アンサー。

六角形の領域に入っている物、這入った物全ての行動を停止させる領域魔術。

領域魔術とはその決められた領域内でのことを全て規制する魔術である。または、その領域内での魔術発動といったものだ。領域魔術の特徴は一般の属性魔術などに比べ能力が高いことだ。逆に短所となることは『領域以外ではなんの効力も持たない』ことである。更にこの魔術には高度なコントロールと技術が必要となる。故、好んで使う者も、使える者も少ない。

それをルリカは一ヶ月という短期間で一般的なものは全て網羅した。

「ヘキサゴンに苛まれる。そして私のオリジナル、『ヘキサゴン・ペンタゴン』で塵^{ちり}となれ」

綾城椎奈は領域内での動きは取られずにいた。領域を抜け出すには領域に張られている魔力と領域の解析からの分解を行わなければならない。しかし、椎奈はさして動じずにルリカの『オリジナル』を拝見しようと楽しみでいた。

「どうぞ、私もオリジナル見たいわ　　どんなのかしら」

ルリカは顔をしかめながら『オリジナル』を披露した。

その『オリジナル』とは5・5角形を作り出すものだった。しか

し、5・5などいくら頑張っても作り出せない。しかし、それを『無理矢理』変化させる。するとどうなるか。

「貴之君の黒鬼ってなんやら難しそうなこと言っておったが結局のところ『破綻』させるのが目的なのだよ。だったら、それを結果でやってしまえばいい。むちゃくちゃに術式を組み立てる、とどうなるか。結果は壊れる。そう、『結界内の術式』が壊れる。領域魔術でありながら、結界というものは・・・分かってるだろ？」

効力を内部のみに発動させる。

さあ、綾城椎奈。貴様の纏っている術式を全て壊させて貰うとしよう。

もちろん人体影響込みでな。

椎奈は一瞬難しそうな顔をした後、微笑みを取り戻しこうルリカに訊いた。

「あなたは影響を受けないのかしら？」

「私か？ 私のことまで心配してくれるとは嬉しいな。まさか魔術の頂点に立たれる者からの慈悲とは心傷み入る。だがしかし、私には少々『特別な力』があるからな、心配しなくていいぞ」

「さっきのあれね」

「ああ・・・まあ、喰らえよ」

綾城城内

綾城真城は目の前にいる少女に畏まっていた。

その少女はイギリスの第三王女セリーナ。

「セリーナ様、ここ綾城では戦いくさが起こっております故、どうか避難びなんを」

「ウイザウトは!？」

「ウイザウト様は現在日本海遠洋の地にあります。それ故、万が一の場合を考えてウイザウト様はセリーナ様の緊急避難として本国イギリスへの裏ルートをお教えくださいました。そのルートを辿ってイギリスへ帰国して頂きます」

セリーナはそんなことはどうでもいいと言わんばかりの焦った態度で真城に聞き返した。

「ウイザウトはいつ戻りますか？ 我が身はイギリスの国宝故、丁重な持てなしを所望します。それはやはり我が国のパラディンを控えさせるのが定石かと」

セリーナは我が身などどうでもよく、ただウイザウトを引き戻す術すべを考えていた。

真城はその真意に気づきながらも、あえて気づかないふりをしてセリーナを『予定通り』に動かそうと計画していた。

「そのお言葉は正論でございますが、今は大変な時。ウイザウト様を呼ぶよりもご自身がご避難された方が賢明かと」

「確かにそれはそうですが・・・」

セリーナは打開策を出せずにいた。真城の言っていることは確実に賢明だ。だが、この状況でウィザウトに会うことができないうことはセリーナにとって恐怖そのものだった。

もとよりセリーナは『なぜ戦いが起こっているのか』を知らない。ただ、戦いがこの綾城の中で起きていることを知っているだけだった。

セリーナが従うべきは綾城。

これはほぼ決定事項と言っているものだった。

「・・・分かりました、では」

「控えは付かせますからご安心を」

そう言ってセリーナは真城について行った。

綾城城下

ルリカは壁にもたれ、椎奈はルリカから数十メートル程先で悠然と立っている。ルリカの領域内だが椎奈は動きを束縛されることはない。

椎奈は笑顔を絶やさずにルリカを見つめていた。赤の結界は歪な形だがしっかりと安定していた。

「化け物だな貴様は」

「椎奈ちゃんって呼んでね。化け物だなんて失礼な、私はただの人間よ?」

椎奈はぶくつと頬を膨らませながらそう言った。

「いやいや、どの魔術書にも載っていない私のオリジナルの術を解析してまさか作り上げるとはな」

「うーん、それに関して言えば『作ってはいない』のよね。ただ、術式を安定させただけ。私は動けなかつたけど、魔力は発動できた。だったら簡単、ノーモーションで発動可能の魔術、『テトリス』で術式を無害な術式に組み替えただけ」

「テトリス・・・確か魔術を『無力化』する魔術。術式を別の術式に書き換えて『無力化』するもの。さながらテトリスのように組み立て方を変えればブロックを消滅させる、という語源から来ている魔術。攻撃型の魔術にはほとんど意味はないが、結界の解除、魔力によってロックの掛かった暗号などを組み替えて無力化するにはこれ以上無い魔術。難易度は私の魔術の比じゃない。・・・天晴れだ綾城椎奈」

椎奈はそのルリカの賛美の声に可愛らしく頬を赤らませ、普通に照れる。

ルリカはその表情を見て安堵の顔を浮かべた。そしてこう言う。

「・・・と言うとでも思ったか?」

「!」

赤の多角形の結界は極端にぐにやぐにやと形を歪めながら多角形

から『球』へと形を変化させていった。そしてその球はルリカを残しながら椎奈へと収縮していった。球は一定の大きさになると変化を止めた。

ルリカはもたれていた壁から跳ね起きる。先程のダメージによる行動不能状態は演技だったようだ。

「これは何かしら？」

「それか？ 言う訳ないだろ。漫画や小説では相手を捉えたらトドメを刺す前に口上があるが現実はそのようなことするわけないぞ。訳も分からずに死ぬ。・・・と言いたいところだが、貴之君がやりたがっていたから生け捕りって感じたな。せいぜい大人しくしている。いや、待て、魔術師の頂点に立つ女がもがく姿を見るのも乙なのでは！？ 動けないこやつに追加攻撃を与えて、ずたぼろにして・・・そそるな！！」

ルリカは満面の笑みを浮かべ、尚柔らかかな笑みを浮かべて立っている椎奈を見た。その笑みに不快感を覚えたが今から楽しいことをする予定になったので我慢した。むしろそっちの方がルリカとしては乙だった。

椎奈は柔和な笑みを崩さずにルリカを優しい眼差しで見つめている。

「あのう・・・」

「なんだ！？ そうそうに許しを請うて私の足下にひざまずく決心をしたか！？」

愉しそうに言うルリカ。

「そこ危ないですよ？」

「危ない？」

その瞬間に椎奈の頭上に光が落ちた。

それは瞬間的にルリカの視界を奪い、目を焼いた。

1 - (9) 天使への抗い（後書き）

お読み頂き有難うございます。

綾城

「ぐうぐうぐう。・・・なんなんだ」

「大丈夫ですか？ 目の方変な事になっていませんか？ 目は生きていくうえで大切なものですからね、大事にしないと。・・・でも、やっぱり失明しちゃったかしら」

ルリカは手で押さえていた目をゆっくりと開いた。
視界は奇跡的に良好。

否、『奇跡的』ではない。『必然的』に良好なままだった。

「見える・・・な」

「あら、大丈夫だったんですか？ 凄いですね」

「そんな褒め言葉はもはや罵倒にしか聞こえん」

ルリカは椎奈しいなを囲っていた赤の球がなくなっていることに気がついた。赤の支配権はルリカだが、それが残っているのか消えているのかまでは視認しないと判別がつかない。

椎奈は心配そうな顔を止め柔和な笑顔に戻す。
ルリカは訊く。

「なぜだ？ あの結界は『自分から魔力を発せ無くなる』魔術だったはずだ。故、貴様はどのような魔術であっても使用不可のはずだ。

『テトリス』によつて組み立てて安定させたものだ、同じ使用者がもう一度『テトリス』で組み替えはできない。それが『テトリス』のルール。貴様が魔術を使えるはずがないのだ！」

椎奈は困つたような困つていないような曖昧な表情を作り上げた後、ゆつくりと口を開いた。

「・・・教えません。だって私にさっきの結界のこと教えてくれなかつたもん」

「そうか」

「と言うとでも思いましたか？」

椎奈の華麗なる逆襲。

ルリカの言つた言葉をそのまま利用し、精神的に多大なるダメージを与える口ぶり。それ通り、ルリカは腕を組みながら顔をしかめている。その表情は先程の愉悦に浸っていた自分の愚かさも加味しているようだった。

「・・・そう構えないください。教えますよ。知られたところで誰も止められませんし、それに欠点はありませんしね」

「・・・」

「私は『光の魔術師』です。あなたはこう言いました。『自ら発する魔力は消す』と。もちろんこれを実行する前は知りませんでした。が・・・私以外から魔力を生成すればいいのですよ。例えば今見ている景色を作り出す、『光』とか。もともと私は空气中に漂う（？）上手く表現できませんがとにかく私の周りには私の魔力を浴び

た光が霧散していますから、その微量な魔術をかき集めてさっきの魔術を使ったのです」

「・・・足りんな。言ったはずだ、魔力を操作できないと」

ルリカは珍しく怒りっぱい声で言った。

「ええ、そうです私は魔力を使えません。空气中に霧散している魔術は『勝手に魔力を収束した』のですよ。・・・先に答えを言つと、『契約魔術』を使ったのです。契約魔術は知ってますね？ 一定の条件下になった場合、その契約魔術は勝手に発動するというものです。それを利用しただけですよ。『私が一定のサインを出したら私に向かつて光を放つ』というものです。お分かりいただけましたか」

椎奈は営業サービスマンよりもにこやかでさわやかで、尚且つ慈愛で満ちた表情でルリカを見て、理解の程を判断した。

ルリカは組んでいた腕を解き、笑った。
貴之との約束時とは別種の笑顔だった。

「そうかそうか、それは流石だな、流石としか言いようがない。

と言つとも思つたか？ ・・・なんて言葉させ出てこないほど流石で天晴れだ。むしろ晴れ晴れしいな。この澄んだ感情を穢れた貴之君に分け与えてあげたいものだよ」

「憶良君は穢れていません！ ただちよつとやんちゃなだけです」

(今どうなっているのか知らないのか・・・)

ルリカは椎奈の過敏に反応する貴之への心情変化を分析していた。

それをしていく内に、少々気がかりなことが出てきた。

話が噛み合っていないのだ。

椎奈の供述と現在の貴之。そして、貴之に『何かあった』ことしか知らないこと。そしてこの態度、口調、心情からくみ取れる人物像。どれもが、『貴之の供述と噛み合わない』ものだった。

しかしながらルリカにはそんなことはどうでもよかった。それよりもそんな些細なことよりも魔術の頂点と戦うことが優先だった。

「・・・まあ、いい。貴之君うんぬんを抜きにして、続きを始めよう。私の全てがあれではないぞ」

「そうだろうと思います。まだ、あなたのその『力』も発揮していませんからね」

「そうだそうだ、頑張ろう椎奈ちゃん」

「やっと呼んでくれた！ そのままでお願いしますね。え〜っと名前は確か・・・」

「ルリカだ。珠飾ルリカ」

「そう、ルリカちゃん頑張りましたよ」

綾城城内

真城はセリーナを送迎係に押しつけた後、ここ慰安室に来ていた。慰安室の中は薄暗く、ただただ棺が並べられているだけあった。

但し、その棺に骸は入っていない。中には花束や、その人物が愛用していた物が所狭しと詰め込まれている。

真城がここ慰安室に来ていた理由はもちろん棺を見に来たわけではない。ある物を獲りに来ていた。

それはあくまで採取であって、取りに来た訳ではない、獲りに来た。

慰安室の奥へ奥へと進んでいくと壁に突き当たった。しかし真城はその壁に手をそつと添えた。すると、壁の一部が動き隠し扉が開いた。

「さて、骨が折れる作業の始まりだ」

太平洋遠洋の地 もとい遠洋の海

「むかし、むかし浦島は、助けた美女に攫われて、琉球城へ来てみれば、歯牙にもかけない煩わしさ」

「なんの歌？」

「浦島の太郎さん」

彩乃は『浦島太郎』の替え歌を歌いながら足を上下にぶらんぶらんした。

彩乃と豊穰粹美は現在太平洋を船で進んでいる。彩乃は船の先端に座り、海面に向かって足を垂らしている。粹美はそんな彩乃を視界の端に捉えながら船を操作していた。

粹美の運転技術はプロのドライバーをも凌駕する腕であり、この

船の他にも航空機やヘリコプター、しまいには潜水艦、イージス艦の操作さえもできる腕だ。

「平和ね」

粹美はただ広がっている大海原を前にそう呟いた。

空は青く波も穏やかで凧のように静かだった。秋晴れの風はとても心地いい。

と、そんな事を粹美は思っていたが、反対の意見を持った少女が口を挟む。

「何言っているの!?! 今は魔法を探すという大事を担っているのよ、その最中で『平和ね』なんてどの口が言っているの!?!」

彩乃は足をぶらんぶらんさせながら身体だけ粹美の方を向いている。

「どこのどいつがその台詞を吐いているのかを私はつつこみたい」

「どこのどいつよ!?!」

「そこのお前だよ」

このような一連の流れはもはや恒例行事となっていて今更滞りが生まれることなくスムーズに流れを持って行ける二人だった。

彩乃は粹美つつこみに満足すると身体をもとに戻した。

彩乃はつまらなさそうに海面を眺めていると、影を見つけた。それは下からではなく『上から』の影だった。即座に彩乃は足を抜き、立ち上がるうとするところには人が落ちてきていた。

「ウィザウトさん!？」

青を象徴とした衣装で腰に長い日本刀を携えた『英国武士』、ルール・ウィザウトが立っていた。

ウィザウトは彩乃の方を向くとすぐに話を始めた。

「今、綾城で異常が起きている!」

ウィザウトが彩乃と合流する三十分前

ウィザウトは媒島なほつじまを後にした後、『海面を走っていた』。向かう先はもちろん赤道と日付変更線との交点。

時速三十キロで走っていた彼は水面を走りながら何かに気がついた。

その何かは空間を歪めているような、空調を荒らしているようなそんな『雰囲気』だった。

(この『雰囲気』は……)

ウィザウトはその『雰囲気』を察し、特有の能力『規制無用』を発動させる。

空間が歪む。空調が荒れる。

そして、空中が弾けた。

鬱蒼とした霧が晴れるようにその『雰囲気』は消え失せた。

「領域魔術か……」

ウィザウトはその歩調を止め、周りを見渡した。しかし、人影一つない。あるのは風を貫いている水面だけだった。そしてすぐに、ウィザウトは感知魔術を放つ。

(・・・ないか)

感知には何もひっかからない。

『何も』引つかからない。

領域魔術とは根本的に術者の近辺でしか張ることはできない。それがこの広大な面積を誇る海には誰も何もない。

結界魔術と領域魔術との違いとは、『形を創ること』で発動するのが結界魔術、『地域を限定すること』で発動するのが領域魔術。また、領域魔術は術者の近辺で発動させるのがセオリーだ。

(領域魔術なのか？ 結界なのか？ どちらにしても大きすぎる)

もし、術者がこの結界もしくは領域を張ったとすればそれは『海の全てを制御下に置いている』ことになる。そんなことを『一般の魔術師』ができるはずがない。

「魔法使いか!？」

ウィザウトは態度を急変させるとすぐに、『引き返す』選択をとった。

まずは『近くに潜んでいる綾城の人間』とコンタクトを取ることを優先とした。

(・・・綾城は俺に知られないように別働隊で来たみたいだが、バレレだな。まあ、それ今回は功を奏したが)

そしてウイザウトは綾城の人間を感じる方向へと走り出した。しかし、その途中で『あるもの』が異様な光を放った。それは、ウイザウトがセリーナに持たせた『魔水晶の対の物』だった。その魔水晶は一定以上の魔力を感じたら光、もう一方の魔水晶を共鳴させる類のものだった。そして今ウイザウトの魔水晶は光を放っている。

(まずい・・・綾城で何かが起きているということ。この魔法よりも・・・)

ウイザウトはこの異常な魔術と異様な光を鑑みて引き返すことにした。

Now 彩乃 ウイザウト 粹美

「・・・ということまで今に至る」

ウイザウトは彩乃までの距離約十キロを走ったというのにまったく息を乱さずに彩乃と正対していた。

彩乃は珍しく考え事をするように手を顎に添えていた。

「つまり、私達の行動は筒抜けになっていたと。失敗したなスイミ、私達はどうかやお姉ちゃんに怒られるようだ」

「それほとんどあなたの所為じゃない？」

「それは言わない約束だったはずだぜ？」

「かつこよく言ってもあんたのミスでしょ」

粹美は醒めた目で彩乃を軽蔑した。

ウィザウトは彼女等を見て、慌てさせるように言う。

「綾城で今何かが起きていると言うのに、あなた方はそんなことでもいいのか!？」

彩乃はウィザウトの言い分に半ば納得したように、半ば「そんなこと言うかよ」という目で見した後、ウィザウトにその真意を返した。

「お姉ちゃんがいるので問題ないと思いますけど?」

「それはそうですが・・・」

ウィザウトは綾城椎奈という化け物をよく知っている。いや、今回の魔法争奪戦で『初めて』会った訳だがその『初めて』でしっかりと椎奈の実力を理解していた。

故、追求した叱責はできない。

「まあ、あの綾城にはセリーナ様がいらっしゃるのですでしたか? それなら仕方ありませんね、ウィザウト様がそう性急になるのも」

「ですが、綾城は無敵の城砦ということもウィザウト殿は理解していると思いませんか?」

「それは確かに・・・」

ウィザウトは言葉を返せずただ呆然としていた。

彩乃はそんなウィザウトに言葉を掛ける。

「私達が綾城に戻りましょう」

「？」

「どうせ私達だけでは魔法は見つけられないような気がしますし、私達が一旦戻って綾城に何が起きているか確かめて、もう一度今度は急ぎたいのでお姉ちゃんに連れてきてもらいます。それならウィザウト様も安心できるし、私達が遅れることはないですし。．．．それにウィザウト様の信用を落とす訳にはいきませんし」

ウィザウトは彩乃の言葉に一旦驚いたがすぐに気を引き締め、

「かたじけない」

と、日本風に礼を言う「では」と言って再び目標へと向かおうとした。しかし、その背を彩乃が引き留める。

そしてウィザウトに一個の水晶を渡す。

それは黄色の水晶だった。

「それは通信用の物です。それがあればすぐに通信できますからね」

そう言って彩乃はウィンクをした。ウィザウトはその茶目っ氣に一度肩の重さを落とすと目標へと向かった。

「．．．なんであんなに焦ってたのに彩乃を見たら急に安心したよ
うになったのかしら」

「さあ、私の母性本能に惹かれたんじゃない？」

「そんなことはないでしょ」

粹美は操縦席へと乗り込んだ。

彩乃は軽いステップをしながら船に先端へと移動した。

(あの人どこかで会った気が・・・)

二人は時間は違えど同じようなことを思っていた。

綾城

ルリカは構え、椎奈はゆったりとした風情を醸しだしながら立っていた。

戦闘は一気に魔術の戦いへと動き出す。

ルリカは術式を展開させ多数の火を出し同時に椎奈へと放った。

椎奈は慌てることなく手を出す。すると、光の球が発生しその火を破壊する。・・・だけではなかった。

光の球はそのままルリカの火を打ち消しながらルリカへと向かう。ルリカは高速でその光の球をいくつかは躲し、いくつかは変換効率で変換して光の球へと力を放ち打ち消す。

「ふう、一回の攻撃で一苦勞だな」

「頑張ってください」

椎奈はにこやかな笑みを崩さずにそうルリカへと労いの言葉をかける。

「次は私から行きますね」

椎奈は何もしなかった。だが、空気中の光は無数の束となり直線的な攻撃をルリカへと放つ。

無数の光をルリカは持ち前の身体能力で躲しながら術式を展開させて魔術を放ち打ち消していく。しかし、その一撃で大規模な爆風が起き、ルリカはバランスを崩してしまう。

そこをすかさずに椎奈は追撃する。

持ち前の光を使った高速ならぬ光速移動でルリカへの距離を密着するぐらい詰めると同時に光の球を手から放とうとする。

「くっ……」

ルリカは身体を半回転させ、地面を見るような形になる。そしてその形になった瞬間に魔術を展開から発動させて小さな爆風を起こし、椎奈の魔術から回避する。しかし、椎奈の手に吸い付いている光の球は地面へと付かなかつた。椎奈は『空中で身体を止め』、爆風で空中に浮いているルリカへと光の球を向ける。

「飛んだら回避できないですね」

「ばかつ……」

光の球はルリカに直撃した。

が、直撃しても『直撃』はしない。

魔力変換効率！

一瞬でノーモーションの魔力変換効率を発動させ、衝撃を緩和させる。しかし、その攻撃は全てを変換できずにいた。つまり、

「ぐっ……」

空中で喰らい踏ん張ることも出来ずに吹っ飛ばされる。
数十メートルも吹っ飛び、家にぶつかって衝撃を止める。ぼろぼろと家の外壁が崩れ落ちた。

「ルンルンルン　ルリカちゃん強いですね」

「馬鹿言っな、貴様おかしいほど可笑しいぞ」

「言葉おかしくないですか？　いや、可笑しいですね」

ルリカは「一体何回家にぶつかればいいのやら？」と内心で呆れるようにため息をつくと、手で壁を押し、地面へと降り立った。

「よっこいしようち」

「一体何歳ですか？」

「二百五十四歳だ」

「くすくす……おもしろい人」

椎奈はそのとぼけに上品に笑う。

それが本当に『とぼけ』だったのかということルリカも椎奈も知らぬままに。

1 - (10) 天使始動(後書き)

お読み頂き有難うございます。そろそろ、天使さんが本格始動して
きましたので、このサブタイにしました。この第一章はなぞ要素が
「馬鹿じゃねえの?」と言っぐらい多いのですが、第二章、三章と
どんどん解決していきます。ず~~~~と前から言っている「九
州独立編」までは最悪続けたいと想います。で、誰も期待していな
いかもしれませんが、『魔法少女物語』の終わった後の未来、『魔
術師殺し物騙り』を途中で参戦させたいと思っています。魔法少女
とは完全に毛色の違うクールな作品に仕上げるつもりです! たぶ
んクールになるはずです! . . . です。

綾城

椎奈は手を後ろに回し腰辺りで手を組んでいる。柔和な笑みを崩さずにいて、緊張した雰囲気の中椎奈の周りだけは安穩とした雰囲気を醸し出していた。

ルリカは赤と黒を象徴とした着物についた埃ほこりを払う。

「さてそろそろ力を見せてやろう」

「さつきもそんな感じのこと言ってますませんでした？」

「五月蠅いやい」

そしてルリカはゆっくりと目を閉じて深く深呼吸する。ゆっくりとした動作で手を上へと上げて行く。そして指を曲げ、人差し指を残して折りたたむ。

「……完璧な指揮」
パーフェクト タクト

上げた手をゆっくりと振り下ろす。手を動かしながら『指揮』をとっていく。

「音楽かしら」

一定の指揮をとっている途中、ルリカから『音』が奏でられる。

「まあ！」

「完璧な指揮・・・貴様は私に魅せられる」

一斉に『魔術式』が展開する。魔術式とは魔術を放つ前の下準備、貴之曰く下ごしらえ。魔術式が展開することで魔術を発動させることができる。その魔術式が・・・

「八つ？」

魔術式とは根本的に一回で一つしか発動できない。例外としても、

「私でも四つが限界なのに・・・八つって」

椎奈のような最高クラスの魔術師か元々の才能を持っている人間しか『同時』に二つ以上使うことができない。それをルリカは八つという桁外れな数字を奏でだす。

中には加減速魔術や強化魔術を併用する者もいる。ただしそれは『ずれ』がなければ発動できない。一秒という短い時間で次の魔術を発動できるのだがそれを『同時』に発動させることは一般の魔術師にはできない。

ルリカはそれを成し遂げる。

ただ、ルリカの魔術式の『内容』の方が桁外れもとい的の外れなものだった。

魔術を発動させる魔術式ではない。

『魔術式を展開させる魔術式』だった。

「これは・・・」

椎奈でさえ呆気にとられる程の異常。椎奈でさえ見取れる程の能力。椎奈でさえ魅せられる程の神秘。

「魔術式を展開させる魔術式、そしてその魔術式から発生する魔術式は『五つ』。つまり・・・」

8 x 5 = 40

発動させる魔術は合計四十。

魔術師という領域を超えた能力。

火、水、雷、毒、鉄、銅、土、風、熱・・・多種多様、千差万別な攻撃が椎奈を襲う。

椎奈も数多の魔術師を相手にしてきたが、これほどまでに異常な魔術師を見たことはなかった。

「凄いですね」

ルリカの魔術は椎奈を包み込むように一点集中でその四十の音色をぶつけた。

椎奈の周りを全て壊す。

が、

「素晴らしい攻撃ですが術者がフリーですね」

「いや、そんなこともないぞ。言わなかったか？ この演奏はパーフェクトだよ」

ルリカをぐるりと囲むように魔術式が展開し、波状に発動していく。しかし。それはおかしなことだった。

「さっきも四十の魔術を放ったのでは？」

椎奈は光を収束させてルリカの魔術を丁寧に破壊していく。そして一通り魔術を破壊すると一旦この異常から距離を取る。ルリカは質問に答える。

「ふん、『同時に』使えるのが四十なだけであって、一秒空けば又四十だ」

「化け物呼ばわりしてあなたの方が化け物ですね」

「いやいやさっきの四十もの魔術を全部相殺したうえで背後を獲る椎奈ちゃんの方がよっぽど化け物だよ。普通はあんな攻撃躲せるはずがない」

椎奈はうんと一回考え込むとすぐに晴れやかな笑顔を戻した。

「そう言っても、やっぱりあなたも凄いですよ。もっと戦いましょう」

「戦いたくないとか初め言っていた癖に……」

椎奈が光速移動を用いて攻撃に移る。

ルリカもタクトを揮い攻撃を展開していく。
が……。

「やっぱり無理か……」

ルリカはまたしても家にたたき込まれ打ちのめされていた。着物はぼろぼろですぐに動ける様子はなかった。対し、椎奈は柔和な笑みでルリカを見つめ様子を窺っている。

「凄いですね、まさか、ヘンカンコウリツでしたっけ？ それにあんな使い方もあるなんて、私吃驚しました。初めての能力なので凄く楽しめました。では、来世では友達になってください」

椎奈は隙を与える間もなく速攻で光の球を放つ。

・・・しかしそれがルリカに届くことはなかった。

原因は、

「ああ、そう言えばいたな」

貴之君。

「ヒロインのピンチに駆けつけるのが主人公ってものだ」

「貴之君が主人公？ 笑える程嗤えるな」

「憶良君！？ 憶良君なの！？ オクラ君！？ おくら君！？」

ルリカは半ば呆れたように貴之を見つめ、椎奈は顔を赤から青、青から赤に顔色を変えている。しだいには椎奈は手をもじもじさせて足を何回も組み替えたり、動かしたりしている。そこに綾城の振る舞いや魔術師の頂点と言った風貌は微塵も感じさせない。一人の女の子だった。

「主人公ねえ、貴之君か・・・まあ確かに似合うっちゃ似合うな。それはおいておいて、あんないいタイミングで出てくるとは貴之君、

「計ったか？」

「ルリカは貴之に冗談を投げかけるが、

「ああ、いいタイミングを狙って出てみたんだけど、今の一撃でかなり魔力を持って行かれた。あの一撃を防ぐために・・・ヤバかったぜ」

「・・・馬鹿だろ？ 貴之君馬鹿なのか、馬鹿なんだろ」

「憶良君は馬鹿じゃありません！ とても元気のいいちょっとやんちゃな男の子です。私を落とす穴に嵌めたり、お茶の中にポツカレモン入れたりするだけです！」

「そんなことしていたのか？」

「知らん」

椎奈は自分の気持ちを伝える間もなくボケとつつこみの応酬の波に囚われていた。自分のペースに持ち込む瞬間を狙うがそれをこの二人が許すはずもなく、

「そもそもお前が綾城椎奈に勝てる訳ないだろうが。俺とのタッグで倒すつもりがお前が先にやられると計画ががた崩れだろうが」

「ほれ？ なんで憶良君『しいちゃん』って呼んでくれないの？」

「・・・へえ、しいちゃんに私が勝てないと？」

厭らしく笑うルリカ。

貴之はそんなルリカを生ゴミを見るような目で見ている。そして微動だにしないまま『黒』を発生させてルリカの頭上で形を創っていく。

「あれ〜貴之君それなになにや？」

「あれ〜ルリカ気づかないのか？ これはぶん殴るための一品ぞ。あと、そこまで言ってくれるのなら『懺悔』もしとこうか」

「嘘嘘嘘ごめん、ごめん。黒はいいけど、『懺悔』は止めておこう。懺悔はやめないとなあ！」

動くこともできないルリカに貴之はゆっくりと近づいていき黒を振り下ろした。

「いや〜〜〜！・・・」

ルリカは黒に飲まれて姿を消す。

椎奈はそんなルリカを見て、「あら不思議」と、のほほんとした声で呟くと自分が置かれている状況を理解し始める。

(二人つきり—————！)

急激にあたふたし始める椎奈。

醒めた目を『殺意の目』に変えて椎奈を見る。そんな貴之の『殺気』に気づかない椎奈は喉の奥まで出かかっている言葉を吐き出す。

「憶良君・・・ひさ、久しぶり」

「ああ、久しぶり」

貴之はその目で椎奈に返答する。そこに感情は何一つない。

「そそそ、そのね。私の言い分を聞いて欲しいの……」

「言い分？」

「あ、あのね、そのね、私はね好きなの……」

「俺をか？　そうか、昔からそんな仲だしな、『友達』として俺のことを好きだと言ってくれるのはとても嬉しいよ」

「違う！」

椎奈ははっきりとその言葉に反論する。椎奈の想いはそれではなく、ずっと想い続けた、想い続けた胸の苦しみだった。顔というのは真っ赤に温度を上昇させる。身体は軋みを訴える。それほどまでに待ち望んだこの機会。その想いは貴之も同じだった。

胸の苦しみ。

『憎しみ』の苦しみ。

「私は貴之君を愛してる、凄く愛してる……」

椎奈は言い切った。

「ああ、俺もだよ」

「えっ!?!?」

椎奈は目を見開いてその言葉が真意なのか偽りなのか、間違いないのか噛んだのか確かめるように貴之を見つめた。

「ああ、俺も愛している。否、『愛していた』。小さい頃は許嫁という言い分も領分も家柄もなくして大好きで愛していたよ。．．．まあ、今も一緒か」

「．．．．．」

「俺も愛しているよ．．．」

憎む程にな。

一気に貴之から莫大の『殺気』が放たれる。その『殺気』は空気を殺し、生物を殺し、時を殺し、椎奈の感情をも殺した。

「貴之君『も』なの．．．？」

椎奈は極端にがつくりした後、椎奈の魔力が領域を破壊する。

「なんで、殺気を私に向けるの！？ 私は、わたしは．．．う、うわああああああああああああああああああああああああああああああ！」

貴之の『殺気』に反応して椎奈も『嘆き』を発する。
動いたのは椎奈。

光の球ではなく、束を作り出す。

「なんで！？ なんで！！」

なんで、みんなは私を殺したいの・・・？

光の束の大きさも魔力の量もルリカと『遊んでいた』ときとは比べものにならない程度だった。空気が光によって振動する。

そしてその莫大な光を貴之に放つ。

貴之はその攻撃を防御する構えすら見せず・・・。

「はあ、はあ・・・」

椎奈は自分の放った光によって自分から百メートルが無くなっていくことに気づいた。

『無』へと施す光。

この魔術は椎奈にとって『弱』のクラスでしかなかった。

息を乱しているのは叫んだ後、酸素を補給するため。彼女にとってこの程度の攻撃は先制攻撃としてで奥義染みたものではない。

「貴之君・・・も私に『殺気』を向けてきた。貴之君は、貴之君は・・・」

綾城から数百メートル離れた地点

ルリカは近くの気によしかかり、貴之はそんなルリカを見下ろしていた。

周りは木々に囲まれて彼らを遠くから裸眼で見ることができない。

「ふう……『黒』か」

「ああ、『黒』だ」

貴之は椎奈の攻撃を受ける瞬間に『黒』の能力『過程』を利用して、椎奈との戦闘から寸前で離脱していた。ルリカを先にここに送った力も『黒』の性質によるものだった。

貴之がああ復讐のビッグチャンスを逃したことには大きな理由があった。

それを知らないルリカは貴之に問い詰めていく。

「何をしていた？ 貴之君なら綾城椎奈を見つけることぐらい、好みの女を探すことより簡単だっただろうが」

「仕掛け……だな」

「仕掛け？」

「ああ、綾城の城の内部に行ってな、ちょっと仕掛けをしていきな。その仕掛けはより椎奈を追い詰めるためのものだ。具体的には『綾城を破壊する』ものだ。……そうだな、残り時間は一分つてところか。今に始まるだろう」

ルリカはそんなあやふやな回答に苛立ちに似た感情を抱きながら、まったく気づかなかつた時計を見つめている貴之を見た。

貴之は時計を秒刻みで呼んでいく。

「三十……二十……十……九……三、二、一……零」

貴之はルリカに「今日は身体を休めろ」と言い残してどこかへ行ってしまった。

ルリカは小鳥が綾城から離れていくのをぼっと見つめていた。

トラップ発動一分前

貴之・ルリカとの戦闘地点

椎奈は貴之を逃がしたことをしつかりと理解すると半分安堵し、半分不安だった。数メートル先に転がっている無残な子供の死体には反応しなかったが。

椎奈は嘆きを空へと伝えようと空を見上げた。

そこに映ったのは、神でも雲でも青空でもなく『魔術式』だった。

「・・・・・・・・」

しかし、その魔術式を解除する気力も行動もなかった。ただ、その『見たことのある』魔術式を呆然と眺めながら空を見つめた。

しかし、それを解除しようと思死になる者もいた。

綾城城内

「貴之か！ あの小僧がこれを……。しかも、この『見たことのない』魔術式はなんだ！ 椎奈を、椎奈を……。椎奈！」

真城はこの突然展開された魔術式に緊張と苛立ちを抱きながら、この見たことのない魔術式を解除できるであろう椎奈を『綾城』に張り巡らせているカメラを使って探した。

忙しくコンピューターを操作しながら探していく。

が、それも無駄に終わった。

魔術式が発動される。

『綾城』を破壊する魔術。

某魔外師

「おねえちゃ〜ん。このコーラ頂戴」

少女は店員からコーラを受け取りとても嬉しそうにしてここで店内から出て行った。

某魔外師

「なんだこの『設定』^{ストーリー}は！？ ……こんなことができるのは、貴之……。貴之君か。くそおおお！」

テーブルを叩き、苛立ちをあらわにする小説家。

某魔外師

「悠久さんには悪いことしたけど、まあ、僕の『小説』フィクションじゃないとあの人のためにならないからなあ」

青年はただただ、自分が介入したストーリーをただ呆然と観客のように見つめていた。

某魔法使い

「あらら、なんだかおかしなことになりましたね。このままだと『魔法』はどこに現れるのか分からなくなりますね」

中年は呆れたように今の現状を分析していた。

某魔法使い

「ダミーだったのか。こんなことができるのは綾城椎奈本人か、はたまた綾城真城……まずい！ セリーナ様が！」

英国武士は仮想のリアルに緊迫した危機的状況を見いだしていた。

某魔法使い

「今回の魔法は諦めるしかなさそうだな。この分では魔法は『選ばない』。闘争も起さない魔法争奪戦では魔法は『選ぶことが出来ない』。イタリアに戻るか……」

罪人は魔法の区切りを見つけ、その場を後にした。

某生徒魔術師紛い

「休めとはなんだ、まったく。いきなり復讐に参加しろとか言っておきながら、出会ったというのに戦闘もしないで逃げ出してくるとは……。情けない。トラップうんぬん言っておったが結局は逃げだろっが」

生徒会長はぶつくさと文句を言いながら眠りについた。……まだ昼だが。

某一般生徒騙り役

「……椎奈か」

復讐に囚われた青年は明日の『本番』に向けて魔術式を組み立てていった。

1 - (11) 天使崩壊（後書き）

お読み頂きありがとうございます。冬到来！ この地域でも雪がぽつぽつ・・・もといどさどさ。学校行くのに雪かきを三十分ぐらいしないとけません。って、あれ？ この作者がそこらへんの中学生ってまだ言ってますでしたっけ？ まあ、いつか。さて今回は「天使崩壊」となっております。椎奈さんが駄々崩れです。次回のタイトルは「綾城崩壊」と今回の話のタイトルをもじっておりますでは。

次回は・・・ごめんなさい。

綾城

「綾城」と呼ばれていた街は跡形も無く壊れていた。城も崩れ、街は滅び、城壁は意味を無くしていた。魔術による影響か空には雲が懸かり雨雲が空を埋めていた。

真城は現状を受け止められずにいた。

着々と進めていた『計画』もこの魔術によつて頓挫してしまった。・・と、真城は考えていた。全てはこの『見たこともない魔術』によつて崩されてしまった。イレギュラーが過程に混じることは真城自身想定をしていた。仮にそのイレギュラーが入り込んでしまったとしても『計画』全体が破綻しないように保険も掛けていた。そしてこの魔術による介入は真城にとって保険さえも破壊するイレギュラーだった。

「こんな、こんなことがあっていいのか・・・『綾城』という最強にて無敵の要塞が・・・。魔術の頂点ともあるう家系が・・・」

真城が見つめるのは崩れ去った無敵の城、『綾城』。

『綾城』がここまでの『失態』を見せたのは空前絶後の事件だった。

あやししいな綾城椎奈という過去に類を見ない程の魔術師が齡七歳という年齢で滅ぼした、綾城から見て弱小の魔術一家の生き残りに綾城の過去がひっくり返された。

貴之家との計略結婚はあくまで経済的な交際であるはずだった。魔術という概念の下で計略結婚を行うとすれば欧米の『マスカー家』との計略結婚の方が徳だったはずだ。

そこまで見下していた一家がこのような事を起こす。

「椎奈様、椎奈様はどこだ！」

真城の周りには何人もの綾城総本家の人間がいる。

「はっ、すぐに椎奈様を探して参ります」

規律正しい礼儀を真城にとると真城に指示された男はすぐに捜査網を張りだした。

（椎奈に万が一の事があれば本当に綾城は終わる・・・経済的地位はまだなんとかあったとしても魔業界での地位が・・・）

真城は今後のことを考えてすぐに行動に移す。

「大至急同盟の『百文字』ひやくもんじとの連携を取れ！・・・綾城芽奈にはあやきめいなすぐにフォローできるように連絡を入れろ！魔術レベルが高い者はすぐに綾城周辺に警戒網を張れ！他の一族が攻めてくることを考えて二十四時間交代で見張れ！」

真城はすぐに指示を出し、椎奈が発見されるのを待つことにした。そこまで真城は待つこと無く、椎奈発見の連絡を受けた。

「椎奈様は現在綾城西方面、裏庭に当たるところで発見致しました」

そしてそれを受けると『侵入者』である貴之憶良の搜索を命じた。その相手に選んだのはもちろん綾城椎奈だった。

「こんな事態に追い込んだ貴之憶良を殺すように椎奈様に伝える。

ここまで綾城を貶めた男だ、椎奈様以外では太刀打ちできまい」

真城は椎奈発見によって落ち着きを取り戻していた。それによって段々と状況を判断できるようになってきた。そしてそれに気づいた真城はこの魔術の『異常さ』に気がついた。

「……ちよつと待て、なんで、『綾城の人間が誰一人傷を負っていない』？ 最低でも爆風や瓦礫によって傷がでるはずだ。一体これは……」

綾城

「幸福の餞別……曾良君の魔術、『篩』だったかな」

椎奈は何もしなかった。

それはこの魔術の性質を十分に理解しているからだった。

この魔術『篩』は選択外の一物を一切破壊しない魔術。そう、選択したものの以外は『一切影響を与えない』魔術。まるで、対象以外を残し、対象だけを落とす『篩』のようだというところから来ている曾良独自の魔術。

椎奈は分かっていた。この魔術は貴之憶良が発動させて魔術である。

そして、

「憶良君は人を殺さない……人を殺せない……人だから……どんなに口では『殺す』という言葉を出しても憶良君は殺せない」

貴之は「人を殺せない」ということを。

そして貴之と長年の想いと時間を募らせて出会った時に気づいた自分の『異常』を。

「私は……憶良君を大好きで誰よりも大好きで何よりも大好きなのに……」

殺そうとした……。

綾城から数百メートル地点

貴之はルリカが休んでいるか確認のために近くに寄り、近くに座った。するとその気配でルリカは起きた。

貴之は木によし掛かり、ルリカは地面に座り、と向かい合った。

そして、間髪入れずに平手打ちを放った。

「寝起きで痛い……どこの寝覚めグランプリだ。ゴールデンタイムにやっていたぞ、と言うのを聞いたことがあるぞ」

「馬鹿かお前は、お前如きが椎奈に勝てる訳がないだろうが。お前が死ぬのはどうでもいいが、俺の討伐計画にお前は組み込まれていくんだ、勝手な真似をするな」

「私は駒か」

「そつだ」

貴之はルリカを駒とすることを正々堂々と面と向かって言った。ルリカはそれに「そうだな」と半ば分かっていたように返答すると自分の頬を撫でた。

そしてルリカはゆっくり立ち上がると「じゃあ行くか」と声を出した。

そして貴之はもう一度つつこみタイプの殴りを入れた。

「馬鹿か、今日はもう休むんだよ」

「えゝ行かないのゝ」

「お前が一番ダメージ多いだろうが」

「貴之君が一番疲れているだろうが。見れば分かるわ」

貴之はそのルリカの返しに無言で納得すると深く腰を落とした。

それはもう休むということを現していた。

ルリカもそれに倣って地面で寝た。

貴之はしばらく起きていたがルリカはすぐに寝てしまった。それを見て、この「この女はどこでも寝れるのか？ ガードが弱すぎるな」と思った。

貴之は知らなかった。

ルリカにとつて『こんなことは日常』だということを。そしてそれを
知るのはそう遠くなかった。

彩乃 said 綾城に向かう二人

「何すんのよっ！ 変態百合ドS馬鹿女！」

あぢきあぢの綾城彩乃は独自に編み出した我流『百合への挑戦』レス・を豊穠粹美チャレンジャーに仕掛けていた。その様相は想像にお任せしたい。というか述べたくない。

「ぎやはははは この頃お姉ちゃんに仕掛けるタイミングがなかったからちよつとストレス溜まってね、まあ今ので二十パーセントぐらいは晴れたかな、まだ八十パーセントぐらい残っているからよろしきー！」

「よろしき！ツテ何！？ 私はまだこの拷問染みた攻撃を浴びないといけないの？」

「お前ならまだやれる！ できるさー」

「あんた自分がやっていることを十年後に公開して後悔しなさい。もう恥ずかしくてインフルエンザに勝てるぐらい強く発熱しなさい」

「いや〜悪いけど私はたぶん後悔しないよ。それも人生での経験。それを私は蔑ろにできないし、恥ずかしくない。今、つまりスイミの言っている過去はその時の私を作り上げている大事な礎こしらえなの、それを笑う者を私は笑い、それを軽蔑する者を私は軽蔑するわ」

「……かつこいいこと言っつて昇華させんなや！」

「昇華と昇天って何か似てるよね」

「……もう、次のコメントに回しましょうか」

ウィザウト said 綾城に向かう海上

「くそっ間に合うか・・・」

海面は走った後に津波をいくつも創っていた。

彩乃 said 再び ではなく スイミー said 襲来

「あら？ なんかすぐに戻って来たわね」

「うーん、いくら文字数を『6000』〜『7000』にしたいからって私達に回してもねえ、ここに回すってことは半ばネタ狙いだったり、おかしなことを書いているってことを衆目に晒すってことをやるわけだからね、身を削る思いだと思っよ」

「まあ、期待に応えましょう」

「そうよね、彩乃は頑張ります」

「じゃあ何から話す？」

「相対性理論とか？」

「そんな需要あるの？」

「あるのさ〜」

「ああ、聞いた話しというか某ラーメンの具の名前が漫画のタイトルになってる渦巻きしているナルトの作品の作者コメントで言っていたんだけどね」

「もうほとんど言っているよね」

「で、その作者コメントで小学生が相対性理論の本を熟読していたらしいよ」

「へえ、そんなこと言っていたんだ。じゃあさあ、じゃあさあ、桜蘭のホステスくんのやつは？ あれ知ってる？ かなり人気たかいんだぜ」

「それはいいわ。私興味ないし」

「え〜いいじゃん、ホステス君ってさあ」

「どこがいいのよ。というか・・・ここから長いよ」

「了解」

「男性が女の子が多い作品見てて、学校で言うと『あいつキモいんですけど』とか言う女子いるけどね・・・てめーらはどうだったんだよ、ああん！？ てめーらホステス系の見えてキャキャウフフしてんだろぅが！ 性別反転させたら一緒だろぅが、話しわかってんのか、ああん！ 男女共同参画社会を目指しているこの日本という国で差別や偏見があっつていいのかって言っつてんだよ！ 女子共そん

な二度とほざくんじゃねえぞコラ！・・・と私は言いたい訳よ」

「・・・スイミーの新たな世界を垣間見た気がした。ってか初めて見たそんなスイミー」

「そうかしら」

「そもそもなんで男子目線なの？スイミーって女の子だよ、私と性別一緒だよ」

「もし・・・もちろんそうよ」

「なんで喃んだの？」

「偶然よ偶然」

「・・・ちよつと待って」

「？」

「今ね、『彩乃said 再び』の後にね、『スイミーの襲来』って付け足してきた」

「あらそう？私そんなでしゃばったかしら。脇役は脇役らしくしていようと思っていたんだけどね」

「違うよスイミー。キャラが立ちすぎているんだよ」

「・・・そろそろいいみたいよ。この茶番」

「ほんと茶番だったね。私もびつくりしたよ」

「はい、皆様茶番を茶番らしく楽しめましたか？ 大変ご迷惑をおかけ致しました。また私がおべたことはあくまで個人的な意見でありますのでご理解とご了承の程をして頂けますようお願い申し上げます。また、この私の台詞を書いている者は決してそのようなことを公衆の面前で言うようなものではありませんので勘違いなさらないようお願い申し上げます。では、本編をお楽しみください」

「むっちゃ慣れてるね、スイミー」

某魔外師による・・・

「と粹美ちゃんが言ってくれたのはいいんだけどさあ、結局この回では進展しないんだよねえ。

今から約二千字ほど、僕の話だよー。君が飽きないっていうのなら聞いてね。

さて、まずなにか話そうか。

そうだねえ、『貴之憶良がなぜたまかさり珠飾ルリカを道連れにしたのか』ってところから始めようか。

ああ、そうだった君はもう知ってるんだっけ、ああそう、珠飾ルリカが初心つば瑠璃歌るりかだったこと。

あっそ。

うーん、だったらだいたい分かるよね、なんで憶良が僕のプリンセスを巻き込んだのかってこと。

うん、だいたい正解。でも、僕が僕自身の意思でルリカちゃんに会わせた訳じゃないんだよね。

厳密に言つと、僕はただ命令されただけなんだよね。まったくもつて暴君だよ。この伝説の魔外師たる僕をこき使うなんて僕'の母である貴之美里^{みよこ}だけだよ。

・・・なんで「」が付いているかつて？

だって僕'なんだよ。付けないとさあ、分別できないよ。

君がそこまで知る必要はないかな。あくまで君は僕'、であれば言い訳だしさあ。

えっ、何？「」になつてゐるって？ それを続けたら「」だけで行が埋まつてしまつて？ それは大変だ、急いでこのパターンを止めないと。

とちやつかり茶目つ気を入れておくのもキャラを引き立てることさ。堅物オンリーキャラとか萌えキャラとか燃えキャラとかさあいつぱいパターンあるよね？ でもね僕が思うんだけど、どれも特化すると終わる気がする・・・って、そんな話を聞きたい訳じゃない？

連れないな、君は。本当に釣れないよ。

まあ、いいや、本題？ だったけ・・・ってもういいよねだいたい分かったよね？

次ぎ行こう、次ぎ。

ラジオネーム：ペンタゴンって何？ さんから頂きました。ちなみに五角形です。

『どうして、ルリカはいつも簡単に能力を手に入れたのですか？』
だって。

君はどうしてだと思つ？

なるほどねえ。間違つてゐるようで間違つていないのだけど間違つてゐるな。

・・・ややこしいっていうなよ。茶目つ気だよ。

正しいのかつて？ いや、今のはさあ、なんていうの流れつてやつだったからさあ、あんまり意味はないんだよね。

閑話休題。

能力を手に入れたねえ……。この質問はダメだな。だってこれこの一連の騒動のフィニッシュだよ？ 言える訳ないじゃん。ハイ次ぎ。

ペンネーム：僕は神だ。　さんから頂きました。有難うございます。

・・・今度はペンネームになってるって？　いちいち細かいよ君。『どうして、椎奈ちゃんはあるなに天使なんですか？』

確かに。あの子は凄いいよね。紛うこと無き天使だよ。僕、もさあ、幼少の頃すつごく愉たのしそうだった。・・・あつ漢字間違えた。すつごく楽しそうだった。

・・・なんだよ、変な目で見るなよ。別にそんないやらしい意味で使ったんじゃないよ、ただの間違いさ。

なにになに？　そろそろ終わり？　ああ、ネタが尽きた？　・

・違う？　一連の騒動に対する意見はここでは公表できない？　あつそ。だつたら仕方ないね。

はいここで貴き之曾良そいのラジオ騙りでした。次週きのの放送は不定期です。ではさようなら〜」

「・・・・・・・・」

「まだ僕に喋らせるつもり？　三点リーダーで上手く繋いだね、まったくもって不愉快だよ。まだ四百字ぐらい残ってるからかな？

まあ、いいや。

じゃあ、最後にちょっと話しておこうか。これからのことについてさ。

君には今まで通り僕の下で働いてもらうよ。君ほどの『普通』は中々いないからね、僕としても『普通』に干渉するときはとても重要するんだよ。

特に君のそれなんかチャームリングだね。

名前なんだっけ？　・・・くりむぞん・ぶれいかー？　何それ？

中二病患者？

・・・嘘だよ嘘。

連れないなあ、本当に釣れないよ。

さて、こんなたわいもない話だけだとつまらないだろうから、君も知らない物語を教えてあげるよ。

・・・話変わるけど、『君も知らない物語』って凄いいい歌だよね。そう思うでしょ？

恋愛サーキュレーションの方がいいだって!?

なんだよ合わせてよ。まったくもって連れないなあ、本当に釣れないよ。

もういい、本題に入るよ。

『鷹狩悠久』さんについてさ。

そう訝しむなよ、君のお兄さんじゃないか。あの人はあの人で結構兄弟思いなんだよ？ 君は全く知らないだけでお兄さんが苦渋と痛みと泥水を啜りながら頑張っているんだよ？ お兄さんのこともっと大切にしないとさあ、死んでから後悔するものなんだよ？

・・・というかなんで知ってるって？

うん、そこに最後に結びつけたかったんだけど先に言っちゃおう？ 字数もだいたい埋まったし。

じゃあ、カミングアウトしておこうか。琉球君」

「・・・」

「悠久さんはねえ・・・」

僕が魔外師にしたんだよ。

驚いたかい？

悠久さんは僕が成らせた、僕の手駒なんだよ。

彼は気づいてないだけでね。

あくまで、『僕達』の手駒さ。

最終的に捨てられる、捨て駒だ。

1 - (12) 綾城崩壊(後書き)

はい。仙國です。お読み頂き有難うございました。・・・ごめんなさい。色々と都合でこうなりました。勉強なんて、勉強なんて・・・爆発してしまえ！ と嘆いております。皆さんもお仕事頑張ってください。では。

サンタさん図書券ありがとう！

綾城 夜

「椎奈様はどこだ？」

綾城あやきましひ真城は緊急用のテントから顔を覗かせながら外にいた見張りに訊いた。

「はっ、椎奈様は現在西の方の特別テントにいらっしやいます。ご用件がございましたら私が参りますが？」

「いや、その必要は無い」

「では」

「ああ、下がっていいぞ。有難う」

真城はテントの中に再び身体を入れた。中はそこそこ広く、現在は真城を含め総本家の三役でこのテントを使用しているところだった。ちなみに椎奈は個人専用テント。

真城はこういった戦でよくある『強襲』に備え、深い眠りは摂とらずうたた寝程度で今晚を過ごす予定だった。また、現在雨が降っているので『人』を見つけることは困難極まりない。嚴重な警備をするように命じてはいるが、安心はできない。そこで椎奈との連携を取ろうと先程考え至った。

（椎奈は何か精神的なダメージを負ったか……。肉体的ならば回

復魔術でなんとかなるが、心となるとケアの仕様が・・・もし、今晚戦闘があるうものなら、もしかしたら椎奈は・・・)

真城の考えは杞憂に終わる。

ただしかし、『戦闘』という発想は間違いで、予測でもなく現実となる。

綾城から数百メートル離れた地点 木と川が作り出した憩いの場

ルリカは熟睡。

貴之はうたた寝だった。

そんな二人にある人物が足音を立てる。その人物は貴之がよく知り、ルリカとは犬猿の仲で、元気いっぱいの子だった。天真爛漫な女の子だった。

貴之はすぐさまその気配に気づき、戦闘態勢に移る。ルリカはすでに魔術式を展開し始めている。

「誰だ!？」

ルリカの声。

その声に反応したのは制服姿で胸にウサギのマスコットの的なものをつけた・・・

「貴之先輩・・・だったんですね。綾城を貶（落と）したのは、私を騙（だま）していたのは、『普通』を騙（かた）っていたのは!」

「来ると思っていたよ。綾城彩乃」

「貴之先輩はここで私が終わらせませす」

魔術師貴之憶良を知る一時間前

「何これ・・・」

彩乃を出迎えたのは温かい眼差しでも、大好きな義姉でも、高城でもなく、廃り壊れ果てた『綾城』だった。

「一体・・・真城様、真城様がいるわ、速く事情を聞きましょう彩乃！」

「ああ、うん」

彩乃は半ば粹美に引き摺られるようにして真城の下へと駆け寄った。途中には瓦礫が多くあって、足場をしっかりと確認しながら進んだ。

真城は椎奈捜査の命令を出したところだった。

「真城様、これは一体・・・」

「？ 豊穰粹美、か？ どうしてここに」

「ああ、それは・・・」

粹美はウィザウトとのやり取りを真城に話した。真城は少々その

独断に訝しんだが、すぐに『真城らしい』柔らかい笑顔を戻し、粹美に微笑んだ。

隣にいた彩乃に真剣な表情で話を始める。

「この惨状に呆気にとられているようだな」

「ええ、これは何があった・・・いや、『誰』がこんなことを。綾城に侵入してこんなことをできる魔術師なんて、『普通』は・・・」

「貴之憶良」

「はいっ？」

彩乃は真城から発せられた言葉の意味を理解できなかった。

「きの？ キノ？ きの・・・」

「そいつの名前はキノオクラですか？ 聞かない・・・いや、昔綾城と政略結婚」

粹美は綾城と貴之との関係を風に乗せるように発していく。
が、

彩乃には聞こえなかった。否、聞きたくなかった。

(きの・・・せんぱい？ 同姓同名？・・・きの、せんぱい)

彩乃は駆け出すことも騒ぎ出すこともなく、ただただ俯いて粹美の話を聞き流していた。そこに込められた想いは、『裏切られた』ということだけだった。

学校生活、放課後の話・・・

それだけではない、楽しいことやおもしろいこと、悲しい時も悔しい時も、話し相手で遊び相手で・・・
憧れだった。

憧れの先輩で、大好きで大好きで大好きだった、先輩、『貴之先輩』。

そして、その『貴之先輩』は今、家族を、友達を壊していた。どうして理解しようか、どうして理解できようか、どうやって理解しようか。
否。

できないでしょ。

そして、憧れの先輩

貴之は彩乃を見て『黒』でいつでも攻撃できるように心と体と魔術の準備を始める。ルリカは展開している魔術式を更に拡大させていく。

彩乃は二人を見て、悲しみと怒りの目を向けていた。
憶良に。

「貴之先輩、どういうことですか！？ 私はあなたを『ただの人』として・・・」

「それはお前の勝手な思い込みだろ」

「違う！ 私は貴之先輩のことが好きだった。『普通』にかっこいい先輩として、『普通』に格好いい姿を見て、『普通』に私に接し

てくれる先輩として……」

「それを思い込みだと言っているのだよ、悪女。貴様は貴之君のことを知らない。いや、違う。『知ろうとしなかった』。ただそれだけだろ？ 貴之君のことを調べようと思えばいくらでもできたはずだ、それを貴様はしなかった。それで貴之君に逆上するなよ、貴様が九十九パーセント悪いだけだろうが」

彩乃は今にも泣き出しそうな目をルリカに向け、強く睨んだ。
ルリカはその目を見ても何一つ顔色を変えずに見返す。

「貴之先輩は私が『綾城の人間』だって知ったうえで私と仲良くしていたのですか？」

「ああ、そうだ。『お前に罪はない』。俺の対象はあくまで綾城椎奈、奴一人だけだ。まあ、何度か殺そうかと思ったこともあるにはあるがな」

「……そんな」

「彩乃！」

その女声が彩乃を一気に引き戻した。彩乃ははっと気持ちを入れ直すとともに貴之と向かい合った。そこには揺るぎない信念があった。

その声を掛けたのは豊穰粹美。彩乃のメイドにして執事にして最も信頼する友達、豊穰粹美。彼女は彩乃の折れかけた心に再度『約束』した信念を吹き込んだ。

「しっかりしなさい！ あなたは確かに『綾城』を取ったはずよ！

あなたにはどちらかを選ぶだけの時間があつた。そして『憧れ』よりも『家族』を取つた。養子とはいえ、『家族』を取つた。それをあなたは忘れてはいけない！」

「・・・はっ、うん」

その返事は少しばかり彩乃らしくなく、弱々しかった。粹美、そして彩乃は魔術を発動できるように構える。

「彩乃はあつちの小さい方を・・・」

「小さい方言うな！ 私は身長が少々低いだけだ！ ちなみに髪はピンクがかっている」

「文章化されていた場合初のカミングアウトだな。な、ドちび」

ルリカは火の魔術を貴之に向けて放つた。貴之はそれをひよいつと躲すが、その魔術が後方の川に衝突した瞬間に川の水が沸騰し、水蒸気爆発を起こす程の魔術だつた。その規模は大きく、貴之を含めた四人に土砂降り雨をもたらす。

「お前やつぱり馬鹿だろ」

「五月蠅いやい。貴之君が訳のわからんことを言うからではないか！ 罵詈雑言を言うのなら貴之君らしい、珠で完璧で穢れないこの心を決り傷つけるような言葉にしてくれ！」

「腐卵臭が」

「ぐう~~~~！ いいねえ」

「いいのかよ」

この茶番の中でも彩乃と粹美は警戒態勢を緩めない。いつでも攻撃できる態勢のままだった。彩乃はゆっくりと貴之にすり足で向かって行く。そしてその途中、粹美にこう言う。

「貴之先輩は私ができる。あの人は私の憧れで私にとって大切な人。これ以上感情をむちゃくちゃにされたくない。私がここで止め……いや、殺すわ。綾城、私の家族もあの人に殺されているんでしょ？ 家族にモブキャラで死んでいいキャラなんていない。そんな人を家族とは言わない。だから、家族だから」

「そう。あの人に躊躇いや戸惑いとかはないのね」

「ええ、殺す。殺さなくちゃいけない。それが私の……」

「……………」

ルリカは粹美に体勢を向け、指でくいくいと挑発し貴之から距離をとる。

粹美はそれを見て、

「ついで行く……と思ってるのばーか」

「えっ、マジ？」

粹美はここぞとばかりに彩乃にアイコンタクトを送って貴之を攻撃する。

粹美の雷系統の電球魔術に彩乃の『透明な液体』。

そして、それは貴之の前で防御魔術によって封じられる。しかし、その魔術は貴之が発動させたものではなく、ルリカによって発動された魔術だった。

ルリカはその攻撃を止めた。

・・・と、勘違いし貴之の前に立つ。

そしてその勘違いがあらわになる。

「おい、貴之君、なんか私の魔術が」

「破られて・・・溶けているな」

「だよな」

貴之とルリカは防御魔術が破られる寸前で後方に飛び、その『溶かす』ものを躲す。ルリカは空中後方支持回転三回回りで河原に着地する。

貴之は魔術を『黒』を足場としてゆっくりと着地する。

「彩乃！」

その声は「たたみかけるぞ」という意味を含んでいたことを彩乃は理解していた。

粹美は水の魔術に雷の魔術を混ぜたものを津波のような形態で発動させる。彩乃はその魔術を殺さないように上空から『透明な液体』を攻撃に使う。

「下の攻撃は俺がやる。上の魔術はお前が『奪い獲れ』」

「ああ、分かっている」

貴之は『黒』を鬼の腕に形作ってその攻撃をなぎ払う。ルリ力は大量の透明な液体を外に漏れないように、大量な魔術師と戦闘の時に使った魔術を使い収束させる。

魔力変換効率

「・・・んっ？ あっ、あはっ！ これは、この刺激は・・・」

「いやな言い方するな」

「いやらしく聞こえるのか？ まったく思春期だなあ、貴之君は。いや何、この魔術の特性が分かったのだよ。これは、『毒』だな」

「毒？」

(バレた・・・)

「解説前に返しておくぞこれ」

見ると彩乃の『毒』は全て無くなっていた。そしてその代わりに返されて来たのが『何か分からない力』だった。

彩乃は防御魔術を見えない『何か』に向けて展開する。

そしてその『何かの力』と魔術がぶつかり合って衝突音を立てる。その膨大な力に彩乃は押される。それに粹美は補助をだす。

「っ」

「何なのかしらね、これ。魔術でも魔力でも違うような・・・」

そこでようやくルリ力の力を止める。

「うーん、貴之君。提案なんだが」

「俺も丁度考えてた」

「今日はザギンでシースーでマイウーしてフライ・アウェイするか」

「しばくぞ、お前」

貴之は『黒』を繊細に動かし、十メートル越えの『刀』を作り出す。その刀をルリカの首に突きつけて持ち上げるようにしてルリカの首を上げる。

「貴之君、刺さってる、刺さってる」

ルリカは首の刀を右手で指さしながら左手をぶんぶん振り回す。貴之はそれを見ると、容赦無くルリカの首を切り落とした。

「なっ、何を！」

「一体何なのよ、あなたの先輩ってやつは!？」

「私はあんな貴之先輩見たことないし、元々、貴之先輩が魔術師としてどこまでまともだなんて知らないわよ!」

彩乃はまるで時がスローモーションになって、ゆっくりと落ちていくルリカの首を見つめていた。粹美も何が起きているのかを把握出来ないでいた。

貴之は落ちていく首を見て、

「つまらんマネを・・・」

と、呟いた。

「そう言うな、貴之君」

「！」

「！ 変態生徒会長！」

ルリカが現れたのは彩乃と粹美の後方。

彩乃は瞬時に透明な毒を放つ。粹美は防御術式を展開させる。

ルリカにはそんなことは関係ない。魔力を吸収し、それを変換させ、範囲内であれば『力』加減をも操る能力。

魔力変換効率

対象は、豊穰粹美。

その瞬間に彩乃は数多の考えを張り巡らせ、その違和感を頭の中で高速処理していく。それは明確ではないが、確かな違和感。

(・・・粹美が危ない。いや、なに？ 違う。そうだ、なんで無防備だった、『私』を狙わなかった？ 明らかに私の方が魔術師として上だということもいつなら分かっているはず。こんなビッグチャンスをなぜ、粹美に・・・)

「とでも考えていたのか」

その声は聞き慣れた優しくも、どこか楽しげな声が、入れ替わったものだった。ただ音源は同じ人物。よく知っている人間。否、魔

術師。

今寸前まで見つめていた魔術師、一瞬のことだが隙を作ってしまった。どこかで油断していた。

私が綾城のナンバー3だから？

違うなあ。

私はどこかで『見ないこと』にしていたんだ。

「じゃあな、一瞬の隙が全てを終わらせる……」

「そうですね、私はどこかであなたを……」

そこで彩乃の意識は奪われた。

暗いくらい闇に落ちていく。

但し、彩乃はどこかでほっとしていた。

なぜ？

なんでほっとしているの？ 殺されるのに？

ばっかみたい。

暗い空が更に暗くなっていく。

ああ、なんて言えばいいんだっけ、こういう時ってさ。

こうでも言っておこうか。

「お姉ちゃん大好きだよ。いつまで……も……」

あれ？ なんか違うな。

まあ、いつか。

『彩乃ちゃん、心配しないで。君はまだ【ストーリー】に必要なか

らさ。今日は安心して休んでね。

長旅で疲れただろ？』

1・(13) Dark Friendship(後書き)

Oyomita dakia rigatou gozaimasu.
・と、タイトル英語版にしてみました。前話は大変失礼な回になっ
てしまいましたが、今回のこれがあつたので……。ごめんなさい。
と、ここで謝っておきます。さて、この第一章も終盤に入りました。
最後の最後に「マジかよ……。こんなこと小説でするな」という声
が聞こえてくるような台詞を『とある登場人物』に言わせたいと思
っております。では。

1 - (14) 騙されて、懂れて

河原 in 森林

「・・・む？ おい、起きたぞ貴之君。いいのか？ こんなところに寝かせて置いて」

「このごろ倒置法の台詞が多いな。聞きづらいぞ」

「るくてついにぶしゅじんせたきんてくーわとつねーみーどはで、いなたかし？ かうとんほ？ いなはしばどよやい・・・かしばどよとだんへのこ、ぞいなたつうかなかなのなんそ？ るいき？ にな、なるいてれきがくんいのーたんりぶ」

「なんて言っただよ、馬鹿。いや、ある意味天才か」

貴之はその言葉を聞いて罵詈雑言を投げかける。が、貴之も貴之で・・・

「ああ、ようやく処理できた。プリンターのインクが切れているな、何々？ 黄色？ そんなの中々売ってないぞ、この辺だとヨドバシか・・・いやヨドバシはない？ 本当か？ 仕方ない、ではドーミーネットワーク店北千住支部に行く・・・って全く関係ねえじゃねえか」

「おお、よくできました。ってか私そんなこと言ってたのか、貴之君は凄いなあ！」

「分かってなかったのかよ。意味分かってないのによくまあ、こんな長文を作れたな」

「天賦の才」

「てんぷらのかい？ 天ぷらの改？」

ルリカは一瞬ボケたのかどうなのか戸惑ってしまった。

(これが聞き間違いなら、『貴之君耳は念仏か！？』という二段突っ込みボケをお見舞いできるし、もしも、わざとなら『天ぷらの改！』って衣を改めたというのか！？』という古典的な突っ込みに転じることができる。・・・どっちだ、どっちなんだ！)

「貴之先輩おはようございます。ここはどこですか？」

そこで間が悪く、彩乃が起きる。

ルリカはここぞとばかりにわざとらしくヘッドスライディングのボケを見せる。・・・無表情で。

が、そんなルリカのがんばりも虚しく、眼中にないように貴之と彩乃は会話を始める。

「おはようございます。どうやら悪い夢を・・・夢じゃない、ようですね」

「ああ、夢じゃない。紛れもない現実で真実で事実だよ」

「粹美はどこですか？」

「粹美？ 誰だそれは」

貴之は戦闘の意識はないように話しかける。

貴之は木にもたれかかるようにして座っている。彩乃は貴之の足下に寝かされていた。彩乃にはコートが掛けられていた。

彩乃はコートの端をぐつと握りしめて貴之を見た。そこには貴之の表情を窺うような表情だった。

貴之は、柔らかな笑みだった。

学校で見せていた笑顔。

だが、彩乃は分かっていた。

この笑顔が偽物であると。騙^{かた}っているだけだと。

「それは、それは一体誰の笑顔なんですか！ 私の憧れの貴之先輩ですか！？ 私の大好きな貴之先輩のものですか！？ それとも、それとも・・・魔術師としての、偽りの笑顔、なんですか・・・」

「・・・」

貴之は表情を引つ込めて、『感情を殺した』。

そして遠くに見える、なぜかヘッドスライディングしているルリカにあっちに行くように、追い払うように手を振る。

ルリカはそれにむすうとすると貴之に小石を投げた。

貴之はそれを『黒』で受け止めると投げ返した。

小石は見事にクリーンヒットし、目をぐるぐると回しながらルリカは奥へと消えていった。

「避けられるものをわざわざ受けやがって、馬鹿が。で、質問に答えればいいのか？」

「・・・ええ」

「そのことを話す前に一つ教えておいてやる。」

綾城を壊したのは俺だが、綾城を『殺した』のは椎奈だけ？」

「はっ？」

「だから、綾城を殺したのは綾城椎奈。綾城を壊したのは俺だ。綾城椎奈は民を殺し、貴之憶良は城を壊したんだよ。理解したか？」

彩乃はぼうつとその声を聞いていた。その、態度は貴之憶良のこ
とを聞いた時と同じ様子だった。

もう彩乃に理解できるだけの『気力』はない。理解できるだけの
『頭』はあっても『心』がない。

この『綾城動乱』に取り残された一人に成り下がっていた。ただ
一人でこの『動乱』を駆け抜けなければならない。

そんな気がしていた。

貴之の話を全部信じるつもりは毛頭ない。むしろこれも偽りでは
ないか、そう思っていた。

・・・かった。

「もう、分かっているんだろ。綾城の人間を殺そうとすれば、そこ
の『当主』がそれを全て駆逐すると。こんなことができるのであれば、
それは『当主』が止められない者・・・は魔業界にいない。という
ことは、止めない者だけだろ」

「そんなことはない！」

「本当にそう思っているのか？」

彩乃は何も言えなくなった。起きる時に貴之によってかけられて

いたコートをはね除ける。

そして、ただ不満を押しつけるためだけに貴之に提案する。否、巻き込む。

「貴之先輩、私と一対一で勝負しましょう」

「無駄な魔力を消費・・・いや、やってやろう」

貴之はそんな『無駄』にかかわる必要も相手をする必要もなかった。ただ、貴之自身も『自己満足』のために立ち上がる。

それは、あくまで彩乃に対する謝罪の意味だった。深い意味は無い、ただの『自己満足』だ。

彩乃はすでに構えている。

貴之はただ立ち尽くす。

「では、いきます」

彩乃は自分の中で最も強力な魔術、『クリスタル代償に（・）ファイナレ餞を』を発動させる。

その魔術は花を模した魔術で、下からは潮、正面からは竜巻、上からは津波、そしてそれら全てから『空気感染』する原子一つで死に至らしめる透明な毒の魔術。

テーマをつけたのは彩乃の愛する姉、綾城椎奈だった。

魔術師に餞を。

「この魔術は死体すら残しません。全てを溶かし、全てを侵し、全てを飲み込む猛毒です。範囲はそうですね貴之先輩が逃げられるほど小さくはありません。貴之先輩、あなたは私を騙しました。この魔術のテーマである餞を・・・」

「……だから、なんで私は騙されて、騙られて、嘘を吐かれて、偽られて、負けたのに。なんで安堵するかなあ」

視界は眠りにつくように潰されていく。

「……貴之先輩？」

黒の津波にのみ込まれて見たのは自分を騙していた、憧れの貴之。

「……」

(なんて、言ってるんですか)

「め……」

(なにを、なにを……)

彩乃はその断片的に伝わってくる小さな、小さな聞き取れるのか、聞き取れないのかぎりぎりの小さな音。

それを、彩乃は聞き取る。

「じめん!! お前は」

聞こえる、必死な声。絞り出すようにはき出される声。

彩乃はそこで消えかけていく意識のなか、うっすら笑って、

「……馬鹿。今更、こんな時に、何言っているんですか。どうせその言葉も嘘なんでしょ? でも」

憧れちゃうじゃないですか、馬鹿な先輩。

夢……の中……。

私はいつから騙されて、いつまで騙されていればいいんだろう。初めて騙されたのは、子供の頃。

それが一生騙され続ける人生の始まり。

それが私の人生。

家族に騙されて、兄に騙されて、先生に騙されて、彼氏に騙されて、友達に騙されて、憧れに騙された。

はあ。

どれだけ私は馬鹿な女、いや人間なんだろう。

何回騙されれば、私は人を疑って蔑ろにできるのだろう。

いつなの？

お姉ちゃんさえも私を騙していたのかもしれないと今は思ってしまふ。綾城を壊滅に追い込める人間は魔術師は根底から存在しない。

……はずだ。

理由は簡単。最強という言葉で表せない実力者、無敵、綾城椎奈。彼女がいるから。

彼女一人いれば魔術師が百名攻めてきても、軍隊を組んでも一蹴する姿を思い浮かべることができる。

じゃあ、なんで今回はこんなことになっているの？

理由は簡単。最強という言葉で表せない実力者、無敵、綾城椎奈。彼女が『何かした』から。

否、『何かを許した』から。

それは分からない。でも、今の現状から考えれば『綾城椎奈が何かをした』としか考えられない。

貴之先輩を信じる？

違う。

そんなことじゃない。間違ってる。

。。。。

私は誰に騙されて、誰を信じればいいの？

『その答えは簡単さ、全部信じればいいんだよ彩乃ちゃん』

全部？

お姉ちゃんや、貴之先輩を？

『そうだよ。君が疑わなくちゃいけない人物はただ一人さ』

ただ一人？ お姉ちゃんの笑顔も、貴之先輩の笑顔も信じて、疑うのはただ一人？

『反復はしない。彩乃ちゃんは今を受け止めて、過去を信じればいいんだ』

過去は私にとって地獄でしかない。そんな地獄を私は信じて生きて行けと言うの？

『そうさ、彩乃ちゃんの過去は彩乃ちゃんの事実なんだ。事実を変えられない。真実は変えられたとしても事実は変えられない。だから信じるんだ、自分を、過去を。そして今を受け止めるんだ』

。。。いやだ、あんな地獄を信じたくない。

私は、私は『騙されたままでいい』から、

『それは駄目だよ、彩乃ちゃん。彩乃ちゃんはどうやら自分の過去

.....

『そう黙らないでよ、僕はただ見せてあげただけだよ？ 憶良の過去を。・・・ちよつと耐えられないものだったかな、ごめんごめんうっん、そろそろいい時間だし、帰してあげようかな、じゃあね』

『あつ、言い忘れてた。一つだけ彩乃ちゃんに言うておかないといけないことがあったんだ。まあ、【ストーリー】に直接関わることじゃないんだけどさ』

人はみんな平等さ、誰しもが平等なんだ。

彩乃ちゃんだけが『可哀想』じゃないんだよ。

Real

「貴之君、そいつ殺したのか？ 貴之君の偽善もいいところだが、私達の目的を・・・貴之君の目的を達成する場合、そいつを生かしておくことはデメリットでしかないぞ」

「黙れ。こいつは俺にとって可愛いくて、大切な後輩なんだ。お前よりも付き合いの長い奴だよ。それにこの目的は綾城椎奈の抹殺だ。こいつは綾城の人間ではないしな」

「あつそ、好きにすればいいぞ」

川の反対側からぴよんぴよん飛び跳ねながら、ぐったり気絶している彩乃を抱えている貴之のもとに駆け寄った。

貴之は抱えている彩乃を先程まで寝ていた元の場所に戻した。そしてコートを掛けておく。

それを見てルリカは・・・

「ほう、これが噂に聞くツンデレというやつか、珍しいものを見る事ができた、できることなら天然記念物に登録したいなあ。・・・ちよっと待てよ、これはツンデレじゃない！ ボツ、ボコデレだ！」

「だいたい想像が付くが・・・」

「その通り！ 『肉体的にボッコボコにして行動不能にしてから一方的にデレる』の略だ！ わっ、私はまさかここに二千十二年度の流行語を作り出してしまったのか・・・恐るべしルリカ！」

「自分で言うな。そもそも、肉体的にボコるってその時点で警察に通報されるだろうが」

貴之は降り始めている雨がかからないように彩乃の位置を調整してから立ち上がった。そしてルリカを見て、「行くぞ」と一言呟くと歩き出した。

「魔力は大丈夫なのか？」

「ああ、『^{ふるい}篩』は綾城を運営している魔術を使ったからなほとんど自分の魔術を使っていない。本当は今晚に仕掛けたかったが、もうこうなった以上『進め』だな。気づかれていないかもしれないがな。どっかの気の利く馬鹿が音は漏れないようにしてくれたいだけだ」

「ら

「ほう、それは気の利いた天才がいたようだな」

貴之はこつんとルリカの頭に拳を置いた。

1・(14) 騙されて、憶れて(後書き)

お読み頂きありがとうございます。次の話は「テンポがよすぎる」話となっております。この「テンポがよすぎる」というのは、話上「都合が良すぎる」ものです。それもいつからか言っている誰かに解決していただくので・・・よろしくお願いします。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8890x/>

魔法少女物騙り

2012年1月4日10時49分発行